

櫛形町文化財調査報告 No.17

# 枇杷 B 遺跡

主要地方道韋崎櫛形豊富線内枇杷B遺跡発掘調査報告書

1998

櫛形町教育委員会  
山梨県甲府土木事務所

# 序 文

櫛形町は甲府盆地の西部に位置し、櫛形山の山麓に発展した町であります。町内では2万年近くまえから人々の生活が始まり、以来長い歴史のなかで常に峡西地方の中心として栄えてきました。

現在櫛形町では、町の総合的長期計画のもと、「美しい自然、美しい街なみ、美しい心」をスローガンに新たな世紀を目指した町づくりをめざし、さまざまな施策を立案、実施しています。櫛形町東半部では甲府盆地西部を縦断する中部横断道、甲西バイパスの建設に伴い新たな発展が期待されています。今回調査された枇杷日遺跡も、この甲西バイパスと櫛形町内を結ぶ様に計画された主要地方道の建設に伴うものであります。甲西バイパス建設に伴って多くの遺跡が山梨県教育委員会の手によって調査され、これまであまり遺跡が確認されていなかったこの地域においても、山梨県の歴史を塗り替えるような重要な遺跡が発見されていることはご存知のとおりです。

幸い、今回の調査においても多くの重要な事柄が発見され、従来の知見に加えられるべき新たな事実が数多く確認されましたことは、本書に述べる通りです。この調査の結果が、地域の歴史に新たな事実を加える資料となり、さらに地域の新たな発展の糧となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査にご理解をいただきました事業関係者の皆様、また調査にご指導・ご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げる次第です。

平成10年3月

櫛形町教育委員会

教育長 藤巻 進

## 例　　言

1. 本報告書は、山梨県中巨摩郡備形町小笠原字枇杷1841他に所在する枇杷B遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、主要地方道亞崎・柳形・豊富線建設事業に伴うものである。
3. 発掘調査は、山梨県甲府上木事務所からの委託を受け、備形町教育委員会が実施した。

調査にあたった組織・調査参加者は以下の通りである。

調査主体者　備形町教育委員会 教育長　藤巻　進  
調査担当者　清水　博（備形町教育委員会 文化財企画）  
調査員　若林初美・小口妙子（整理作業時）  
事務局　備形町教育委員会文化財係  
調査参加者　相川春美・桜田和子・桜田定子・桜田みさえ・山井伴一・入倉妙子・入倉とらえ・長沼豊子・川崎しげ美・神田久美子・アレツクス・イエム・西海秀人・中込衛・保坂公也・時田わか・名取みよ子

4. 発掘調査は、平成8年10月1日～平成9年3月31日まで6ヶ月間に亘って実施した。また出土品の整理、報告書の作成は平成9年7月1日～平成10年3月31日まで断続的に行つた。

各区の調査面積と調査期間は下記の通りである。

I区 1,200 m<sup>2</sup> 平成8年10月1日～同年11月21日  
II区 1,160 m<sup>2</sup> 平成8年11月21日～平成9年3月31日  
III区 270 m<sup>2</sup> 平成8年11月21日～同年12月27日

一方、出土品等の整理作業は下記の通り行つたが、実質的整理期間は約5ヶ月である。

平成9年7月1日～同年10月31日、平成10年2月1日～同3月31日

5. 本報告書の編集は清水がおこなった。報告書作成にかかる執筆及び業務分担は下記の通りである。

第Ⅰ～Ⅲ章　　清水  
第Ⅳ章 第1節　　遺構　若林・清水  
　　遺物　清水  
第Ⅳ章 第2節　　小口  
第Ⅴ章 第1節　　清水  
第Ⅴ章 第2節　　小口  
　　遺物の実測　　弥生・古墳時代の遺物 小口　　平安時代の遺物 清水・若林  
　　図版作成　　若林・小口・神田・名取  
　　写真撮影　　清水  
附　　章　　川崎テクノリサーチ（株）分析を委託したものの成果である。同社分析・評価センター  
　　岡原正明・伊藤俊治氏が執筆したものを清水が抜粋した。

6. 発掘調査に伴う基準点の設置は、隣接地に於いて発掘調査を実施した若草町教育委員会の基準点を利用した。
7. 発掘調査及び本報告書の作成にあたって、下記の諸氏・諸機関からご指導、ご協力をたまわった。記して謝意を表する次第である。  
　　小野正文・出月洋文・森原明廣（山梨県教育委員会学術文化課）、新津　健・中山誠二・小林康二・高野玄明・吉岡弘樹（山梨県埋蔵文化財センター）、田中大輔（若草町教育委員会）、山梨県教育委員会学術文化課、山梨県甲府上木事務所、若草町教育委員会。
8. 本調査によって得られた出土遺物、図面並びに写真等の諸記録は備形町教育委員会において保管している。

## 凡　例

1. 本報告書に使用した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「小笠原」、檍形町発行の1/2,500「檍形町平面図」である。

1. 遺構実測図等現場において作成した図面はすべて国家座標第VII系によっている。

1. 本報告書に於ける遺構・遺物の挿図及び表の指示は下記の通りである。

### 1) 挿図の縮尺について

挿図の縮尺は図下に記してあるが、基本的に次のとおりである。

遺構配置図 1/400　　堅穴住居址 1/60　　同竈 1/30　　同炉 1/30　　掘立柱建物 1/60

土壤 1/30　　ピット 1/60　　ピット群 1/150　　溝状遺構 1/120　　土器溜まり 1/60

土器実測図 1/3　　石器実測図 1/3　　鉄製品実測図 1/2

### 2) 遺構実測図の記述、挿図について

遺構実測図の水系レベルは海拔高を示し、単位はmである。

遺構実測図中の方位は真北である。従って磁北は約6° 10' 西偏している。

堅穴住居址の主軸方位は、竈の設置された壁とその対面の壁との中軸線と真北とのなす角度である。

竈の主軸方位は、袖部の中心と煙出し部の中心とを結んだ線と真北とのなす角度である。

遺構の規模は、相対する壁の最長距離で求めている。

平面図中 - - - は床面残存部、…… は推定線を示す。

また竈平面図中 - - - は粘土範囲、…… は確認ラインを示す。

スクリーントーン及びインスタンストレタリングの指示は下記の通りである。



焼土範囲、



炭化物範囲



電構築時の粘土

遺物は大文字で遺物番号を、小文字で床面からのレベルを示す。大文字は本文、挿図、表、写真図版で全て一致する。なお小文字のないものは床面からの出土である。

遺構番号は発掘調査時の確認順である。但しI・II区とIII区では別個に番号を付している。なお報文中ではIII区の遺構・遺物についてのみその旨記している。

### 3) 遺物の記述、挿図・表について

土器実測図中の断面の表示について

土器類 白抜き

須恵器



陶磁器類



土器実測図中のスクリーントーンの指示について

内黒土師器



施釉範囲



スヌ付着範囲



土器観察表中の指示は次の通りである。

A 法量、B 遺存率、C 調整、D 胎土、E 色調、F 焼成、G その他

さらにAの法量は

ℓ 口径、b 底径、h 器高を示し、単位はcmである。

尚（ ）内は推定値を示す。

# 目 次

## 序 文

## 例言・凡例

## 目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第Ⅱ章 遺跡の概観	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の方法と基本層位	6
第1節 調査の方法	6
第2節 基本層位	6
第Ⅳ章 発見された遺構と遺物	11
第1節 平安時代の遺構と遺物	11
1) 堅穴住居址	11
2) 掘立柱建物遺構	30
3) 柵列状遺構	32
4) 溝状遺構	35
5) 土壙・ピット・ピット群Ⅰ	35
6) 土器溜まり2・ピット群Ⅱ	38
7) 遺構外出土の遺物	48
第2節 弥生・古墳時代の遺構と遺物	50
1) 堅穴住居址	50
2) その他の遺構	62
3) 遺構外出土の遺物	63
第Ⅴ章 小 結	64
第1節 弥生～古墳時代の遺構と遺物について	64
第2節 平安時代の遺構と遺物について	65
第3節 ま と め	69
附 章 植形町批杷B遺跡出土土器胎土の分析	71
引用・参考文献	
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 遺跡周辺地形図 [1/500] .....	2	第33図 4号孤立柱建物遺構 [1/60] .....	32
第2図 遺跡位置図及周辺遺跡分布 [1/25000] .....	2	第34図 5号孤立柱建物遺構 [1/60] .....	33
第3図 トレンチ配置図及基本土層図 [1/200・1/300・1/600] .....	7	第35図 6号孤立柱建物遺構 [1/60] .....	33
第4図 造構配置図 [1/400] .....	9・10	第36図 1号横列状造構 [1/60] .....	33
第5図 1号住居址・竪 [1/60・1/30] .....	11	第37図 2号横列状造構 [1/60] .....	33
第6図 1号住居址出土土器 [1/3] .....	11	第38図 1号～4号土壙・1号溝状造構・I区ピット1～3 [1/30・1/120・1/60] .....	36
第7図 2号住居址 [1/60] .....	12	第39図 ピット群 I [1/150] .....	37
第8図 3号住居址 [1/60] .....	13	第40図 ピット群出土土器 [1/3] .....	37
第9図 3号住居址出土土器 [1/3] .....	13	第41図 土器溜まり2・ピット群II [1/60・1/30] .....	39
第10図 4号住居址・竪 [1/60・1/30] .....	14	第42図 土器溜まり2・ピット群II出土土器 [1/3] (1) .....	40
第11図 4号住居址出土土器 [1/3] .....	15	第43図 上器溜まり2・ピット群II出土土器 [1/3] (2) .....	41
第12図 5号住居址・竪 [1/60・1/30] .....	16	第44図 上器溜まり2・ピット群II出土土器 [1/3] (3) .....	42
第13図 5号住居址出土土器 [1/3] (1) .....	17	第45図 七器溜まり2・ピット群II出土石器 [1/3] .....	47
第14図 5号住居址出土土器 [1/3] (2) .....	18	第46図 造構外出土土器 [1/3] .....	48
第15図 6号住居址 [1/60] .....	19	第47図 I区遺構外出土鉄製品 [1/2] .....	49
第16図 6号住居址竪 [1/30] .....	20	第48図 II区遺構外出土鉄製品 [1/2] .....	49
第17図 6号住居址出土土器 [1/3] (1) .....	20	第49図 III区1号住居址(古) [1/60] .....	50
第18図 6号住居址出土土器 [1/3] (2) .....	21	第50図 III区1号住居址(旧) 同炭化材出土状況 [1/60] .....	51
第19図 6号住居址出土鉄製品 [1/2] .....	23	第51図 III区1号住居址(旧) 山十器 [1/3] .....	51
第20図 7号住居址・竪 [1/60・1/30] .....	23	第52図 III区1号住居址(新) [1/60] .....	52
第21図 7号住居址出土土器 [1/3] .....	24	第53図 III区2号住居址(旧) [1/60] .....	53
第22図 8号住居址・竪 [1/60・1/30] .....	24	第54図 III区2号住居址遺物出土状況図(旧) [1/10] .....	54
第23図 8号住居址出土土器 [1/3] .....	25	第55図 III区2号住居址(旧) 出出土器 [1/3] (1) .....	55
第24図 9号住居址・竪 [1/60] .....	26	第56図 III区2号住居址(旧) 出出土器 [1/3] (2) .....	56
第25図 9号住居址・竪 [1/30] .....	27	第57図 III区2号住居址(新) [1/60] .....	58
第26図 9号住居址出土土器 [1/3] .....	28	第58図 III区2号住居址(新) 出出土器 [1/3] .....	59
第27図 10号住居址 [1/60] .....	29	第59図 上器溜まり1 [1/60] .....	61
第28図 11号住居址・竪 [1/60] .....	29	第60図 七器溜まり1 出出土器 [1/3] .....	60
第29図 11号住居址・竪 [1/30] .....	30	第61図 III区焼土址 [1/60] .....	62
第30図 1号掘立柱建物遺構 [1/60] .....	30	第62図 III区造構外出土土器 [1/3] .....	63
第31図 2号掘立柱建物遺構 [1/60] .....	31	第63図 III区出土石器 [1/3] .....	63
第32図 3号掘立柱建物遺構 [1/60] .....	31	第64図 III区出土鉄製品 [1/2] .....	64

## 表 目 次

第1表 1号住居址出土土器観察表 .....	12	第8表 8号住居址山土器観察表(1) .....	25
第2表 3号住居址出土土器観察表 .....	13	第9表 8号住居址出土土器観察表(2) .....	26
第3表 4号住居址出土土器観察表 .....	15	第10表 9号住居址出土土器観察表 .....	28
第4表 5号住居址出土土器観察表 .....	18	第11表 1号～6号掘立柱建物遺構・1号～2号横列状造構 の柱穴規格及び柱穴間距離一覧表 .....	34
第5表 6号住居址出土土器観察表(1) .....	21	第12表 ピット群Iの柱穴規格 .....	36
第6表 6号住居址出土土器観察表(2) .....	22	第13表 II区ピット群I出土土器観察表 .....	38
第7表 7号住居址出土土器観察表 .....	24		

第14表	ピット群Ⅱピット規模	38	第24表	Ⅲ区2号住居址(Ⅰ)出土土器観察表(2)	59
第15表	Ⅱ区上器溝まり2・ピット群Ⅱ出土土器観察表(1)	43	第25表	Ⅲ区2号住居址(新)山上土器観察表(1)	60
第16表	Ⅱ区土器溝まり2・ピット群Ⅱ出土土器観察表(2)	44	第26表	Ⅲ区2号住居址(新)出土土器観察表(2)	61
第17表	Ⅱ区土器溝まり2・ピット群Ⅱ出土土器観察表(3)	45	第27表	Ⅰ区土器溝まり出土土器観察表	62
第18表	Ⅱ区上器溝まり2・ピット群Ⅱ出土土器観察表(4)	46	第28表	Ⅲ区造構外出土土器観察表	63
第19表	Ⅱ区土器溝まり2・ピット群Ⅱ出土土器観察表(5)	47	第29表	遺構別出土土器観察表(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)	66
第20表	Ⅱ区造構外出土土器観察表(1)	48	第30表	住居址一覧表	68
第21表	Ⅱ区造構外出土土器観察表(2)	49	第31表	掘立柱建物遺構一覧表	68
第22表	Ⅲ区1号住居址(古)出土土器観察表	52	第32表	土器片胎土中に元素存在	72
第23表	Ⅲ区2号住居址(Ⅰ)出土土器観察表(1)	56	第33表	土器片胎土中の元素存在比	73

## 写真図版目次

- 図版1 1号住居址全景 1号住居址竪 1号住居址遺物出土状況 2号住居址全景 3号住居址全景 3号住居址遺物出土状況 3号住居址遺物出土状況(部分)
- 図版2 4号住居址全景 4号住居址竪 4号住居址遺物出土状況(部分) 5号住居址全景 5号住居址竪
- 図版3 5号住居址竪周辺遺物出土状況 5号住居址竪内遺物出土状況 5号住居址竪遺物出土状況(部分) 5号住居址竪周辺遺物出土状況(全体) 5号住居址竪遺物出土状況
- 図版4 6号住居址全景 6号住居址竪 6号住居址遺物出土状況 6号住居址遺物山上状況(部分) 7号住居址全景 7号住居址竪
- 図版5 8号住居址全景 8号住居址 9号住居址遺物山上状況 9号住居址竪周辺遺物出土状況 9号住居址位物山上状況(部分)
- 図版6 9号住居址全景 9号住居址竪 9・10号住居址全景 11号住居址全景 溝状造構
- 図版7 2号掘立柱建物遺構 4号掘立柱建物遺構 5号掘立柱建物遺構 6号掘立柱建物遺構
- 図版8 土器溝まり2下層ピット群 土器溝まり2遺物出土状況 土器溝まり2遺物出土状況(部分) 土器溝まり2遺物出土状況(部分)
- 図版9 Ⅱ区北より梅形山を望む Ⅱ区全景(南より) Ⅰ区深堀トレンジ断面 Ⅰ区作業場景
- 図版10 Ⅲ区1号住居址(新)全景 Ⅲ区1号住居址(古)(ⅠH)全景 Ⅲ区1号住居址(古)(ⅠH)内ピットP1,P2,P3,P4
- 図版11 Ⅲ区1号住居址(旧)炭化材出土状況 Ⅲ区1号住居址(旧)炭化材出土状況(西部) Ⅲ区1号住居址(ⅠH)炭化材出土状況(中央部) Ⅲ区1号住居址(ⅠD)炭化材出土状況(東部)
- 図版12 Ⅲ区2号住居址(新)遺物出土状況(西より) Ⅲ区2号住居址(新)遺物出土状況(北より) Ⅲ区2号住居址(新)遺物出土状況(西より) S字状口縁要素出土状況
- 図版13 Ⅲ区2号住居址(新)遺物出土状況 Ⅲ区2号住居址(新)P1遺物出土状況 Ⅲ区2号住居址(新)P1+2遺物出土状況 Ⅲ区2号住居址(新)P1+2+3遺物出土状況 Ⅲ区2号住居址(新)北西隅遺物出土状況
- 図版14 Ⅲ区2号住居址(ⅠD)遺物出土状況 Ⅲ区2号住居址(ⅠD)東部 Ⅲ区2号住居址(ⅠD)東壁素柱穴 Ⅲ区2号住居址(ⅠD)全景
- 図版15 1号住居址山上土器 3号住居址山上土器 4号住居址出土土器 5号住居址出土土器 6号住居址出土土器 7号住居址出土土器 8号住居址出土土器
- 図版16 9号住居址出土土器 土器溝まり2・ピット群Ⅱ出土土器 ピット群Ⅰ出土土器
- 図版17 Ⅲ区1号住居址(古)(ⅠD)出土土器 Ⅲ区2号住居址(新)出土土器 Ⅲ区2号住居址(ⅠD)出土土器
- 図版18 Ⅲ区2号住居址(ⅠD)出土土器 造構外出土土器 出土鉄製品 出土石器
- 図版19 Ⅲ区全景 Ⅱ区全景 調査区近景(南より)
- 図版20 批杷B遺跡Ⅲ区2号住居址(新)出土土器 批杷B遺跡Ⅲ区1号住居址(新)出土土器 上の山遺跡出土土器

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

本遺跡は、中巨摩郡櫛形町小笠原字批杷に所在する。櫛形町東縁部では、近年甲府盆地西縁を縦断する中部横断道（甲西バイパス）の建設がはじまっている。山梨県ではそれにあわせ、主要地方道芦崎・櫛形・豊富線の付替えを計画した。これは本道を中部横断道のアクセス道路とともに、釜無川をわたり甲府市街地との接続道路を拡充し、当該地の道路網の整備を目的とするものであった。既に山梨県土木部では道路建設立案にあわせ、平成2年度から山梨県教育委員会と予定路線内の埋蔵文化財の有無と取扱いについて協議を開始した。山梨県教育委員会では平成3年度に路線内の試掘調査を実施し、数ヶ所については発掘調査の必要がある旨回答した。

この道路は若草町から中部横断道を横切り、櫛形・若草両町の町境をめうように東西に走って櫛形町に進入するものである。山梨県土木部甲府土木事務所では建設工事の進展にあわせ、櫛形町地内にかかる埋蔵文化財包蔵地について櫛形町教育委員会に発掘調査の実施を打診した。櫛形町教育委員会では、山梨県教育委員会学術文化課（当時）の指導も受けつつ、平成8年度秋をめどに発掘調査を行うこととし、三者で具体的な協議にはいった。甲府土木事務所と櫛形町教育委員会は、協議の結果覚書を交わし平成8年度において現地調査を実施し、整理・報告書作成作業については他の遺跡における調査の予定もあり、平成9年度の事業とすることを合意した。

櫛形町教育委員会では平成8年10月から調査を4ヶ月間の日程で調査を実施する事となった。調査をすすめるなかで平成8年11月下旬に調査区の隣接地に於いて、本道路建設に伴って移転する工場用地の試掘調査を実施した。調査の結果、良好な遺構の存在が確認され、木格的な調査が必要となった。この工場移転も本道路建設の伴うもので時間的にも期限が迫っていたこと、また調査員・作業員の人的確保も問題があったため、道路建設の原因者である甲府土木事務所と協議し、道路予定地内の発掘調査期限を延長し、工場移転地の調査を平成8年末をめどに優先させることになった。この工場移転地は道路予定地に隣接していたため、教育委員会サイドでは同一の遺跡として把握し、Ⅲ区と呼称した。

工場移転地の調査は平成8年12月27日に完了し、道路予定地内の発掘調査についても平成9年3月31日に終了する事ができた。尚、各々の調査終了日には、現地において山梨県教育委員会学術文化課担当官の確認をいただいている。また、整理・報告書作成作業は平成9年度に行ったが、同年度に於ける発掘調査等と並行して作業したため、実質的な整理期間は約5ヶ月間である。

## 第2節 発掘調査の経過

発掘調査は平成8年10月1日 начиная. 調査区が幅16m、長さ150mにわたり、また排土置場のスペースが確保できなかったため、ほぼ中央部で東西にわけ東半部をⅠ区、西半部をⅡ区と区分し、互いに他方を排土置き場として利用しつつⅠ区から調査を開始した。Ⅰ区の調査は平成8年11月21日に終了し、引続いてⅠ区を埋戻しつつⅡ区の耕作上耕土を実施した。Ⅱ区の調査に入ってすぐ、先述した工場移転地の試掘調査を行った。人員を二手にわけて実施したため、Ⅱ区の調査は予定より遅れることとなった。工場移転地については、試掘調査後すぐに1ヶ月間本調査を実施したが、その間Ⅱ区の調査は殆ど進展させることができなかった。

Ⅱ区の調査は年明けから本格的に再始した。降雪や地面の凍結など天候条件に災いされ、霜柱等による遺構の破損や壁の崩落などに悩まされる事もしばしばであった。

諸般の事情によって、当初の3~4ヶ月という調査予定期間は大幅に延長してしまったが、ともあれ平成9年3月31日に調査が完了し、現地の埋戻しも年度内に終了する事ができた。

なお、各区の調査期間と面積は例言中に記載してある。



第1図 遺跡周辺地形図 (1/5,000)

## 第Ⅱ章 遺跡の概観

### 第1節 地理的環境

枇杷B遺跡は、山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原字枇杷に所在する。遺跡の所在する一帯は櫛形・若草両町の町境あたり、今回の調査区はちょうど櫛形町が若草町へ張り出す部分で両側を若草町に挟まれている。

櫛形町は甲府盆地の西縁、釜無川の右岸に位置している。釜無川から西方を見渡すと、美しい櫛の形をとった櫛形山が聳えているが、櫛形町はその山麓に発達した町で町名も櫛形山にちなんだものである。櫛形町の西半部は櫛形山が、中央部は櫛形山東麓に発達した市之瀬台地が占め、東半部は櫛形山から流れ降った諸河川が造った扇状地となり、極めて対照的な地形的、地誌的特徴を示している。

櫛形山を首座とする巨摩山地は糸魚川一静岡構造線の一部をなしているが、そのため櫛形山にも幾条かの断層地形が刻まれている。櫛形山の前面に広がる市之瀬台地も甲府盆地形成に与った最も新しい変動によって形成された丘陵状の地形である。台地は南北4km、東西2.5kmの扇形平面を呈し、標高はほぼ400~500mを測る。

台地前面は比高差100~120mを有する下市之瀬断崖を経て盆地底の扇状地へと至っている。この市之瀬台地上には、櫛形山を水源とする幾つかの小河川が流れているが、これらは上流では18~22°という急激な勾配をもって流れ落ち、盆地底にいたると自ら削り流した大量の上砂を堆積させ、谷の川口から扇状地を造っている。

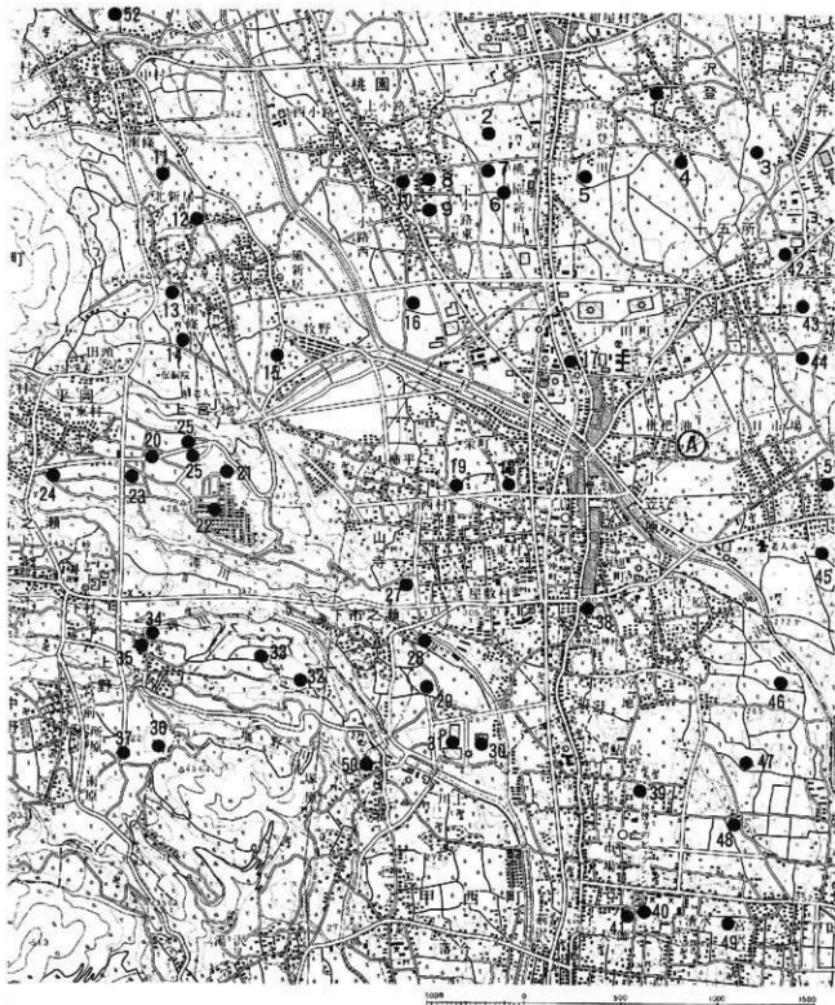
ところで、釜無川右岸には日本でも有数の扇状地である御使川扇状地が存在する。この扇状地は白根町有野を扇頂として同町、八田村、若草町、櫛形町に広がっているが、櫛形町曲輪田、小笠原、下市之瀬等では櫛形山から流れ出した諸河川が造る小扇状地と重なって複合扇状地となっている。これらの扇状地上は、古来から「原七郷」と呼ばれ「原七郷は月夜でも焼ける」と云われる水の乏しい乾燥地であった。扇状地で地下に滲みこんだ水は扇端部では内び瀬き出して、若草町の鏡中条、十日市場、甲西町の江原、鮎沢、人井等と続く弧状の湧水列をなしている。この湧水列から低位は、釜無川の氾濫原へと続く水の豊富な一帯となっている。この氾濫原は水田経営を主体としてきた地域で、古来「田方」と呼ばれてきた。水の乏しい扇尖部は、「原方」とよばれ桑畑や果樹園に利用され、台地から扇頂部にかけては「根方」と呼ばれ、山の根にあって谷川の水を利用した水田や台地上の畠經營に拠ってきた。このように地域の自然環境の特質は、各々の地域の生活・文化等と有機的な関係を示し、地誌的な特徴を顯している。

ところで、枇杷B遺跡は櫛形町小笠原字枇杷に位置し、先述した複合扇状地の扇端部上に占地している。この複合扇状地は荒沢川の造るもので、櫛形町山寺を扇頂とし櫛形町枇杷、若草町十日市場、甲西町江原を扇端部としている。この小扇状地はほぼ南北に走る等高線を示して膨らんでいるが、等高線は遺跡の所在する櫛形町枇杷付近で走行方位を南西→北東方向に変える。遺跡はこの282mの等高線上にのっている。

遺跡の南方250mには、三角池と呼ばれた若草町十日市場の湧水が存在し、同西方80mには枇杷ヶ池と呼ばれる湧水が存在する。この枇杷ヶ池は標高280mの等高線上に存在し、現在確認される範囲では付近で一番高位にある湧水である。付近は北西から南東に向かって緩やかに傾斜しているが、遺跡の占地を微地形的に観察すると幅150m程の微高地に乗っている。この微高地は北北西から南南東に向かって尾根状に延びているが、その西端を曲げているのが枇杷ヶ池から三角池に続く小谷状の地形である。この小谷状の地形はさらに北に延び、遺跡の北西2km程にある熊野神社の付近まで続いている。従って、巨視的には扇状地扇端部に乗っている本遺跡は、微視的には小谷を眼前にした微高地縁辺に占地している。

### 第2節 歴史的環境

遺跡の所在する櫛形町は、地形的に大きく三分類され、地誌的にも対照的な様相を示している。遺跡は台地・



◎ 拙 杷 日	B	原 原 原	C	A
1. 永 面 C	2. 宮 東 E	3. 吉田西原AB	4. 赤 面 C	6. 東 烟 明
7. 東 面 B	8. 長 崎 社	9. 大 新 居	5. 鼠 明	12. 神 田 馆
13. 無 若 原	14. 亂 機	10. 曾 根	11. 烟 田	18. 小笠原氏
25. 果 原 A	20. 長 西 A	15. 六 科丘古 墳	16. 烟 田	24. 中
31. 舊 屋 B	26. 西 谷 B	21. 宝 珠 寺	17. 長 賀 田	30. 古
37. 古 屋 C	32. 見 古 墳	27. 西	22. 科 古	36. 城 吉
43. 吉 田 西 原 D	38. 下 雪 地	33. 上 ノ 東	28. 墓 場	42. 久
49. 大 師 東 丹 保	44. 村 前 東 A	39. 村 内	34. 上 西 河	48. 五
	50. 上 古 墳	45. 日 本 御	40. 白 北	川 原
		51. 新 居 道 下	46. 油	
		52. 道 下	47. 吉	

第2図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 [1/25,000]

扁状地上に占地するが、櫛形山中の平坦面にも縄文時代を中心とする遺跡が確認されている。

町内に於いて、最も古く人々の痕跡が示されたのは市之瀬台地上である。六科丘遺跡②、長田口遺跡③、長田A遺跡④からは先土器時代に遡るナイフ型石器が発見され県内でも古い時代から人類の生活の場であったことを示している。

ついで縄文時代にいたると、山間部の小平垣面上に立地する上居平遺跡（甲西町）、平林遺跡（增穂町）など早期の遺物を中心とする遺跡が認められるが、本町内では市之瀬台地上を中心に数遺跡から早・前期の遺物が出土するにすぎない。この台地上では縄文時代中期中葉にいたると、長田口遺跡、長田A遺跡、中畠遺跡⑤、東原A⑥、同B遺跡⑦、上の山遺跡⑧、古原數遺跡⑨、東久保A遺跡⑩など該期の良好な遺跡が数多く営まれる。また下市之瀬断層崖下部の曾根遺跡⑪、北原C遺跡⑫からも縄文中期後半の良好な遺物が得られている。さらに盆地床へ降った鉄物師屋遺跡⑬なども中期後半の集落遺跡である。しかし縄文時代中期終末の呑利期になると遺跡は極端に少なくなり、曾根遺跡、古屋敷遺跡などで僅かな遺構が検出されるにすぎず、縄文時代以降では各遺跡とも僅かな土器片を採集しうるのみである。

先述した上の山遺跡、長田口遺跡、六科丘遺跡などは台地縁辺に並ぶ弥生時代末の集落遺跡であるが、それに先立って弥生時代中期中葉から同後半の条痕文系土器が盆地床、扁状地内の数多くの遺跡から採集されている。ことに十五所遺跡からは、条痕文系土器とそれに伴う壺型土器の良好な出土品が得られているが、残念ながら該期の遺構は未だ確認されていない。甲西町住吉遺跡⑭は、六科丘遺跡などにやや先行する弥生時代後期の遺跡で、現在確認されている範囲では、扇状地下端の湧水列上に進出する遺跡の中で最も古いもの一つである。この湧水列上では、村前東A遺跡⑮や、今回調査された批把B遺跡など弥生期終末の遺跡が点在し、特に村前東A遺跡は、弥生期終末の集落と水田とがセットで発見された遺跡で、北に隣接する十五所遺跡からは、ほぼ同時期の方岡満墓群が発見されている。該期の遺跡は、御動使川の扇状地上に進出し、赤面C遺跡⑯では現地表下2mから、この時期の住居址が発見されている。この時期、山梨県内に到達したS字状山縁甃を主体とする遺跡は、やや遅れてさらにこの扇状地から沖積地一帯に拡がり、曾根遺跡、村前東A遺跡等、櫛形、甲西、若草町内の多くの遺跡から出土し、この期に水田の開発等、社会経済的な発展が並んだことを示している。

また大師東丹保遺跡からは4世紀代後半の壺形土器を伴う墳丘墓が発見されている。内部主体はすでに削平されているが立地、築造年代等、全く新しい知見を示すもので、この地域に於ける前方後円墳の年代観と比較しても非常に興味がもたれる。本地域に於ける前方後円墳の築造は市之瀬台地の先端に立地する物見塚古墳⑰が最も古いものとされ、ほぼ5世紀前半代の年代が与えられている。この台地縁辺には六科丘古墳⑱をはじめ、さらに数基の前期古墳が存在するが、その詳細は明らかにされていない。台地周辺の小扇状地上には横穴式石室を主体とする後期群集墳が存在していたが現在は数基（上村古墳⑲、須塙古墳⑳、無名墳㉑）が残っているにすぎない。

ところで、律令体制下では本町一帯は『和名類聚抄』に甲斐国、巨摩郡九郷の一つとして所載される「大井郷」に比定されている。その所在は、從来「大井」という小名前が残るのみで明確にはされていなかった。しかし、近年の大規模な開発に伴って、鉄物師屋遺跡、村前東A遺跡、新居道下遺跡⑳、平林遺跡等の集落遺跡、水田址が発見された二木櫛遺跡㉒、祭祀遺構が検出された油田遺跡㉓等、奈良時代末から平安時代中葉にかけての遺跡が発見され、当時の様相が明らかにされつつある。この期の集落は県内では一般的にはほ12世紀中頃に廃絶していくが、これらの遺跡も11世紀終末から12世紀前半にとどまっている。

それより僅かに遅れて平安時代も末になると、甲斐國では甲斐源氏一族が台頭し、本町周辺にも加賀美氏一族が勢力を扶植する。その長子小笠原長清は本町小笠原に館を構え『名字』の地としたとされ、現小笠原小学校付近が小笠原館跡㉔と伝えられている。櫛形山山腹から山裾にかけては数ヶ所の山城が存在し、甲斐源氏一族にまつわる伝承が残されているが、遺構・遺物の点からは南北朝期を演らないと考えられる。

また、町内には中世末から江戸後期にかけての石造物が各所に残され、中世以来の伝統や文化財を伝える寺院が現存している。江戸期以降の遺物は現在の集落内やその周囲から発見され、この時期にその基礎が形成されたものであろう。以来、この地は西部の中心、駿駒往還の要所として発展することとなる。

# 第Ⅲ章 調査の方法と基本層位

## 第1節 調査の方法

調査方法はグリッド法を探ることとし、コンピューターと光波測量器による追跡調査システムを採用し、調査区全体に10m方眼の仮想グリッドを設定した。グリッドの設定については、たまたま隣接地においても若草町教育委員会がこの道路建設に伴う発掘調査を実施していたため、そこで設定していた基準点を利用した。基準点は国家座標第Ⅴ区系に掲げ、座標ポイントはA-1でX=-43536.964、Y=-2321.624、H=280.584、A-2でX=43545.111、Y=-2321.451、H=280.461である。従って方眼の南一北線は真北で、磁北に対し6°10'西偏している。グリッドは南一北方向に北からアルファベットでA～K、東一西方向に東から算用数字で1～16と定め、例えばA-1区、K-16区と呼称した。

平成3年度に山梨県教育委員会で実施した本遺跡の試掘調査によると、今回の道路建設予定地内における埋蔵文化財の包含層は現地表下1.5m及び2mの2層に亘って確認されていた。そのため本調査では現地表下0.8m程まで重機によって排土し、その後人力によって精査した。しかし現地表下1.3m程までは遺物は発見しえたものの発掘が激しかったため、さらに1.0～1.2mまでさらに重機で排土し、その下位を人力で振り下げ遺構・遺物の発見に努めた。現地での作図は、遺物の分布は光波測量器を用い遺構については光波測量器と平板及び一部簡易造り方を併用した。また電柱と遺物微細図については光波測量器に据て基準点を設定しつつ簡易造り方を行った。遺構内部については、住居址では基本的に東西、南北方向に土層観察面を設定し、土壤・ビット等についても必ず一方向の上層観察面を設定した。

遺構検出面のさらに下位に包含層が存在するか否かを確認するため、調査区内に3ヶ所のグリッドを設定し、重機によって地表下3.5m深掘りした。しかし3グリッドとも、砂層、砂礫層が互層となって堆積していたため今回は1面のみの調査とした。

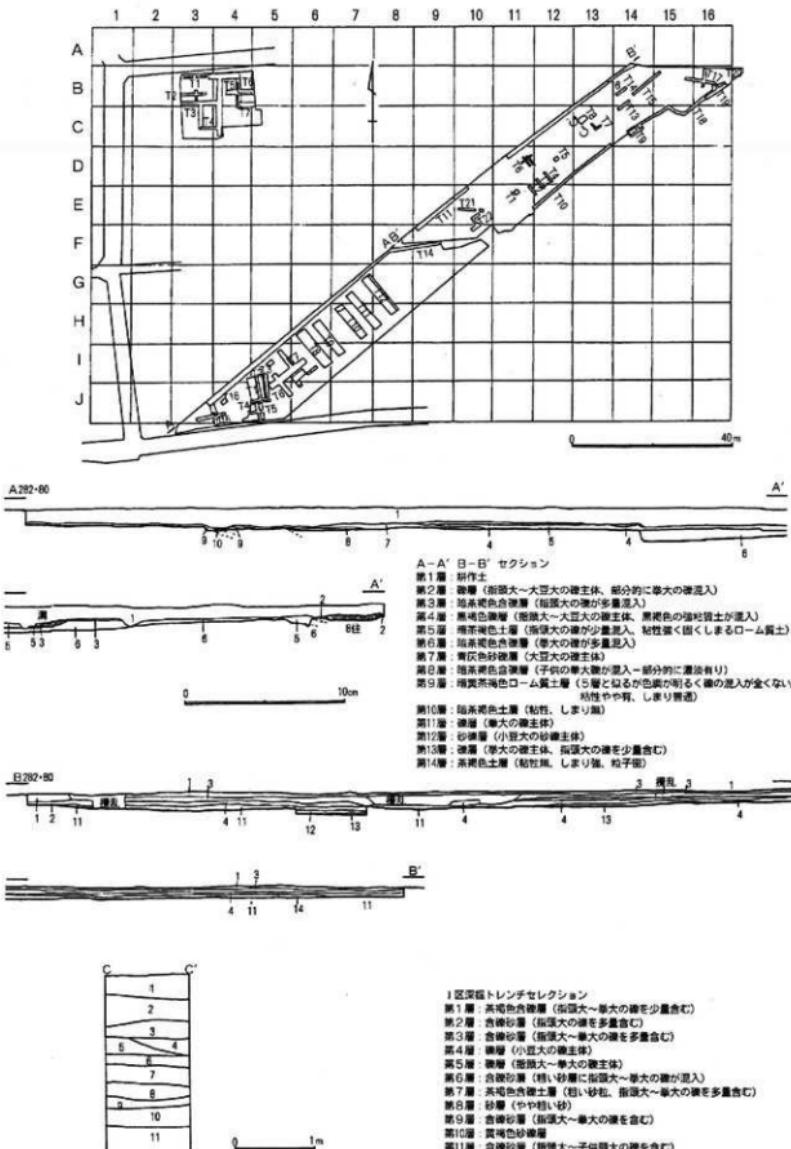
## 第2節 基本層位

発掘区の北辺に沿って基本土層を観察した。土層断面図（図3）に示す通り、本遺跡の基本土層は東半部（I区）と西半部（II区）とで全く相違していた。

東半部（I区）では、耕作上の下位に茶褐色、黒褐色の含礫土層が堆積し、さらにその下位に疊層、砂礫層が互層となって堆積している。遺物は第3層（黒褐色含礫土層）の下部から第5層（疊層）にかけて認められ、遺構は第5・6層を切って構築されていた。遺構中の覆土は基本土層中の土と非常に似通っていたため、特に第3層中では識別が難しかった。

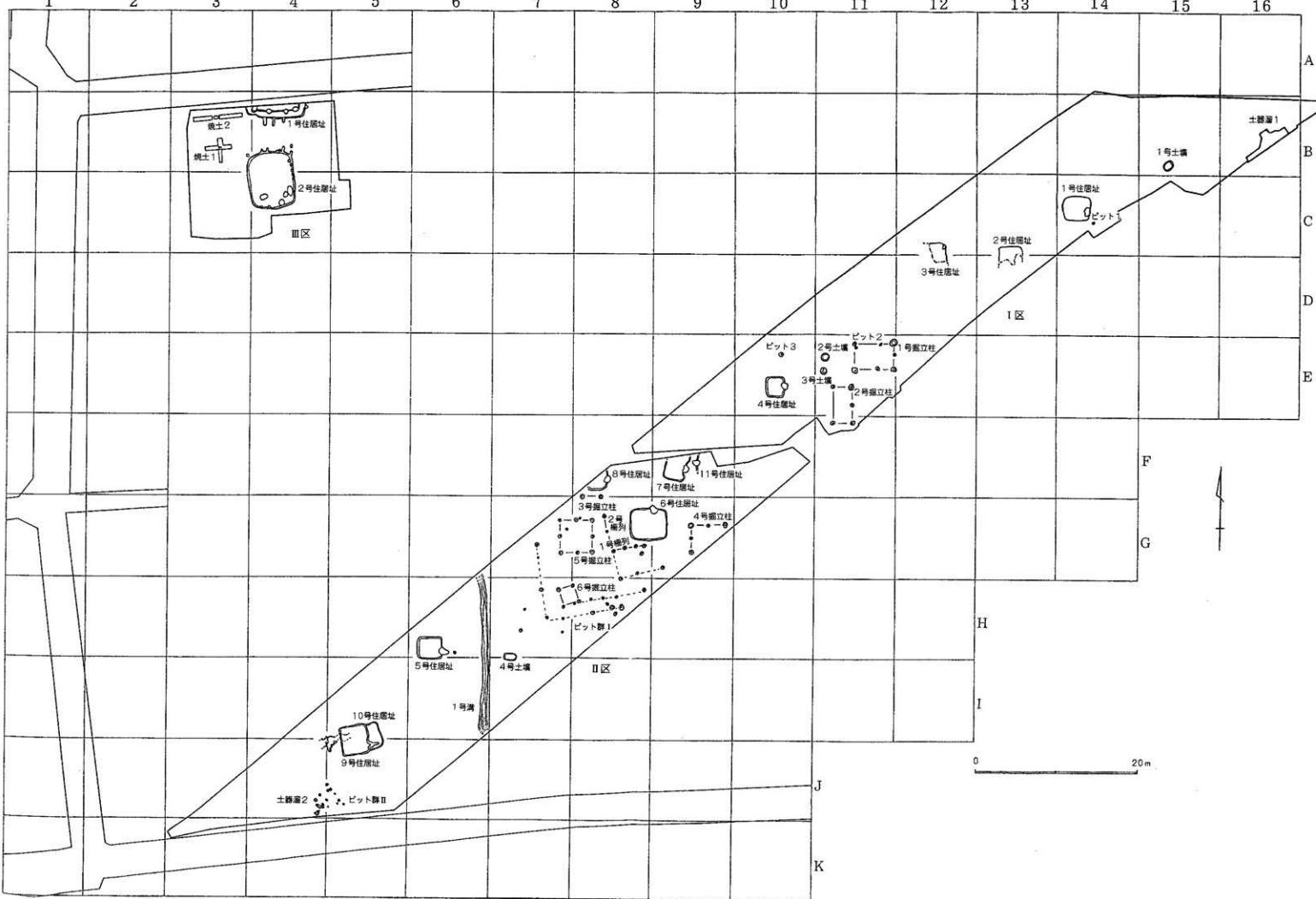
西半部（II区）では、耕作時のハウス等の影響によって地表下1.0～1.2mまで耕作土が及んでいた。その下位には茶褐色、黒褐色の含礫土層が薄く堆積し東半部（I区）の第2・3層に対応するものと思われる。その下位には含礫ローム質土層（第5層）が存在し、発掘区西端部では同じくローム質土層（第9・10層）が確認された。しかし第5層と第9層の間には礫を多量に含む層（第6～8層）が間層として存在しており、このようなローム質土が堆積する時期が2期あったことを示している。第5・6層は東半部（I区）へ続いており、色調・含有物に微妙な差異はあるが各々第4・5層に対応している。第6層は西半部（II区）中央で西方に向かって深く落ち込んでいく。

遺物は第3層下部～第5層及び第8層にかけて主として認められ、遺構はごく一部を除くと第6層をきって構築されていた。しかし、第5及び第8層から出土した遺物は共に平安時代所産のもので、確たる時期差を見いだすことはできなかった。



第3図 トレンチ配置図及び基本土層図 (1/1200・1/300・1/60)





第4図 造構配置図(1/400)

## 第IV章 発見された遺構と遺物

### 第1節 平安時代の遺構と遺物

#### 1) 堅穴住居跡

1号住居址（第5～6図、第1表、図版1・15）

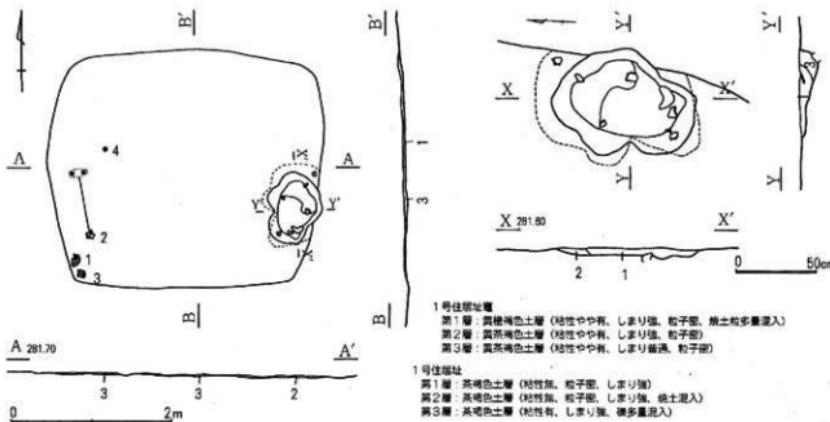
発掘区北東部のC-14区に位置し、南西7mに2号住居址が存在する。遺跡状態は非常に悪く、床面を確認したにすぎない。覆土は3層に分けられ非常に堅くしまっており、第2層は焼土が混入する。平面形は不整形を呈し、規模は3.4×3mを測るが、削平のため規模・形状とも不確定としたい。主軸方位はN-95°-Eによる。床面は堅緻である。竈は1基付設されるが柱穴・周溝等は確認できない。

#### 竈

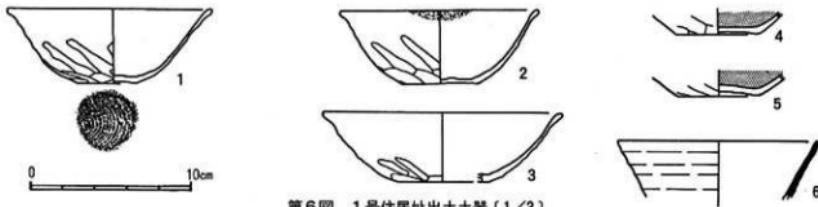
東壁や南半に付設される。削平のため掘方基底部のみ遺存する。形状は横長の不整椭円形を呈し、規模は70cm×90cmを測る。床面からの深さは10cm程度で壁際が一番深く穿たれる。覆土は3層で第1層中には多量の焼土粒が含まれる。遺物は環頬を中心にして16点出土したが、図示したものは6点である。

#### 出土遺物

破片が散在する状況であったが南西隅、床面直上からほぼ完形の土器、壺（1・2・3）がまとまって出土している。3点とも正位である。また図示しえなかつたが灰釉、陶器片が1点出土している。



第5図 1号住居址・竈 [1/60・1/30]



第6図 1号住居址出土土器 [1/3]

第1表 1号住居址出土土器観察表

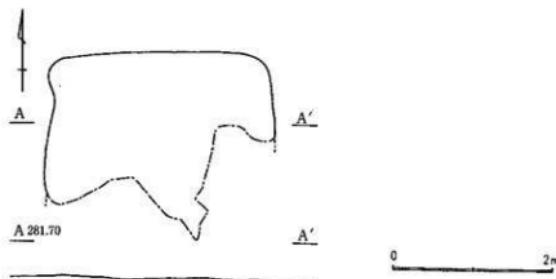
1	土師器 壊	A : ℓ 12.5、b 3.6、h 4.6。B : 2/3。C : 外面-口唇部～体部上半ナデ。体部下半ヘラケズリ(反時計方向)。底部回転糸切り(時計方向)のち周辺ヘラケズリ。内面-ナデ。D : 密。E : 良。F : 橙色(2.5Y R6/8)。
2	土師器 壊	A : ℓ 12.4、b 4.7、h 4.5。B : 1/2。C : 外面-口唇部～体部上半ナデ。体部下半ヘラケズリ(反時計方向)。底部全面ケズリ。内面-ナデ。D : 密。E : 良。F : にい黄橙色(10Y R6/4)。G : 口唇部にスス付着。
3	土師器 壊	A : ℓ 14.8、b 5.6、h 4.3。B : 1/3。C : 外面-口唇部～体部上半ナデ。体部下端ヘラケズリ(反時計方向)。底部ケズリ。内面-ナデ。D : 密。E : 良。F : 橙色(5Y R7/8)。
4	土師器 壊	A : b (5.2)。B : 体部下部～底部5/6。C : 外面-体部下半ヘラケズリ。底部全面ケズリ。内面-ナデ。D : 密。E : 良。F : 外面-橙色(2.5Y R6/8)。内面-黒色。
5	土師器 壊	A : b (5.0)。B : 体部上部～底部1/2。C : 外面-体部下半ヘラケズリ。底部回転糸切り(時計方向)のちケズリ。内面-ナデ。D : 密。E : 良。F : 外面-にい黄橙色(10Y R6/4)。内面-黒色(2N2/0)。
6	須恵器 壊	A : ℓ 12.6。B : 口縁部～体部下部破片。C : 外面-回転ナデ。D : 密。E : 良。F : 灰色(N5/0)。

## 2号住居址(第7図、図版1)

発掘区北東のC・D-13区に位置し、北東7mに1号住居址が、西6.5mに3号住居址が存在する。上部をほとんど前平されたため、遺存状態は極めて悪く、北半部の床面範囲を確認したにすぎない。平面形は隅丸方形を呈する可能性が強く、規模は東-西方向で2.8m程である。主軸方位は不明だがほぼ東-西あるいは南-北方向であろう。床面は堅緻である。窓、柱穴、周溝等は検出されなかった。

## 出土遺物

出土量は少なく、断片化も進んでいるため図示しえなかった。



第7図 2号住居址 [1/60]

## 3号住居址(第8~9図、第2表、図版1・15)

発掘区北東部のC・D-12区に位置する。東6.5mに2号住居址が、南西10m余に1号掘立柱建物が存在する。上部の削平が激しく、住居址の北東隅の1/4程が確認されたにすぎない。覆土は1層で礫の混入が顕著である。平面形はほぼ方形を基調にしたものと考えられるが、規模は全く不明である。隅部に窓をもつ住居の為、主軸方位はN-Eとなるが、壁の方位はほぼ東-西方向にとる。床面は貼床で窓前は特に堅緻であるが、本米蹠の多い土

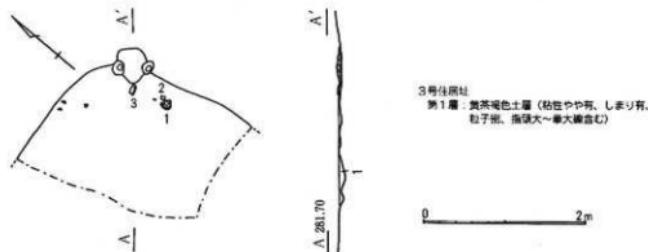
層中に構築された住居のため、貼床を失った部位では地山との識別は困難であった。柱穴、周溝等は検出されなかった。

### 竈

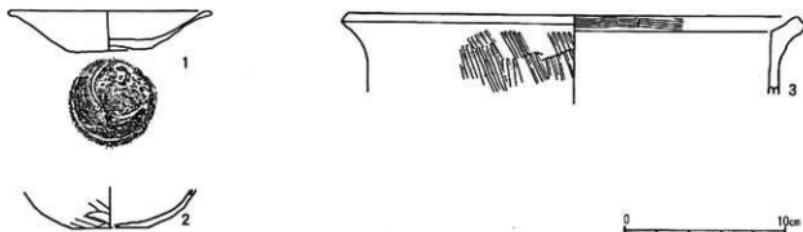
北東隅に付設される。基底部しか遺存しないが、袖石設置時の掘方は良く残っている。規模は長さ43cm、幅50cmを測り、燃焼部の断面形は浅い皿状を呈する。また袖間の距離は35~40cmで、燃焼部はU字形を呈し壁外へ張り出す。主軸方位はN-50°-Eにとる。

### 出土遺物

床面上に散在するが、1はほぼ完形品で窓右脇から、3は窓焚口部直前から出土した。



第8図 3号住居址 [1/60]



第9図 3号住居址出土土器 (1/3)

第2表 3号住居址出土土器観察表

1	土師器皿	A : $\ell$ 12.6cm、b 5.3cm、h 2.8~2.2cm。B : 2/3。C : 外面一口唇部~体部ナデ。底部回転糸切りのちナデ。内面ーナデ。D : 密。E : 良。F : 黄橙色 (7.5Y R8/8)。
2	土師器鉢	A : b (4.8)cm。B : 底部1/2。胴部一部。C : 外面一体部下半ヘラケズリ (反時計方向)。底部ヘラケズリ。内面ーナデ。D : 密。E : 良。F : にぼい赤褐色 (5 Y R5/4)。
3	土師器甕	A : $\ell$ (27.9)cm。B : 口縁部破片。C : 外面一口唇部~口縁部ナデ。胴部タテハケ (粗い)。内面一口縁部ヨコハケ。胴部ナデ。D : 雲母、細砂粒を含み密。E : 良。F : 明赤褐色 (2.5Y R5/6)。

4号住居址 (第10~11図、第3表、図版2・15)

発掘区中央東寄りのE-10区に位置する。東6~8mに1号・2号掘立柱建物址跡が並ぶ。上部に削平を受け

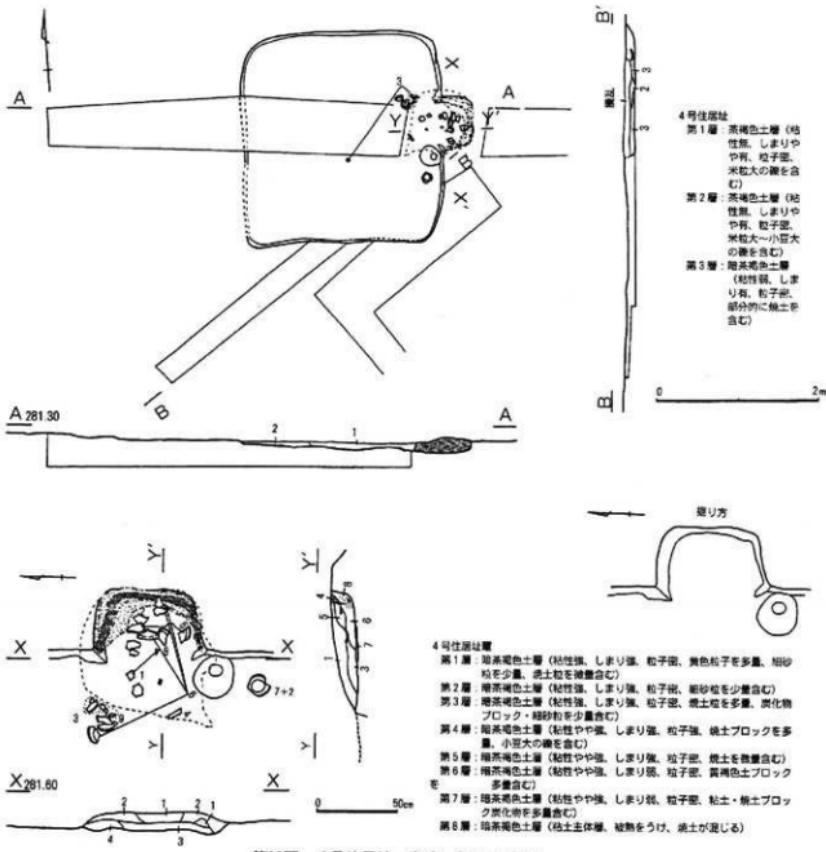
ており、特に西半部は確認に手間取った。しかし住居址基底部では各構部が完存していたため、形状、規模は確認しえた。平面形は隅丸方形を呈し、規模は $2.6 \times 2.5$ mを測る。主軸方位はN-90°-Eにとる。壁高は5~15cmで、覆土は3層に分けられ、細謬が多量に混入する。第3層は部分的に焼土を含んでいる。床面は軟弱で、地山の小礫が露出している。窓は一基付設されるが、柱穴、周溝等は確認できなかった。

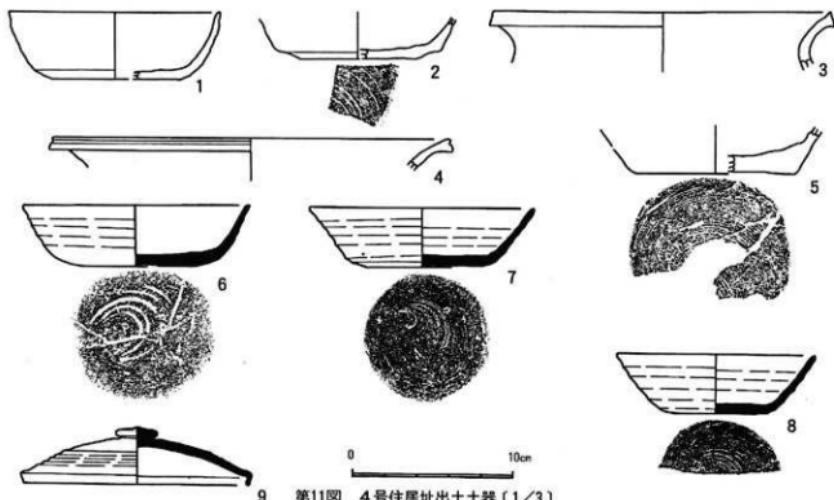
### 窓

東壁中央に付設される。形状は台形様を呈し、規模は幅90cm、長さ85cmを測る。燃焼部は壁外へ張り出して造られる。掘り込みはごく浅く、焚口部は明確にならない。右袖部では袖石をすえたと思われるビットが確認できる。覆土は8層に分けられた。第8層は燃焼部壁面に貼り付けられた状態で観察され、電構材の一部で袖部へ続くものであろう。第6層は天井部の崩落である。燃焼部は75°で立ち上がるが、煙道部はすでに失われている。

### 出土遺物

比較的多量だが、断片化が進んでいる。しかし窓前に良好な遺物が集中(3・7・9)し、6は燃焼部内出土の破片と接合した。また2・8は窓内の出土である。

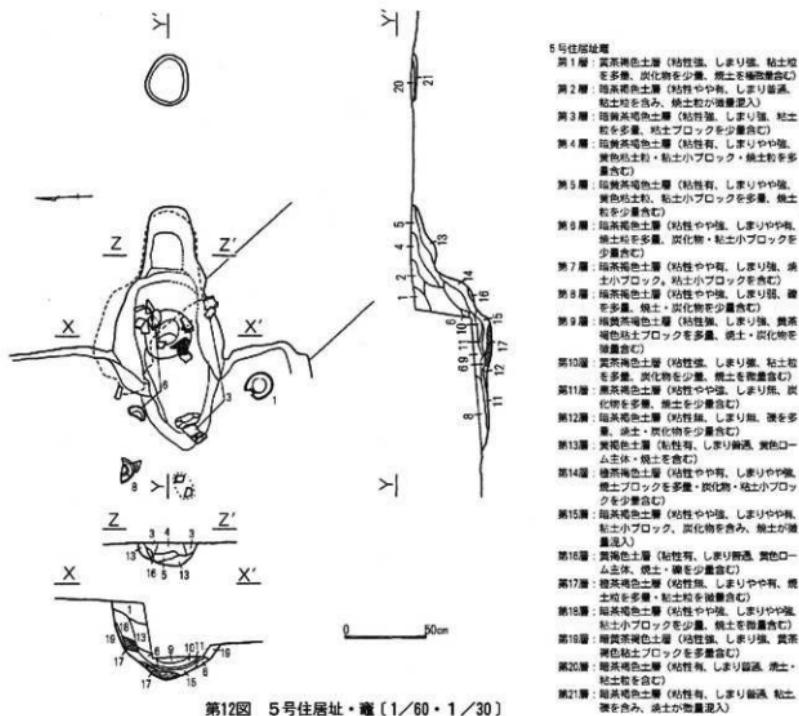
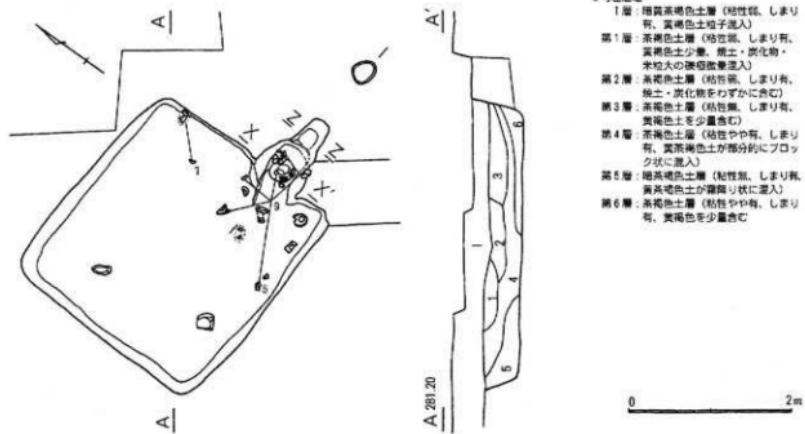




第11図 4号住居址出土土器 (1/3)

第3表 4号住居址出土土器観察表

1	土師器 壺	A : $\ell$ (13.0)、b 8.6、h 4.1。B : 1/2弱。C : 外面一口唇部～体部上半ていねいなナデ。体部下端ヘラケズリのちナデ。底部全面ケズリのちていねいなナデ。内面～ていねいなナデ。D : 繊密。E : 良。F : にぶい褐色 (7.5Y R 5/4)。
2	土師器 壺	A : b (11.0)。B : 1/4弱。C : 外面～磨耗激しい。底部糸切り。内面～磨耗激しい。D : やや密。細砂粒を含む。E : 良。F : 橙色 (5Y R 7/6)。
3	土師器 壺	A : $\ell$ (22.6)。B : 口縁部破片。C : 外内面～ていねいなナデ。D : 長石、細砂粒を含みやや粗。E : 普通。F : 褐色 (7.5Y R 4/4)。
4	土師器 壺	A : $\ell$ (23.2)。B : 口縁部破片。C : 外内面～ナデ。D : 長石、細砂粒を含みやや粗。E : 普通。F : にぶい褐色 (7.5Y R 5/4)。
5	土師器 壺	A : b (10.0)。B : 底部3/4強。C : 外面～腹部下端ナデ。底部糸切り。内面～ナデ。D : 長石、細砂粒を含みやや粗。E : 普通。F : 外面～黒褐色 (5YR 3/1)。内面～橙色 (5YR 6/6)。
6	須恵器 壺	A : $\ell$ 14.0、b 6.4、h 3.7。B : 4/5。C : 外面一口唇部～体部回転ナデ(時計方向)。体部下端～底部回転糸切り(時計方向)のち周辺部ヘラケズリ(体部下端まで及ぶ)。内面～磨耗激しく不明(身こみ部は不定方向のナデ)。D : 細砂粒を含みやや密。E : やや良。F : 灰白色 (2.5Y 7/1)。
7	須恵器 壺	A : $\ell$ 14.1、b 7.0、h 3.8。B : 3/4強。C : 外面一口唇部～体部回転ナデ。体部下端ヘラケズリ。底部回転糸切り(時計方向)のちヘラケズリ。内面～回転ナデ。D : やや砂粒を含み密。E : 良。F : 灰黄色 (2.5Y 7/2)。
8	須恵器 壺	A : $\ell$ (13.6)、b (6.4)、h 3.7。B : 1/4弱。C : 外面一口唇部～体部回転ナデ(反時計方向)。底部回転糸切り(反時計方向)のち周辺部ヘラケズリ。(体部下端まで及ぶ)。内面～ナデ。D : 密。E : やや良。F : 灰白色 (2.5Y 7/1)。
9	須恵器 蓋	A : $\ell$ (14.0)、h 3.4。B : 1/2弱。C : 外面～体部上半回転ヘラケズリ。体部下半回転ナデ。受部ナデ。内面～ナデ。D : 白色砂粒をやや含み密。E : 良。F : 灰色 (5 Y 5/1)。



第12図 5号住居址・竪 (1/60・1/30)

5号住居址（第12～14図、第4表、図版2・3・15）

発掘E南西部のH-6区に位置する。東5mにある1号溝状遺構で他の住居址群と隔され、南西10m程に9号・10号住居址が切合って存在する。本遺跡では珍しく良好な依存状態を示す。平面形は隅丸方形を呈し、規模は2.9×2.8mを測る。主軸方位はN-90°-Eにとる。壁高は40～43cmを測るが、竈の遺存状態からさらに20～30cmのはびるものと思われる。壁は急角度で直状に立上っている。覆土は6層に分けられ、レンズ状の自然堆積を示す。第1・2層には焼土・炭化物を含み、第4層以下ではローム質黄褐色土を含んでいる。床面は軟弱で、柱穴・周溝等は確認できない。竈は一基付設される。

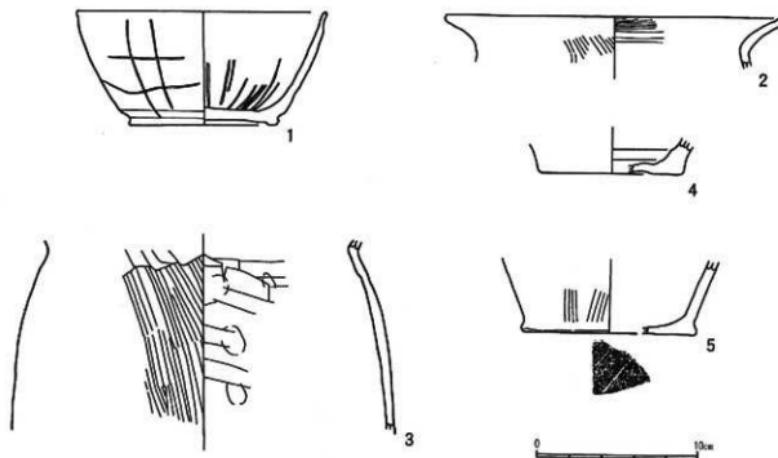
竈

東壁南半部に構築される。煙道部を失っているが、他は良好な遺存状態である。規模は長さ250cm、幅68cmを測る。焚口部から燃焼部は長方形平面を呈し、焚口部はU字状に長く住居内へ張り出す。燃焼部はU字状に壁面に掘り込まれて築かれる。焚口部から燃焼部にかけては浅い皿状の断面を呈し、床面からは焚口部で5cm、燃焼部では一段深く10cm程である。燃焼部奥は約60°で段部をつくりながら立ち上がり煙道部へ続く。煙道部は巾45cm程とやや狭まりつつ約30°で立ち上がるが、住居壁面から120cm程の部位で削平のため失われている。住居東側で燃焼部立ち上がりから80cm程に30×26cmで深さ4cm程のピットが検出され内部には焼土粒が認められた。おそらく煙出し部の基底部であろう。

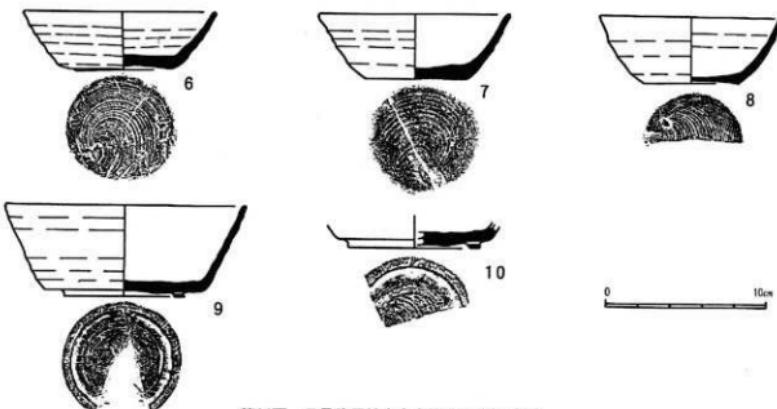
竈覆土は21層に分けられた。本竈は掘り込んだ壁面に黄茶褐色粘土ブロックを貼付して、袖、天井部を構築したものと思われ、第13・16・18・19層は壁面及袖部の、また第1・5・9・10層は天井部の、各々痕跡あるいは崩壊を示すものであろう。第14・17層は焼土ブロック・焼土粒を多量に含んでいた。また土層図には図示しえなかったが、燃焼部右前から焚口部にかけて多量の炭化物が遺存していた。掘り方では確認できなかったが、竈前面から多量の石材が発見され、袖の芯材に使用したものと考えられた。

出土遺物

本遺跡としては、比較的多量の遺物が出土し、竈周囲に集中している。5は南壁中央部、7は北東隅壁際から出土した。他は竈周囲から出土している。尚、図示したものは全て床面及床面直上から出土した。



第13図 5号住居址出土土器〔1/3〕(1)



第14図 5号住居址出土土器(1/3) (2)

第4表 5号住居址出土土器観察表(1)

1	土師器 壺	A : ℓ 15.6, b 9.4, h 7.2。B : ほぼ完形。C : 外面一口唇部～体部ナデ。底部削り出しのちナデ。高台部削り出しのちナデ。内面一ナデ。暗細。D : 密。E : 良。F : 外面－明赤褐色(2.5Y R5/8)。内面－橙色(2.5Y R6/8)。G : 外面刻書「井」。
2	土師器 甕	A : ℓ (21.0)。B : 口縁部破片。C : 外面一口唇部～口縁部ナデ。頸部～胴部ハケ。内面一口縁部～頸部ヨコハケ。胴部ヘラナデ。D : 金雲母、細砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色(2.5Y R6/8)
3	土師器 甕	A : 頸部径(19.6)。B : 顆部～胴部破片。C : 外面一口縁部ナデ。頸部～胴部ハケ。内面一口縁部ナデ。胴部上位ヨコハケ。胴部中位指頭圧のうちナデ。D : 金雲母、細砂粒を含み密。E : 良。F : 暗赤褐色(2.5Y R3/6)。
4	土師器 甕	A : b (9.2)。B : 底部1/3。C : 外面～胴部下端ナデ。底部(ヘラ)ケズリ。内面～胴部ヘラナデ。D : 砂粒を含みやや密。E : 良。F : 褐色(7.5Y R4/9)。
5	土師器 甕	A : b (11.0)。B : 底部1/4。C : 外面～胴部下半ハケ。底部木葉痕。内面～磨耗激しく不明。D : 霧母、金雲母、細砂粒を含みやや密。E : 良。F : 外面－褐色(7.5Y R4/4)。内面－明赤褐色(5Y R5/8)。
6	須恵器 壺	A : ℓ 11.8, b 6.6, h 3.8。B : ほぼ完形。C : 外面～底部回転糸切り(時計方向)のち周辺部ヘラケズリ。内面一ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 青灰色(5B5/1)。G : 卷き上げ痕がよく残る。
7	須恵器 壺	A : ℓ 12.0, b 6.7, h 4.2。B : 2/3。C : 外面～体部上半ナデ。体部下端ヘラケズリ。底部回転糸切り(反時計方向)のち周辺部ヘラケズリ。内面一ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : やや良。F : 浅黄色(2.5Y R7/3)。
8	須恵器 壺	A : ℓ (11.8), b (6.0), h 4.2。B : 1/2。C : 外面～体部上半ナデ。体部下端ヘラケズリ。底部回転糸切り(時計方向)。内面：ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 青灰色(5B5/1)。
9	須恵器 壺	A : ℓ 15.0, b 9.6, h 5.8。B : 1/2。C : 外面～体部回転ナデ。底部(回転)糸切りのち周辺部ヘラケズリのち高台貼付のちナデ。内面～体部ナデ。底部回転ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 外面－青灰色(5B6/1)。内面－青灰色(5B5/1)。
10	須恵器 壺	A : b (9.6)。B : 底部1/3。C : 外面～体部回転ナデ。底部右方向の回転糸切りのち周辺部回転ヘラケズリのち高台貼付のちナデ。内面～回転ナデ。D : 密。E : 良。F : 灰色(5Y5/1)。

### 6号住居址（第15～19図、第5～6表、図版4・15）

発掘区中央のG-8・9区に位置する。北西4.5mに8号住居址が、北北東約4mに7号・11号住居址が重複して存在する。また東2.5mに4号掘立柱建物が、西5mに5号掘立柱建物址が存在し、南には1号柵列が近接している。

上部に削平を受け、東壁の一部を搅乱されるが形状・規模は把握できる。形状は横長の隅丸長方形を呈し、規模は4.6×3.9mを測る。主軸方位はほぼ北にとる。壁高は10～20cmを測り、東壁側が低い。壁はやや内湾気味に立ち上がる。覆土は15層に分けられ、レンズ状の自然堆積を示す。全体的に焼土・炭化物の混入が多い。

床面は軟弱で、地山の礫が露出している。中央西半部と北西隅に焼土溜りが認められた。竪は1基付設されるが、柱穴・周溝等は検出されなかった。

#### 竪

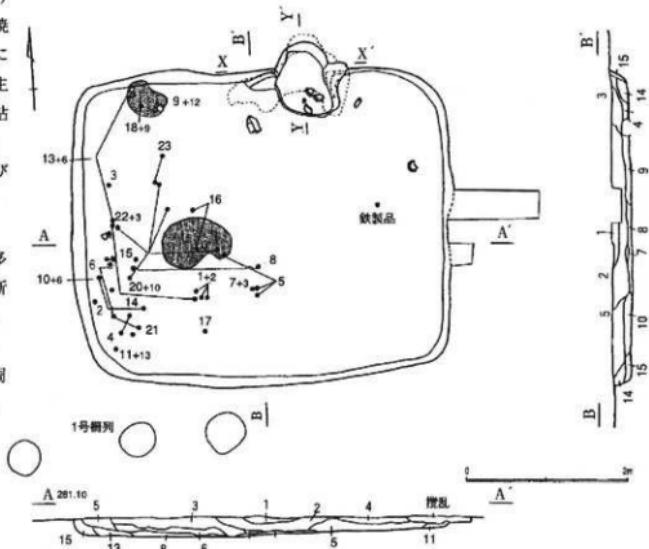
北壁東半部に構築される。規模は長さ90cm、幅130cmを測り、主軸方位はほぼ北にとる。燃焼部は長円形を呈し、床面から10cm程鍋底状に掘り下げられる。焚口部は大きく住居内へ張り出す。煙道部は壁面を半円状に掘り込んで造られ、60°程度で立ち上がる。袖部は粘土で構築され、右袖の一部が遺存している。

覆土は11層に分け

られ、6・7層は焼土・炭化物を多量に含む。9層は粘土主体層、8・10層は粘土を多量に含む層で、竈構築材の残存及び崩壊土であろう。

#### 出土遺物

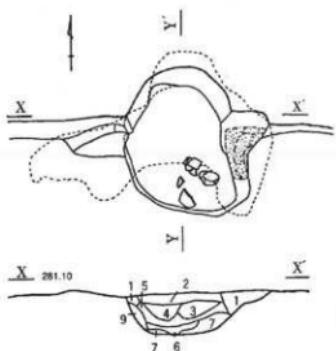
本遺跡としては多量に出土したが、断片化が進んでいる。住居址西半部に多く、床面では各焼土の周囲に集中している。



#### 6号住居址

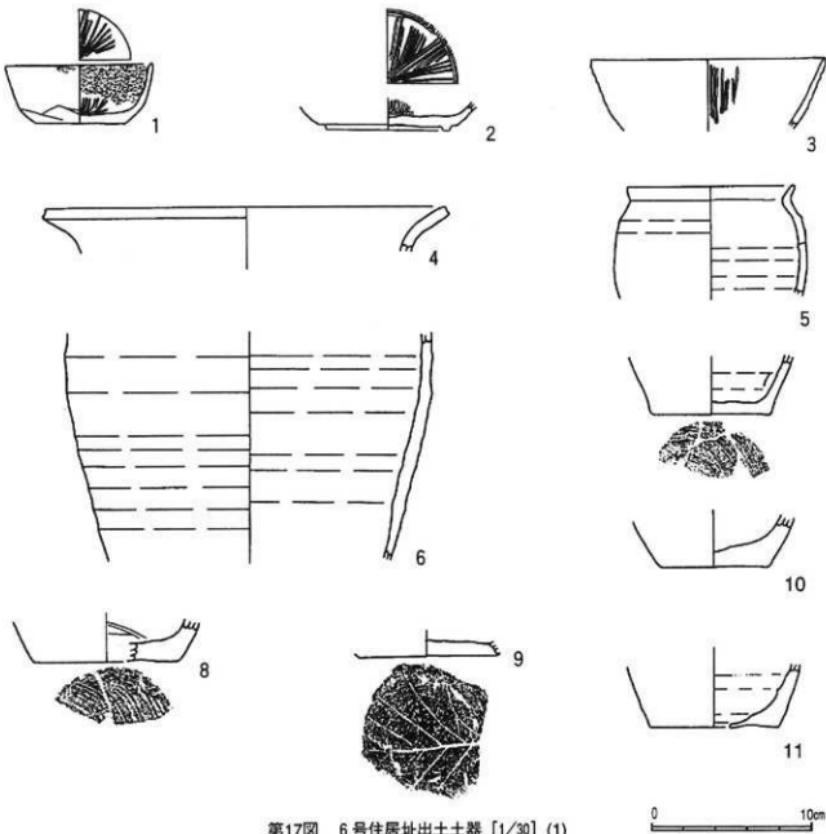
- 第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり無、粒子密、小豆大的礫を含み指頭大の礫が少量混入）
- 第2層：暗茶褐色土層（粘性やや有、しまりやや有、粒子密、米粒大的礫・礫溜りの礫を少量、焼土、炭化物を微量含む）
- 第3層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり有、小豆大的礫を多量、子供の拳大礫を含み、焼土、炭化物を微量混入）
- 第4層：茶褐色土層（粘性無、しまりやや有、子供の拳大・指頭大の礫・黄褐色土粒子を多量含む）
- 第5層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり有、指頭大の礫を多量含む）
- 第6層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり有、焼土、炭化物を微量含む）
- 第7層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり有、粒大・指頭大の礫を少量、焼土、炭化物を多量含む）
- 第8層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり有、指頭大の礫を少量、焼土、炭化物を含む）
- 第9層：暗茶褐色土層（粘性やや有、しまりやや有、子供の指頭大礫を少量含む）
- 第10層：暗茶褐色土層（粘性弱、しまり有、小豆大～指頭大礫を少量、燒土粒が微量混入）
- 第11層：暗茶褐色土層（粘性やや有、しまり有、粒子密、粘土粒・小豆大礫を多量、焼土粒を微量含む）
- 第12層：暗茶褐色土層（粘性やや無、しまり有、米粒大的礫・焼土多量混入）
- 第13層：暗茶褐色土層（粘性やや無、しまり有、米粒大的礫を含み、燒土粒を微量含む）
- 第14層：暗茶褐色土層（粘性やや無、しまりやや有、粒土粒・小豆大礫を少量、燒土粒を微量含む）
- 第15層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり有、指頭大の礫、弱粘土質土の小ブロック混入）

第15図 6号住居址 [1/60]

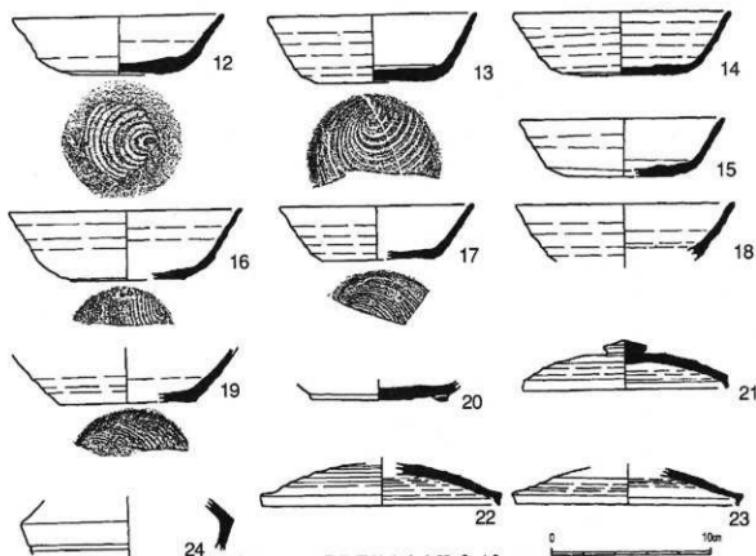


6号住居址  
 第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり強、小豆大～大豆  
 大の礫主体層、粘土小・ブロック少量混入）  
 第2層：暗茶褐色土層（粘性弱、しまり強、焼土・粘土  
 粒・小礫が微量混入）  
 第3層：暗茶褐色土層（粘性弱、しまり強、粘土・小礫が  
 少量混入）  
 第4層：暗茶褐色土層（粘性弱、しまり強、小礫が多量混  
 入）  
 第5層：暗茶褐色土層（粘性弱、しまりやや強、焼土粒・  
 粘土粒が少量混入）  
 第6層：暗茶褐色土層（粘性弱、しまり強、焼土ブロック  
 が多量、粘土粒を含む）  
 第7層：暗茶褐色土層（粘性やや弱、しまりやや強、焼土  
 粒・焼土ブロック・炭化物粒を含み、礫が  
 優量混入）  
 第8層：暗茶褐色土層（粘性強、しまり強、粘土粒を多量  
 混入、焼土・炭化物粒を多量含む）  
 第9層：淡橙茶褐色土層（粘性やや強、しまり強、粘土  
 粒・礫・焼土粒を含む）  
 第10層：暗茶褐色土層（粘性やや強、しまり強、焼土・粘  
 土粒を多量含む）  
 第11層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり強、礫を多量、燒  
 土粒を微量含む）

第16図 6号住居址窓 [1/30]



第17図 6号住居址出土土器 [1/30] (1)



第18図 6号住居址出土土器 [1/3] (2)

第5表 6号住居址出土土器観察表(1)

1	土師器 壺	A : ℓ 98. b 56. h 38. B : 3/4. C : 外面一口縁部～体部上半でいねいなナデ。体部下半ヘラケズリ。底部糸切りのちヘラケズリ。内面一口縁部ナデ。体部～身こみ部でいねいな暗文。スヌ多量に付着。D : 金雲母を含み密。E : 良。F : 橙色 (5 YR1/8)。
2	土師器 壺	A : b (8.8)。B : 底部1/4弱。C : 外面～体部下端ヘラケズリ。底部ヘラケズリのち高台部貼付のちナデ。内面一ナデのち暗文。D : 密。E : 良。F : 橙色 (5 YR7/8)。
3	土師器 壺	A : ℓ (146)。B : 口縁部破片。C : 外面一ナデ。内面一ナデのち暗文。D : 密。E : 良。F : 橙色 (5 YR7/8)。
4	土師器 甕	A : ℓ (25.4)。B : 口縁部1/4弱。C : 外内面一ナデ。D : 長石、細砂粒を含み密。E : 普通。F : 橙色 (5 YR6/6)。
5	土師器 甕	A : 脇部径 (11.6)。B : 口縁部～脇部1/4弱。C : 外面～頸部～胴部上半ナナメハケ。胴部中位ハケのちナデ。内面一口縁部ナデ。胴部指頭圧痕のちナデ。D : 白色細砂粒を多く含み普通。E : 普通。F : 外面にぶい赤褐色 (5 YR4/4)。内面一黒褐色 (75YR3/3)。
6	土師器 甕	A : 脇部径 (23.0)。B : 脇部破片。C : 外内面一回転ナデ。D : 金雲母。細砂粒を含み密。E : 良。F : 外面一橙色 (5 YR6/6)。内面一橙色 (7.5YR7/6)。
7	土師器 甕	A : b (7.6)。B : 底部1/2弱。C : 外内面一ナデ。D : 白色細砂粒を多く含み普通。E : 良。F : にぶい赤褐色 (5 YR4/4)。
8	土師器 甕	A : b (9.0)。B : 底部1/4弱。C : 外面一ハケのちナデ。底部糸切り(静止)。内面一ナデ D:長石、細砂粒を含み普通。E : 普通。F : 橙色 (5 YR6/6)。

第6表 6号住居址出土土器觀察表(2)

9	土師器 壺	A : b (88)。B : 底部完。C : 外面一木葉痕。内面一ナデ。D : 細砂粒、金雲母を含み密。E : 普通。F : 明赤褐色 (25YR5/8)。
10	土師器 壺	A : b (66)。B : 底部1/4弱。C : 外内面一摩耗激しく不明。D : 長石、細砂粒を多く含み普通。E : 普通。F : 外面一橙色 (5 YR6/6)。内面一橙色 (75YR7/6)。
11	土師器 壺	A : b (80)。B : 脚部下部～底部1/4弱。C : 外内面一ナデ。D : 白色細砂粒を含みやや密。E : 良。F : 外面一にぶい褐色 (75YR5/4)。内面一灰黄褐色 (10YR6/2)。
12	須恵器 壺	A : ℓ 132, b 70, h 37。B : 4/5。C : 外面一口唇部～体部上半回転ナデ。体部下半ヘラケズリ。底部回転糸切り (反時計方向) のち周辺部ヘラケズリ。内面一回転ナデ。D : 2～3mmの白色砂粒を含み密。E : 良。F : 灰色 (5 Y6/1)。
13	須恵器 壺	A : ℓ (132), b (74), h 44cm。B : 1/2弱。C : 外面一体部上半回転ナデ。体部下端ヘラケズリ。底部回転糸切り (時計方向) のち周辺部ヘラケズリ (ごく一部)。内面一ナデ。D : 白色細砂粒を含み密。E : 良。F : 灰白色 (10Y7/1)。
14	須恵器 壺	A : ℓ 134, b 78, h 39。B : 4/5。C : 外面一体部上半回転ナデ。体部下端ヘラケズリ。底部 (回転) 糸切りのちヘラケズリ。内面一体部ナデ。D : 白色粒を含み密。E : 良。F : 灰黄色 (25YR7/2)。
15	須恵器 壺	A : ℓ 130, b (72), h 35。B : 4/5。C : 外面一体部上半回転ナデ。体部下端ヘラケズリ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 灰白色 (10Y7/1)。
16	須恵器 壺	A : ℓ (144), b (72), h 43。B : 1/4弱。C : 外面一回転ナデ。体部下端ヘラケズリ。底部回転糸切り (反時計方向)。内面一ナデ。D : 2～3mm赤色小石、白色細砂粒を含み密。E : 良。F : 灰色 (10Y6/1)。
17	須恵器 壺	A : ℓ (124), b (72), h 33。B : 1/4弱。C : 外面一口唇部～体部上半回転ナデ。体部下端ヘラケズリ。底部回転糸切り (時計方向)。内面一回転ナデ。D : 密。E : 良。F : 青灰色 (5 B5/1)。
18	須恵器 壺	A : ℓ (136)。B : 口縁部～体部下部1/4強。C : 外内面一回転ナデ。D : 2～3mm白色細砂粒を含み密。E : 良。F : 灰色 (5 Y6/1)。
19	須恵器 壺	A : b (86), h (86)。B : 1/4弱。C : 外面一体部上半ナデ。体部下端ヘラケズリ。底部回転糸切り (反時計方向)。内面一ナデ。D : 白色細砂粒を含み密。E : 良。F : 黄灰色 (25Y6/1)。
20	須恵器 壺	A : b (86)。B : 底部1/4。C : 外面一回転ヘラズリのち高台貼付のちナデ。D : 密。E : 良。F : 灰色 (5 Y6/1)。
21	須恵器 蓋	A : ℓ (128), h 30。B : 1/4。C : 外面一回転ナデ。内面一回転ナデ。受け部ナデ。D : 2～3mm白色砂粒、砂粒を含み密。E : 良。F : 灰色 (75Y6/1)。
22	須恵器 蓋	A : ℓ (150)。B : 1/4。C : 外面一体部上半回転ヘラケズリ。体部下半回転ナデ。内面一回転ナデ。D : 白色砂粒を含み密。E : 良。F : 灰色 (N5/0)。
23	須恵器 蓋	A : ℓ 140。B : 1/3弱。C : 外面一体部上半回転ヘラケズリ。体部下半回転ナデ。受け部ナデ。内面一回転ナデ。D : 2～3mmの白色砂粒を多く含み密。E : 良。F : 灰色 (N5/0)。
24	須恵器 壺	A : 脚部径132。B : 肩部1/4弱。C : 外内面一ナデ。D : 密。E : 良。F : 外面一灰色 (N5/0)。内面一灰色 (N6/0)。

### 鉄製品

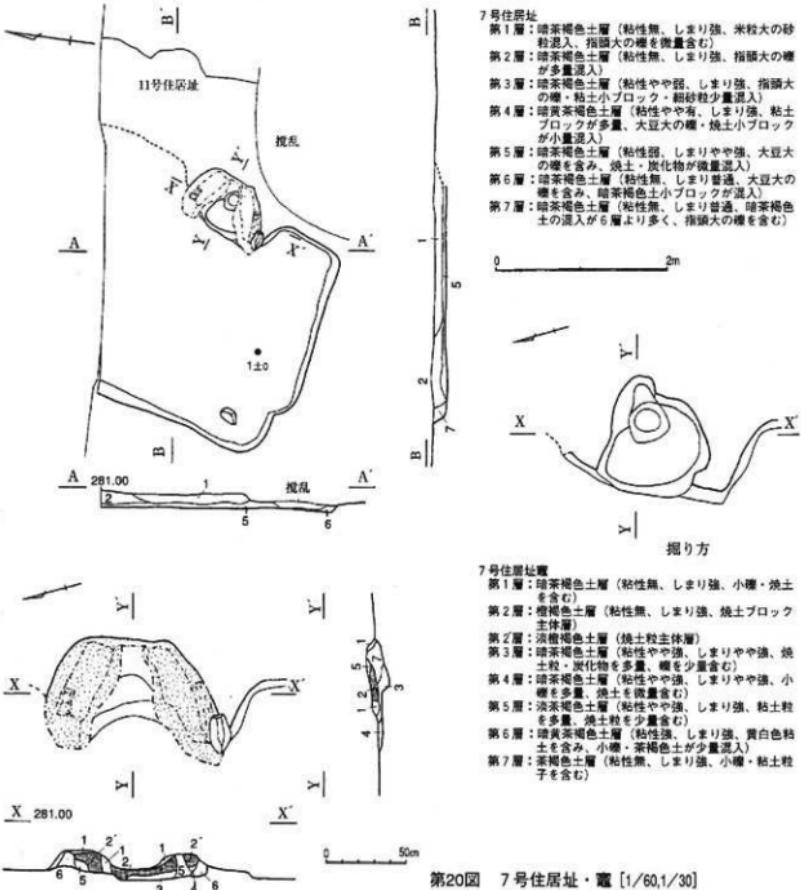
1は現長67cmを測り、両端とも欠損する。L字形を呈しているが、本来の形か否か不明である。一端は0.4cm角の方形断面を示し、他端は幅1.0cm、厚さ0.3cmの長方形断面をもつ。



第19図 6号住居址出土鉄製品 [1/2]

### 7号住居址（第20～21図、第7表、図版4・15）

発掘区中央部のF-7区に位置する。西6m程に8号住居址が存在し、南3.5m程には6号掘立柱建物址、6号住居址、4号掘立柱建物址が東一西に並んでいる。本址は北辺部を発掘区外へ残したため、3/4程を調査した。また11号住居址西半部を切って構築されている。



第20図 7号住居址・竈 [1/60, 1/30]

上部に削平を受けたため、東壁北半は確認できなかった。また南壁の張り出し部は掘りすぎの可能性が強い。形状は隅丸方形あるいは同長方形を呈し、規模は東一西で2.6mを測る。主軸方位はN=107°—Eにとる。壁高は8~15cmを測るが東壁北半部は検出されない。壁は直角度で直状に立上がる。

床面は非常に軟弱で、地山の塵、小礫が露出している。竈は1基付設され、柱穴、周溝等は検出されなかった。

### 竈

東壁に付設される。住居址の南—北規模が明確でないが、東壁中央からやや南寄りと考えられる。規模は現状で長さ70cm、幅105cm程を測り、主軸方位はN=105°—Eにとる。住居壁面を掘りのこし、その先端に袖石をおき芯材として粘土を貼って構築している。焚口部から燃焼部は不整円形を呈し、住居内部へ張り出している。断面形は浅い皿状を呈し、深さは5cm程で、焚口部はなだらかに立ち上がる。燃焼部奥は40°程で立ち上がり、煙道部へ続く。覆土は7層に分けられる。第5・6層は袖部構築の粘土、第1層は天井部の崩落を示すものであろう。第2層は焼土主体層である。

### 出土遺物

出土遺物は少なく、図示したるものもわずかである。



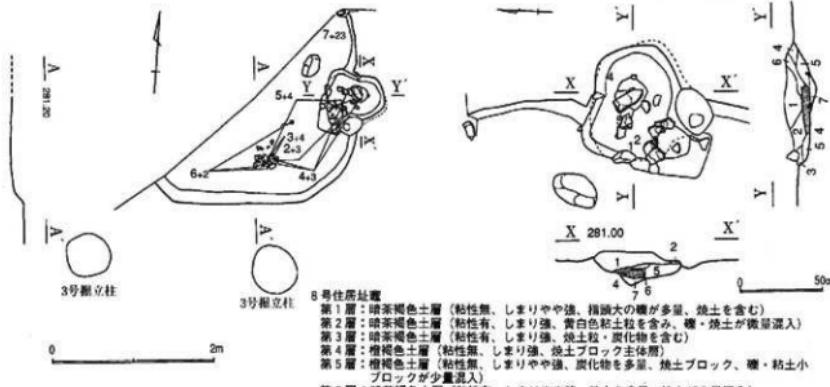
第21図 7号住居址出土土器 [13]

第7表 7号住居址出土土器観察表

1 須恵器 壺	A : $\ell$ (11.0)、b (5.8)、h 3.9。B : 1/2。C : 外面—底部回転ヘラケズリ。内面—ナデ。D : 密。 E : 良。F : 緑灰色 (75GY6/1)。
2 須恵器 蓋	B : 破片。C : 外面—回転ヘラケズリ。内面—回転ナデ。D : 密。E : 良。F : 灰色 (5Y5/1)。

### 8号住居址 (第22~23図、第8~9表、図版5・15)

発掘区中央のF—8区に位置する。東6mに7号・11号住居址が重複して存在し、南3m程に5号掘立柱建物



第22図 8号住居址・竈 [1/60・1/30]

が、南東5mに6号住居址が存在する。

北半部が調査区外となり南東部1/2弱が確認されたにすぎない。また上部をかなり削平されている。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は明確でないが、南西隅、北東隅の確認状況から25~3m四方のものであろう。壁高は10cm程で、壁は緩く内湾して立上がる。主軸方位はN=86° Eにくる。

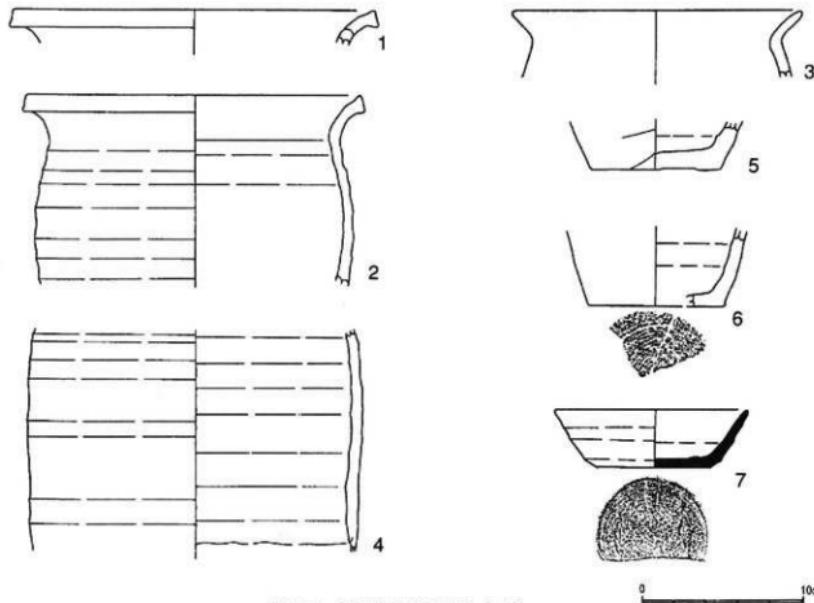
床面は軟弱で地山の縛・小砾が露出している。竈は1基付設されるが、柱穴・周溝は検出されなかった。

### 竈

東壁中央やや南寄りに構築される。上部を削平され、基底部が残るのみである。燃焼部は不整長円形を呈し、壁面を大きく掘り込んで造られる。床面からは25cm程掘り下がっている。焚口部はやや住居址内へ張り出し、やや角ばっている。燃焼部右脇に小ピットが穿たれ、袖の芯材をすえたものであろう。覆土は7層に分けられる。第4層は焼土ブロック主体層、第6層は竈構築材の崩壊土であろう。竈内からは多量の土器が出土している。

### 出土遺物

住居址南半部から集中して出土した。また竈内の破片と接合したもの(2・4・5)が多い。7は確認面からの出土である。



第23図 8号住居址出土土器 [1/3]

第8表 8号住居址出土土器観察表(1)

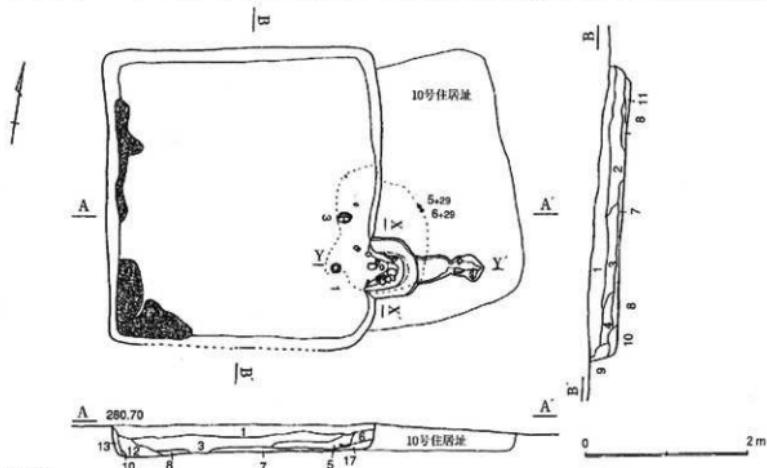
1	土師器 甕	B: 口縁部破片。C: 外面一ミガキ(部分的か?)。内面一ナデ。D: 細砂粒を含み密。E: 良。 F: 明赤褐色(25YR5/8)。
2	土師器 甕	A: ℓ(208)。B: 口縁部破片~胴部一部。C: 外面一口唇部ナデ。口縁部ナデ。胴部回転ナデ。 内面一口唇部ナデ。口縁部ナデ。胴部ヨコナデ。D: 套母、長石、細砂粒を含み密。E: 良。 F: 明赤褐色(25YR5/6)。

第9表 8号住居址出土土器観察表(2)

3	土師器 壺	A : $\ell$ (18.0)。B : 口縁部破片。C : 外内面一ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 赤褐色 (25YR4/6)。
4	土師器 壺	A : 脇部径 (21.0)。B : 脇部破片。C : 外面一回転ナデ。内面一ナデ。D : 雲母、長石、細砂粒を含み密。E : 良。F : 明赤褐色 (25YR5/8)。
5	土師器 壺	A : b (8.0)。B : 脇部下端～底部1/4。C : 外面一ハケのちナデ。底部ナデ。D : 長石を含み普通。E : 良。F : 明赤褐色 (25YR5/6)。
6	土師器 壺	A : b (8.6)。B : 脇部下部～底部1/4。C : 外面一脇部ハケのちナデ。底部ヘラナデ。内面一ナデ。D : 長石、細砂粒を含み普通。E : 外面一暗褐色 (75YR3/3)。内面一明褐色 (75YR5/6)。
7	須恵器 壺	A : $\ell$ 12.0, b 7.0, h 37.5。B : 2/3。C : 外面一体部上半回転ナデ。体部下半回転ヘラケズリ (時計方向) のち周辺部回転ヘラケズリ。内面一回転ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 灰色 (75Y5/1)。

## 9号住居址 (第24～26図、第10表、図版5.16)

発掘区西端のI・J—5区に位置する。北東10.5mに5号住居址が存在し、南7m程にピット群IIと土器滴り



## 9号住居址

- 第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり強、小穂・ローム粒を少量、焼土を極微量含む）  
 第2層：暗茶褐色土層（粘性弱、しまりやや有、ローム粒が既附り状に混入、ローム小ブロックを少量含む）  
 第3層：暗茶褐色土層（粘性弱、しまりやや強、ローム粒・ローム小ブロック・焼土が微量混入）  
 第4層：暗茶褐色土層（粘性弱、しまりやや強、ローム粒・ローム小ブロック・焼土粒を含む）  
 第5層：暗茶褐色土層（粘性やや有、ローム粒・粘土粒を少量、焼土を極微量含む）  
 第6層：暗茶褐色土層（粘性強、しまり有、粘土粒を多量、ローム粒を少量含む）  
 第7層：暗茶褐色土層（粘性強、しまりやや普通、ローム小ブロックを多量、焼土・炭化物を含む）  
 第8層：暗茶褐色土層（粘性やや有、しまりやや有、ローム粒を含み、ローム小ブロックが極量混入）

- 第9層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり強、ローム粒を多量含む）  
 第10層：暗茶褐色土層（粘性やや有、しまりやや有、ローム小ブロック・焼土・炭化物を混入）  
 第11層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり有、大豆大の種を多量、ローム小ブロックを少量混入）  
 第12層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり有、ローム粒を含む）  
 第13層：暗黄茶褐色土層（粘性強、しまりやや有、ローム粒を多量、微細種子を少量含む）  
 第14層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり強、小穂・ローム粒を少量、焼土を極微量含む）  
 第15層：暗黄茶褐色土層（粘性無、しまり強、ローム粒を多量含む）  
 第16層：暗茶褐色土層（粘性弱、しまりやや強、ローム小ブロック・ローム粒が多量混入）  
 第17層：淡茶褐色土層（粘性強、しまり有、粒子密、灰茶褐色粘土粒子主体層、焼土粒を少量含む）

第24図 9号住居址 [1/60]

が存在する。10号住居址西半部を切って構築されている。

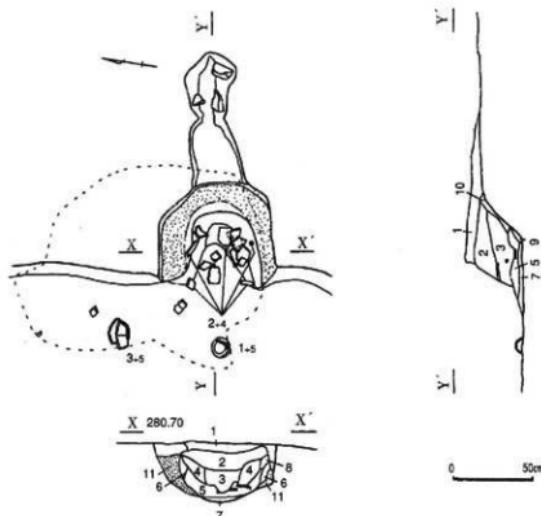
本遺跡としては良好な遺存状態を示している。平面形は方形を呈し、規模は37×34mを測る。主軸方位はN-Eをとる。壁高は25~40cmを割り、壁は内湾気味に急角度で立上がる。覆土は17層に分けられ、レンズ状の自然堆積を示す。上層ではローム粒の下層では焼土・炭化物粒が混入している。床面は軟弱で、西及び南西部壁際には多量の焼土・炭化物が認められ、僅かにローム粒子が混入した焼土ブロックの上部に炭化物が層状に堆積している。竈は1基付設されるが柱穴・周溝は検出されなかった。

### 竈

東壁南東隅に構築される。現状で幅75cm、長さ145cmを測る。燃焼部は良く残っているが、住居内に袖部等の痕跡がなく、人为的に破棄された可能性もある。燃焼部は表面をU字状に掘り込んで造られるが、床下からの掘り下げは観察されない。燃焼部奥は40°程で立ち上がり、U字状にのびる煙道部へ続く。煙道部は幅30cm、長さ60cm程を測り5°程でゆっくり立ち上がって、煙出し部で完結する。覆土は11層に分けられた。第3~7層には焼土が混入し、特に第6層は焼土ブロック主体層がある。第1~11層は粘土主体層で、第11層は燃焼部表面に貼られ、おそらく袖部へ続くものであろう。第1層は天井部の崩落であろう。燃焼部内から多量の土器片が出土している。

### 出土遺物

出土量は少なく、竈前に集中している。1は竈直前に逆位で、3は同左前から斜位で出土した。2は竈内から断片化して出土した。

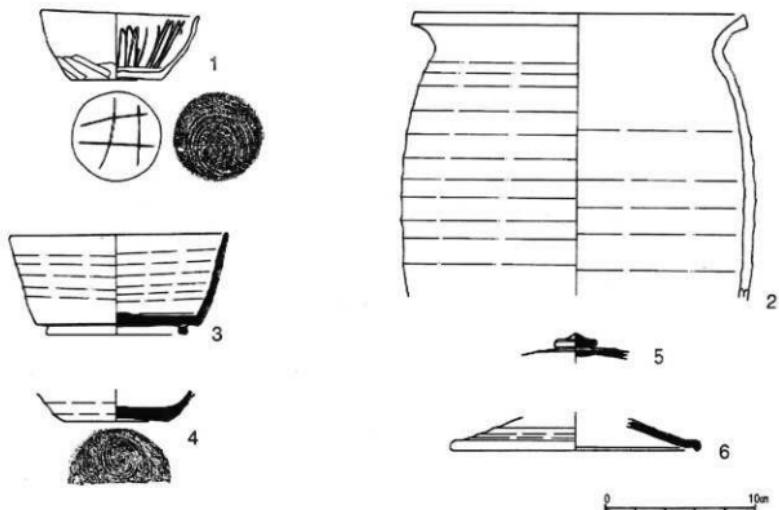


#### 9号住居址竈

- 第1層：淡茶褐色土層（粘性強、しまり有、粒子密、灰茶褐色  
粘土粒子主体層、焼土粒を少量含む）
- 第2層：暗茶褐色土層（粘性強、しまり強、粒子密、灰茶褐色  
粘土小ブロックを少量含む）
- 第3層：暗茶褐色土層（粘性弱、しまりやや強、粒子密、焼土  
粒が微量混入）
- 第4層：暗茶褐色土層（粘性やや有、しまり強、粒子密、灰茶  
褐色・焼土小ブロックが少量混入）
- 第5層：暗茶褐色土層（粘性やや弱、しまり有、粒子密、焼土  
ブロックを多量含む）

- 第6層：橙褐色土層（粘性無、しまり強、粒子密、焼土主体層、  
灰茶褐色粘土粒を含む）
- 第7層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり弱、粒子密、焼土粒・  
炭化物・黄褐色ローム粒子を少量含む）
- 第8層：茶灰色・黄褐色土層（粘性強、しまり強、粒子密、焼土粒  
を含む）
- 第9層：暗茶褐色土層（粘性やや弱、しまり有、炭化物を含み、  
焼土が少量混入）
- 第10層：暗茶褐色土層（粘性やや弱、しまり強、粒子密、焼土  
ブロックを多量含む）
- 第11層：淡茶褐色土層（粘性有、しまりやや強、灰白色粘土・  
黄褐色土—袖部又は袖部の崩壊土）

第25図 9号住居址竈 [1/30]



第26図 9号住居址出土土器 [1/3]

第10表 9号住居址出土土器観察表

1	土師器 壺	A : ℓ 104. b 60. h 46. B : ほぼ完形。C : 外面一口唇部～体部上半でいねいなナデ。体部下半ヘラケズリ。底部回転糸切り(時計方向)のち周辺部回転ヘラケズリ。内面一ナデのち暗文(身こみ部に及ぶ)。スヌ付着(身こみ部)。D : 密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。G : 底部に「井」刻書有り。
2	土師器 壺	A : ℓ (224). B : 口縁部破片。胴部破片。C : 外面一口唇部～口縁部ナデ。胴部回転ナデ。内面一口縁部ナデ。胴部ナデ。D : 長石、細砂粒を含み密。E : 良。F : 明赤褐色 (5 YR5/6)。
3	須恵器 壺	A : ℓ 147. b 110. h 68. B : 4/5. C : 外面一ナデ。底部回転ヘラケズリのち高台部貼付のちナデ。内面一ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 灰色 (10Y5/1)。
4	須恵器 壺	A : b 70. B : 底部1/2。C : 外面一ヘラケズリ。底部回転糸切り(時計方向)のち周辺部ヘラケズリ。内面一ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 浅黄色 (25Y7/3)。
5	須恵器 蓋	B : 宝珠部完。C : 外面一ナデ。宝珠部貼付。内面一ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 緑灰色 (5 G6/1)。
6	須恵器 蓋	A : ℓ (164)。B : 破片。C : 外内面一ナデ。D : 密。E : 良。F : 緑灰色 (5 G6/1)。

10号住居址 (第27図、図版6)

発掘区西端部のI・J—5区に位置する。北東5mに5号住居址が存在する。

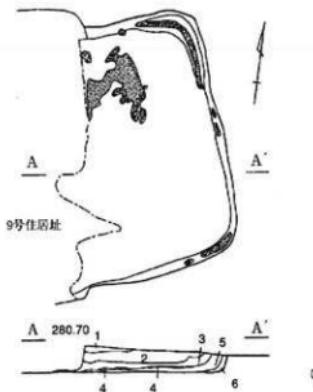
西半部を大きく9号住居址に切られている。平面形は方形あるいは長方形を呈し、隅部はやや丸味を帯びる。規模は南北で3.2mを測る。主軸方位は竪が未検出のため不明である。壁高は20cmを測り、壁は急角度で直状に立上がる。覆土は6層に分けられる。全体的に焼土粒が混入し、第6層には炭化物が混入する。第3・4層には

地山の再堆積ロームと思われる多量の黄褐色土ブロックを含む。全体としてレンズ状の自然堆積を示すが。第4層は人為的な堆積の可能性が強い。

床面は軟弱で、北東・南東隅及び北東部には多量の炭化物・焼土が認められた。竈・柱穴は検出されなかったが、北東隅の一部にテラス状の段部が認められた。

#### 出土遺物

出土遺物は少なく、図示もしえなかった。



第27図 10号住居址 [1/60]

#### 10号住居址

- 第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり強小穂・ローム粒を少量、燒土を極微量含む）
- 第2層：暗黃茶褐色土層（粘性無、しまり強、黄褐色土粒子を多量含む）
- 第3層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり強、黄褐色土ブロックが多量混入、部分的に通源有り）
- 第4層：暗黃茶褐色土層（粘性やや強、しまりやや有、黃色土ブロックを多量、燒土粒を少量含む）
- 第5層：黄褐色土層（粘性やや強、しまりやや有、茶褐色土粒子・小豆大の礫を微量含む）
- 第6層：黄茶褐色土層（粘性やや有、しまり普通、暗茶褐色土を多量、炭化物が部分的に少量混入）

#### 11号住居址 (第28図～29図、図版6)

発掘区中央のF-9区に位置する。西10mに8号住居址が存在し、南5mに6号住居址・4号掘立柱建物が並んでいる。

遺存状態は非常に悪い。北半部は発掘区外となり、西半部は7号住居址に切られている。また東南部に搅乱を受けたため竈部分しか検出されなかった。

平面形、規模とも不明である。竈から推定される主軸方位はN-100°—Eである。壁高は10cmを残し、残存部では直立に立ち上がる。



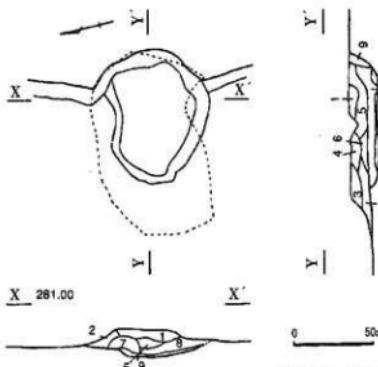
第28図 11号住居址 [1/60]

## 電

東壁に構築されている。規模は長さ84cm、幅65cmを測る。燃焼部は壁を浅く椀状に掘り込んで造られ不整梢円形を呈する。床面から8cm程掘り下げられている。焚口部は住居内側へ大きく張り出している。燃焼部奥は約65°で立ち上がり、煙道部へと続く。覆土は9層に分けられる。第7層の粘土ブロックは遺構基材の残存であろう。

## 出土遺物

出土遺物はごく少量で、図示もしえなかった。



第29図 11号住居址 [1/30]

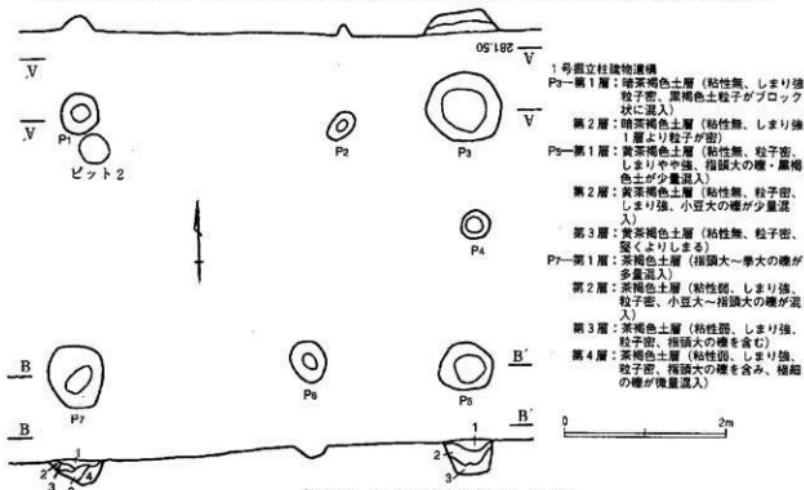
## 11号住居址

- 第1層：暗茶褐色土層（粘性やや弱、しまり普通、焼土を含み、礫・粘土粒が少量混入）
- 第2層：暗茶褐色土層（粘性やや弱、しまりやや有、粘土粒・礫を含み、焼土が微量混入）
- 第3層：暗灰褐色土層（粘性有、しまり強、焼土ブロック・粘土ブロックを含み、礫が少量混入）
- 第4層：暗褐色土層（粘性無、しまり強、焼土ブロック主体層）
- 第5層：暗茶褐色土層（粘性有、しまり弱、礫・焼土を少量含む）
- 第6層：暗茶褐色土層（粘性有、しまりやや強、粘土粒・焼土・礫を含む）
- 第7層：茶灰色土層（粘性有、しまり強、粘土ブロックを多量含み、礫・焼土が混入）
- 第8層：暗茶褐色土層（粘性やや有、しまり弱、礫を多量、焼土粒が微量混入）
- 第9層：暗茶褐色土層（粘性やや有、しまり弱、焼土小ブロックを多量、炭化物・礫が少量混入）

## 2) 挖立柱建物遺構

### 1号掘立柱建物遺構 (第30図、第11表)

発掘区中央北寄りのE-11区に位置する。南面8mに4号住居址が、南15mに3号掘立柱遺構が存在する。



第30図 1号掘立柱建物遺構 [1/60]

長軸方位を東一西にとる 2 間 × 2 間の掘立柱建物で、規模は東一西 48m、南一北 33m を測る。各柱穴の規模及び柱穴間距離は別表の通りである。P<sub>1</sub>を除いて四隅の柱穴は大きく、他は小ぶりである。南北方向西列のP<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>間からは柱穴は検出されない。また長軸方向の中間柱穴 (P<sub>2</sub>, P<sub>6</sub>) は中間よりも東側へ寄っている。覆土は各柱穴毎に相違をみせるが、全体的によくしまった土である。

#### 出土遺物

P<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>7</sub>内より土器が出土したが、断片化の為図示しえなかった。

#### 2号掘立柱建物遺構 (第31図、第11表、図版7)

発掘区中央北寄りのE、F-11区に位置する。西 55m に 4 号住居址が、北東 15m に 1 号掘立柱建物址が存在する。長軸方位を南一北にとる、1 間 × 2 間の掘立柱建物で、規模は南一北 4.4 ～ 4.5m、東一西 2.2 × 2.3m を測る。上部に削平を受けたため各柱穴の規模及び柱穴間距離は別表の通りである。南一北方向西列のP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の中間からは柱穴は確認されなかった。覆土は 2 層に分けられ、小甕の混入が顕著である。

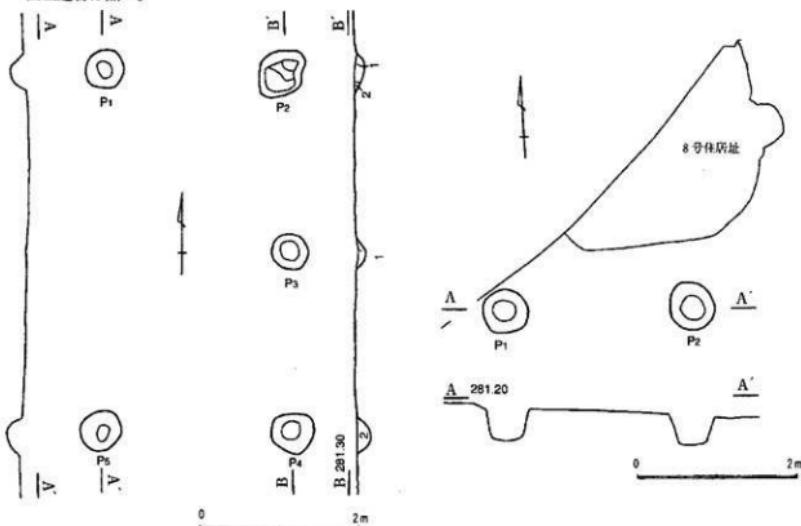
#### 出土遺物

P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、より土器が出土しているが、断片化の為図示しえない。

#### 3号掘立柱建物遺構 (第32図、第11表)

発掘区中央高寄りのF、G-8区に位置する。南 2 m に 5 号掘立柱建物遺構・南東 4 m に 6 号住居址が存在する。東西に並ぶ 2 個の柱穴を検出したのみである。柱穴及び周囲の状況から、北へのびる建物遺構の南列であろうと推定した。8 号住居址と重複する 1 間 × 1 間の建物遺構であろう。柱穴規模、柱穴間距離は別表の通りである。方位は東一西或は南一北にとる。

#### 出土遺物は無い。



#### 2号掘立柱建物遺構 (P<sub>2</sub>～P<sub>7</sub>)

第1層：茶褐色土層（粘性無、しまり強、粒子密、指頭大の糠が混入）  
第2層：茶褐色土層（粘性無、しまり有、粒子密、小豆大～指頭大の糠を含む）

第31図 2号掘立柱建物遺構 [1/60]

#### 3号掘立柱建物遺構

第1層：茶褐色土層（粘性弱、しまり強、拳大の糠が混入）

第32図 3号掘立柱建物遺構 [1/60]

#### 4号掘立柱建物遺構（第33図、第11表、図版7）

発掘区中央部のG—9区に位置する。西25mに6号住居址が存在し、北6mには7号・11号住居址が切り合って存在する。南東部が発掘区域外となるが、長軸方位をほぼ東—西にとる掘立柱建物である。現状では2間×2間で、東—西43m、南—北34mを測る規模と考えられる。各柱穴の規模・柱穴間距離は別表の通りである。各隅部の柱穴に比べ、各中間柱穴は一回り小さい。P<sub>2</sub>覆土からは焼土・炭化物が検出された。

#### 5号掘立柱建物遺構（第34図、第11表、図版7）

発掘区中央南寄りのG—7・8区に位置する。北3mに8号住居址が、東6mに6号住居址が、南35mに6号掘立柱建物遺構が存在する。長軸方向を東—西にとる。2間×2間の掘立柱建物で規模は東西39~41m、南北4mを測る。各柱穴規模及び柱穴間距離は別表に示した通りだが、各柱穴の深さから上部にかなり削平を受けている可能性が強い。南列柱穴の様相からは、各隅部の柱穴が中間柱穴に比べ一回り大きいものと思われる。各柱穴とも覆土上層に茶褐色土ブロックが、同下層に拳大礫の混入が顯著である。

#### 6号掘立柱建物遺構（第35図、第11表、図版7）

発掘区南半部のH—7・8区に位置する。北東95mに6号住居址が、北35mに5号掘立柱建物遺構が存在し、西10mには1号溝状遺構が走っている。長軸方位をN—19°—Wにとる。1間×1間の掘立柱建物で、南北21~22m、東—西19~21mを測る。各柱穴規模及び柱穴間距離は別表の通りであるが、上部にかなり削平されている。覆土には全体的に小礫が混入し、P<sub>4</sub>には茶褐色土ブロックが混入する。

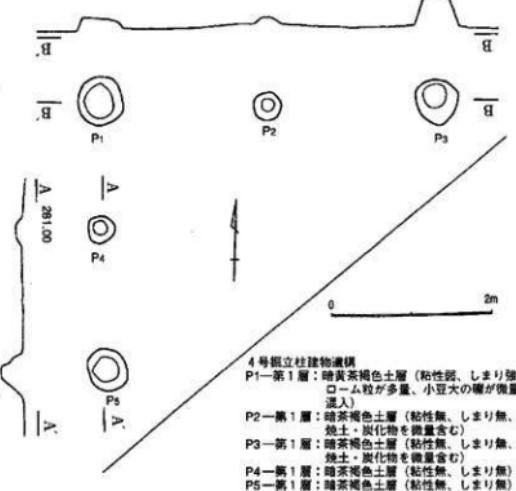
#### 3) 棚列状遺構

##### 1号棚列遺構（第36図、第11表）

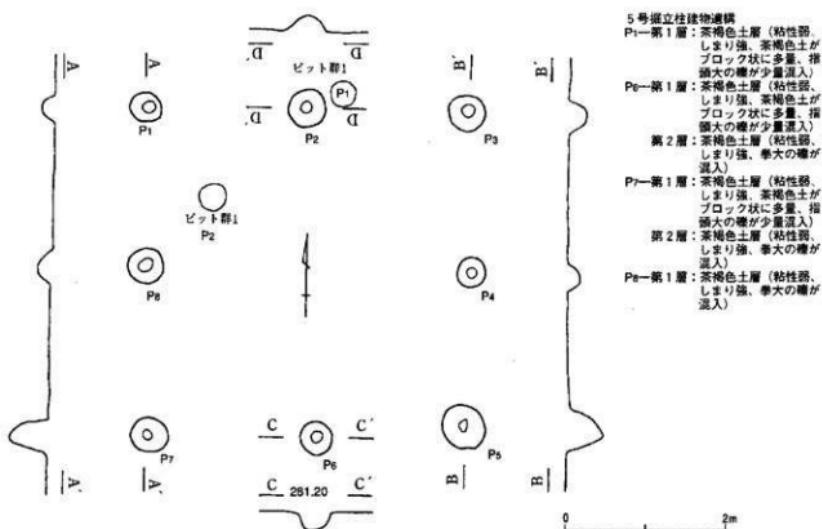
発掘区中央南寄りのG—8区に位置する。東6mに4号掘立柱建物遺構が、西2mに5号住居址が存在する。また北延長線上に3号掘立柱建物遺構と8号住居址が重複して存在する。2ピット一組で、N—10°—Wに延びている。この棚列の南延長線上に、1号棚列状遺構の西端ピットが存在する。当初この両者で掘立柱建物遺構を示すものと想定したが、相対する柱穴列が検出されないこと、ピット間距離に無理が生ずることから棚列状遺構とした。しかし、この両者は何らかの関係がある可能性が強い。なお、1号棚列状遺構をさらに南へ延長するとピット群Iへ達する。覆土は2号棚列状遺構とほぼ同じで、出土遺物は無い。

##### 2号棚列状遺構（第37図、第11表）

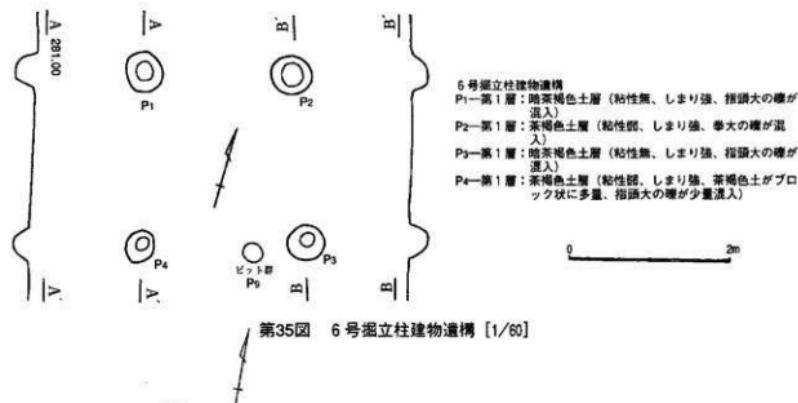
発掘区中央南寄りのG—8区に位置する。北1m程に6号住居址が、南にはピット群が存在する。棚列4ピット一組で、N—100°—Wの方位に延べ、6号住居址とやや斜行する。西端のピットは2号棚列の延長上にあたる。ピット規模、ピット間距離は別表の通りである。覆土には拳大の礫が多量に混入する。出土遺物は無い。



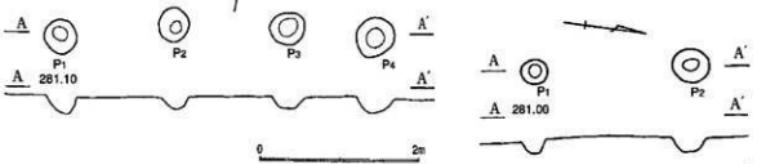
第33図 4号掘立柱建物遺構 [1/60]



第34図 5号掘立柱建物遺構 [1/60]



第35図 6号掘立柱建物遺構 [1/60]



第36図 1号柵列状遺構 [1/60]

第37図 2号柵列状遺構 [1/60]

第11表 1～6号掘立柱建物遺構・1～2号柵列状遺構の柱穴規格及び柱穴間距離一覧表

## 1号掘立柱建物遺構

柱穴規格 (長さ×短、深)	柱穴間距離
P <sub>1</sub> —50cm×45cm、18cm	P <sub>1</sub> ～P <sub>3</sub> —3.3m、1.5m
P <sub>2</sub> —40cm×25cm、15cm	P <sub>3</sub> ～P <sub>5</sub> —1.45m、1.7m
P <sub>3</sub> —95cm×85cm、27cm	P <sub>5</sub> ～P <sub>7</sub> —2.0m、2.8m
P <sub>4</sub> —35cm×35cm、23cm	P <sub>7</sub> ～P <sub>1</sub> —3.3m
P <sub>5</sub> —70cm×60cm、45cm	
P <sub>6</sub> —53cm×42cm、15cm	
P <sub>7</sub> —78cm×68cm、30cm	

## 5号掘立柱建物遺構

柱穴規格 (長×短、深)	柱穴間距離
P <sub>1</sub> —40cm×35cm、15cm	P <sub>1</sub> ～P <sub>3</sub> —2m、2m
P <sub>2</sub> —48cm×45cm、20cm	P <sub>3</sub> ～P <sub>5</sub> —2m、1.9m
P <sub>3</sub> —47cm×45cm、22cm	P <sub>5</sub> ～P <sub>7</sub> —1.85m、2.15m
P <sub>4</sub> —36cm×35cm、15cm	P <sub>7</sub> ～P <sub>1</sub> —2.1m、2m
P <sub>5</sub> —59cm×50cm、45cm	
P <sub>6</sub> —43cm×40cm、20cm	
P <sub>7</sub> —47cm×42cm、48cm	

## 2号掘立柱建物遺構

柱穴規格 (長×短、深)	柱穴間距離
P <sub>1</sub> —48cm×48cm、18cm	P <sub>1</sub> ～P <sub>2</sub> —2.2m
P <sub>2</sub> —70cm×55cm、13cm	P <sub>2</sub> ～P <sub>4</sub> —2.2m、2.25m
P <sub>3</sub> —48cm×43cm、10cm	P <sub>4</sub> ～P <sub>5</sub> —2.4m
P <sub>4</sub> —55cm×50cm、18cm	P <sub>5</sub> ～P <sub>1</sub> —4.5m
P <sub>5</sub> —50cm×45cm、18cm	

## 6号掘立柱建物遺構

柱穴規格 (長×短、深)	柱穴間距離
P <sub>1</sub> —50cm×45cm、25cm	P <sub>1</sub> ～P <sub>2</sub> —1.9m
P <sub>2</sub> —50cm×47cm、20cm	P <sub>2</sub> ～P <sub>3</sub> —2.1m
P <sub>3</sub> —47cm×45cm、25cm	P <sub>3</sub> ～P <sub>4</sub> —2.1m
P <sub>4</sub> —42cm×35cm、20cm	P <sub>4</sub> ～P <sub>1</sub> —2.2m

## 3号掘立柱建物遺構

柱穴規格 (長×短、深)	柱穴間距離
P <sub>1</sub> —55cm×55cm、40cm	P <sub>1</sub> ～P <sub>2</sub> —2.4m
P <sub>2</sub> —60cm×55cm、37cm	

## 1号柵列状遺構

柱穴規格 (長×短、深)	柱穴間距離
P <sub>1</sub> —44cm×38cm、25cm	P <sub>1</sub> ～P <sub>2</sub> —1.4m
P <sub>2</sub> —43cm×38cm、17cm	P <sub>2</sub> ～P <sub>3</sub> —1.4m
P <sub>3</sub> —43cm×38cm、16cm	P <sub>3</sub> ～P <sub>4</sub> —1.1m

## 4号掘立柱建物遺構

柱穴規格 (長×短、深)	柱穴間距離
P <sub>1</sub> —60cm×55cm、15cm	P <sub>1</sub> ～P <sub>3</sub> —2.15m、2.1m
P <sub>2</sub> —35cm×35cm、10cm	P <sub>1</sub> ～P <sub>5</sub> —1.6m、1.75m
P <sub>3</sub> —58cm×50cm、40cm	
P <sub>4</sub> —35cm×33cm、8cm	
P <sub>5</sub> —55cm×47cm、28cm	

## 2号柵列状遺構

柱穴規格 (長×短、深)	柱穴間距離
P <sub>1</sub> —45cm×40cm、20cm	P <sub>1</sub> ～P <sub>2</sub> —2m
P <sub>2</sub> —33cm×30cm、18cm	

#### 4) 構造遺構

##### 1号溝状遺構（第38図、図版6）

発掘区南半のG・H・I-6区に位置する。東2mに4号土壙が、西4mに5号住居址が存在する。発掘区を斜めに横切る幅60~120cmの溝で、南北方向に走っている。断面形は鍋底状を呈し、深さ25~30cmで壁は急角度に立ち上がる。覆土は4層に分けられ、上層には黄褐色土が、下層には黒色砂礫が混入する。本遺跡の遺構確認面は、この溝を境に北東側は黒色砂礫主体層、南西側は黄褐色土（再堆積ローム）層となっている。

#### 5) 土壙・ピット・ピット群

##### 1号土壙（第38図）

B-15区に位置する。上部に削平を受け、基底部のみ検出した。平面形は不整円形で、規模は64×52cmを測る。断面形は鍋底状を呈し、深さは6cmを測る。長軸方向はN-38°-Eにとる。

##### 2号土壙（第38図）

E-11区に位置し、南1mに3号土壙が存在する。上部に削平を受け、基底部のみ検出した。平面形は梢円形を呈し、規模は51×46mを測る。断面形は鍋底状を呈し、深さは4cmを測る。長軸方位はN-16°-Eにとる。

##### 3号土壙（第38図）

E-11区に位置し、2号土壙と南北に並んでいる。上部に削平を受け、基底部のみ検出した。平面形は不整梢円形を呈し、規模は43×38cmを測る。断面形は鍋底状を呈し、深さは6cmである。長軸方位はN-7°-Eにとる。覆土に黄褐色土小ブロックが混入する。

##### 4号土壙（第38図）

H・I-7区に位置する。上部がかなり削平された可能性が強い。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は7.2×43mと大型の土壙である。断面形は皿状を呈し、東端部に段部をつくる。深さは14cmである。長軸方位はN-95°-Eにとる。覆土は5層に分けられるが、黄褐色土を主体とする。

#### I区ピット（第38図）

##### ピット1

C-14区に位置する。規模27×26×10cm。覆土は黄褐色土主体。

##### ピット2

E-11区に位置する。規模38×35×20cm

##### ピット3

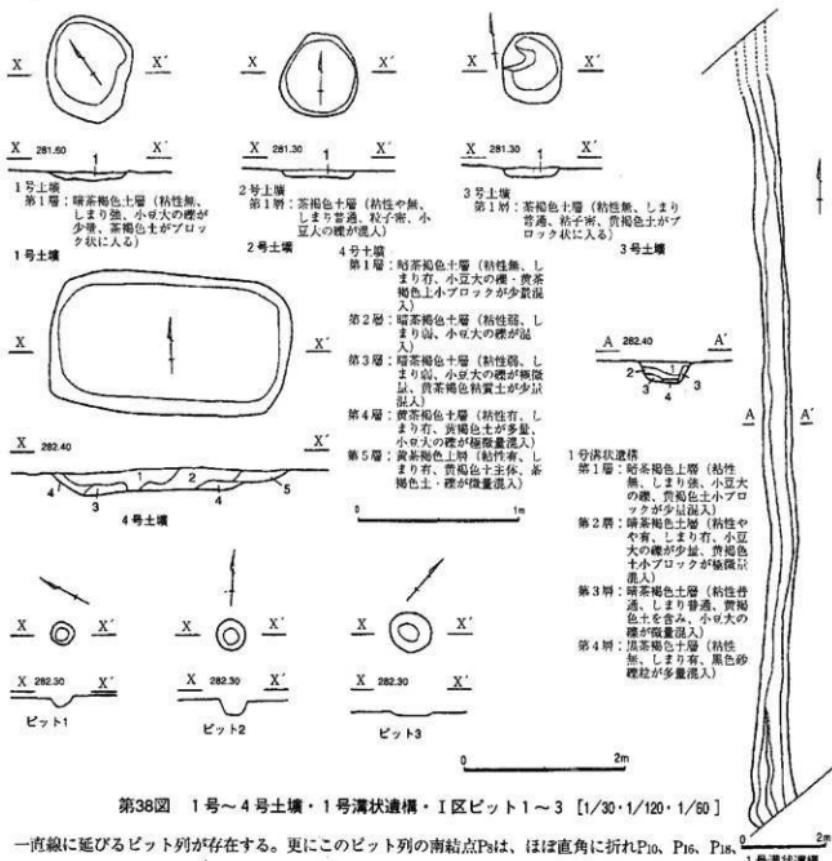
E-10区に位置する。規模26×24×5cm

三者とも上部の削平が激しい。

#### ピット群I（第39~40図、第12~13表、図版18）

発掘区南半のG・H-7・8・9区に位置する。4号・6号掘立柱建物遺構を取り囲むように存在し、北・東側では6号住居址・4号掘立柱建物遺構と接している。

総計24個のピットが遺構密集地の南に接するように存在する。各ピットの規模一覧は別表の通りであるが、P<sub>3</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>17</sub>、P<sub>18</sub>、P<sub>24</sub>が径50cmを越えるが、他は径30~40cmを測る規模である。これらの中、P<sub>24</sub>は2号柵列の延長上にあり、このピットではほぼ直角に折れ、P<sub>20</sub>、P<sub>22</sub>へと続く。6号掘立柱建物遺構のすぐ南にあるP<sub>9</sub>はP<sub>13</sub>、P<sub>12</sub>、P<sub>14</sub>、P<sub>23</sub>、とほぼ一直線に延びる列状に配置される。また、5号掘立柱建物遺構の西にはP<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>8</sub>とほぼ

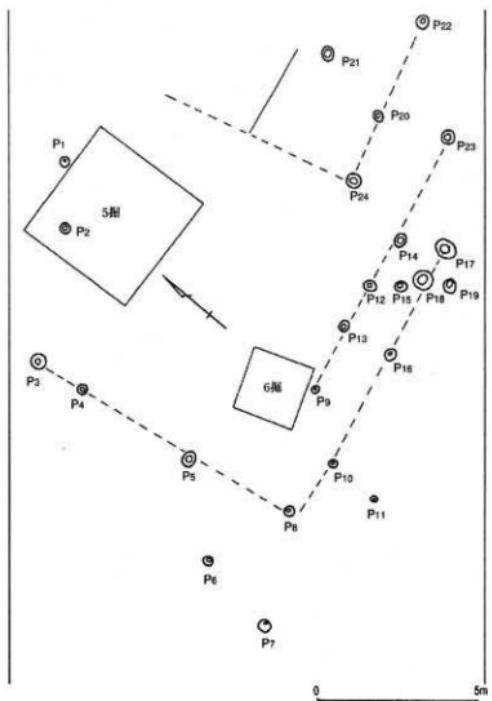


第38図 1号～4号土壤・1号溝状遺構・I区ピット1～3 [1/30・1/120・1/60]

一直線に延びるピット列が存在する。更にこのピット列の南端点P<sub>1</sub>は、ほぼ直角に折れP<sub>10</sub>、P<sub>16</sub>、P<sub>18</sub>、P<sub>17</sub>と続くピット列の基点となる。この四者は、各ピットの規模、ピット間隔とも統一性がなく、横列として扱うには疑問が多い。しかし、これらのピット列は、P<sub>3</sub>～P<sub>8</sub>の2号構列状遺構と、他の三者は1号構列状遺構とはほぼ同方位をとる。また、これらは1号構列状遺構とはほぼ同方位をとる。また、これらのピット列はF・G・H-7・8・9区に密集する遺構群を取り囲むように並んでおり、注目しておくべきものと考えられる。覆土は、ほとんどに小砾が混入するか、茶褐色土ブロックが混入するものと、しないものとに分けられ、またP<sub>11</sub>底部には焼土が認められた。

第12表 ピット群I柱穴規模

			長×短、深cm
P <sub>1</sub> -30×30、12	P <sub>7</sub> -40×34、44	P <sub>13</sub> -34×30、22	P <sub>19</sub> -44×35、20
P <sub>2</sub> -35×32、27	P <sub>8</sub> -38×32、14	P <sub>14</sub> -44×34、14	P <sub>20</sub> -36×28、10
P <sub>3</sub> -49×48、20	P <sub>9</sub> -28×22、12	P <sub>15</sub> -40×30、10	P <sub>21</sub> -46×38、20
P <sub>4</sub> -30×26、10	P <sub>10</sub> -28×22、11	P <sub>16</sub> -40×32、15	P <sub>22</sub> -44×40、20
P <sub>5</sub> -52×40、16	P <sub>11</sub> -24×18、18	P <sub>17</sub> -72×50、30	P <sub>23</sub> -42×40、18
P <sub>6</sub> -32×28、10	P <sub>12</sub> -42×34、20	P <sub>18</sub> -65×55、33	P <sub>24</sub> -48×45、35

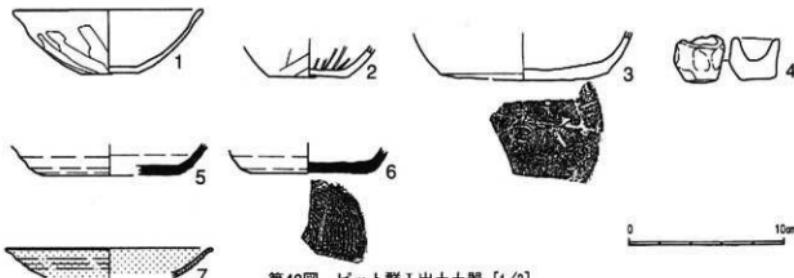


ピット群I

- P1—第一層：黄茶褐色土層（粘性弱、しまり強、小礫が少量混入）  
 P4—第一層：茶褐色土層（粘性弱、しまり強、茶褐色土がブロック状に多量、指頭大の礫が少量混入）  
 P5—第一層：茶褐色土層（粘性弱、しまり強、茶褐色土がブロック状に多量、指頭大の礫が少量混入）  
 P7—第一層：砂利層  
 P8—第一層：茶褐色粘質土層（小礫が微量混入）  
 P9—第一層：茶褐色土層（粘性弱、しまり強、茶褐色土がブロック状に多量、指頭大の礫が少量混入）  
 P9—第一層：茶褐色土層（粘性弱、しまり強、茶褐色土がブロック状に多量、指頭大の礫が少量混入）  
 P10—第一層：緑茶褐色土層（粘性弱、しまり強、指頭大的礫が混入）  
 P11—第一層：緑茶褐色土層（粘性弱、しまり強、指頭大的礫を含み、底部に焼土が混入）

- P12—第一層：茶褐色土層（粘性弱、しまり強、茶褐色土がブロック状に多量、指頭大の礫が少量混入）  
 P13—第一層：黄茶褐色土層（粘性弱、しまり強、茶褐色土が混入）  
 P14—第一層：茶褐色土層（粘性弱、しまり強、拳大の礫が混入）  
 P15—第一層：茶褐色土層（粘性弱、しまり強、茶褐色土がブロック状に多量、指頭大の礫が少量混入）  
 P16—第一層：茶褐色粘質土層（粘性弱、しまり強、指頭大的礫が混入）  
 P17—第一層：緑茶褐色土層（粘性弱、しまり無、礫が少量混入）  
 P18—第一層：緑茶褐色土層（粘性弱、しまり無、礫が中量混入）  
 P20—第一層：茶褐色土層（粘性弱、しまり強、茶褐色土がブロック状に多量、指頭大の礫が少量混入）  
 P21—第一層：緑茶褐色土層（粘性弱、しまり強、拳大の礫が混入）  
 P22—第一層：緑茶褐色土層（粘性弱、しまり無）

第39図 ピット群I [1/150]



第40図 ピット群I 出土土器 [1/3]

第13表 ピット群I出土土器観察表

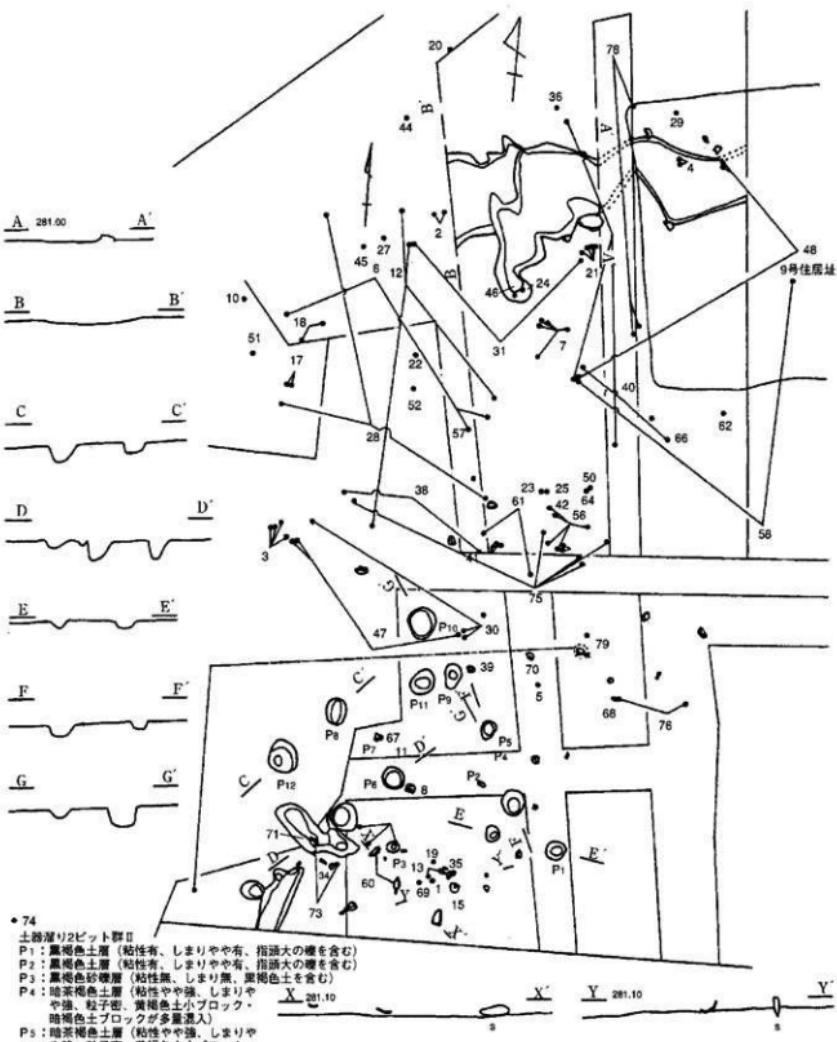
1	土師器 坏	A : ℓ (122)、b 34. h 41。B : 1/2。C : 外面一口唇部～体部上半ナデ。体部下半ナデのちヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内面一ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (7.5YR7/6)。
2	土師器 坏	A : b (50)。B : 体部下部～底部1/2。C : 外面～体部下半ヘラケズリ(時計回り)。内面一ナデのち暗文。底部ヘラケズリ。D : 密。E : 良。F : 外面～橙色 (5YR7/8)。内面～浅黄橙色 (10YR8/4)。
3	土師器 坏	A : b (110)。B : 体部下部～底部1/4。C : 外面～体部摩耗が激しく不明。底部ヘラケズリ。内面一ナデ。D : 密。E : 良。F : 橙色 (7.5YR7/6)。
4	土師器 手捏ね	A : ℓ 30. b 22. h 30. B : 完形。C : 外面一指押え、ナデ。底部ナデ。内面一ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/6)。
5	須恵器 坏	A : b (88)。B : 体部下端～底部1/4。C : 外面一回転ナデ。体部下端ヘラケズリ。底部回転糸切りのち周辺ヘラケズリ。内面一回転ナデ。D : 密。E : やや軟質。F : 灰白色 (7.5Y8/1)。
6	須恵器 坏	A : b (76)。B : 底部1/4。C : 外面一回転ナデ。底部回転糸切り。内面一回転ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 灰白色 (7.5Y7/1)。
7	灰釉陶器 塊	A : ℓ (134)。B : 口縁部～体部上半破片。C : 外内面一回転ナデ。D : 繊密。E : 良。F : 灰オーリーブ色 (7.5Y6/2)。G : 軸を施す。

## 6) 土器瀧口2、ピット群II(第41～45図、第14～19表、図版8・16)

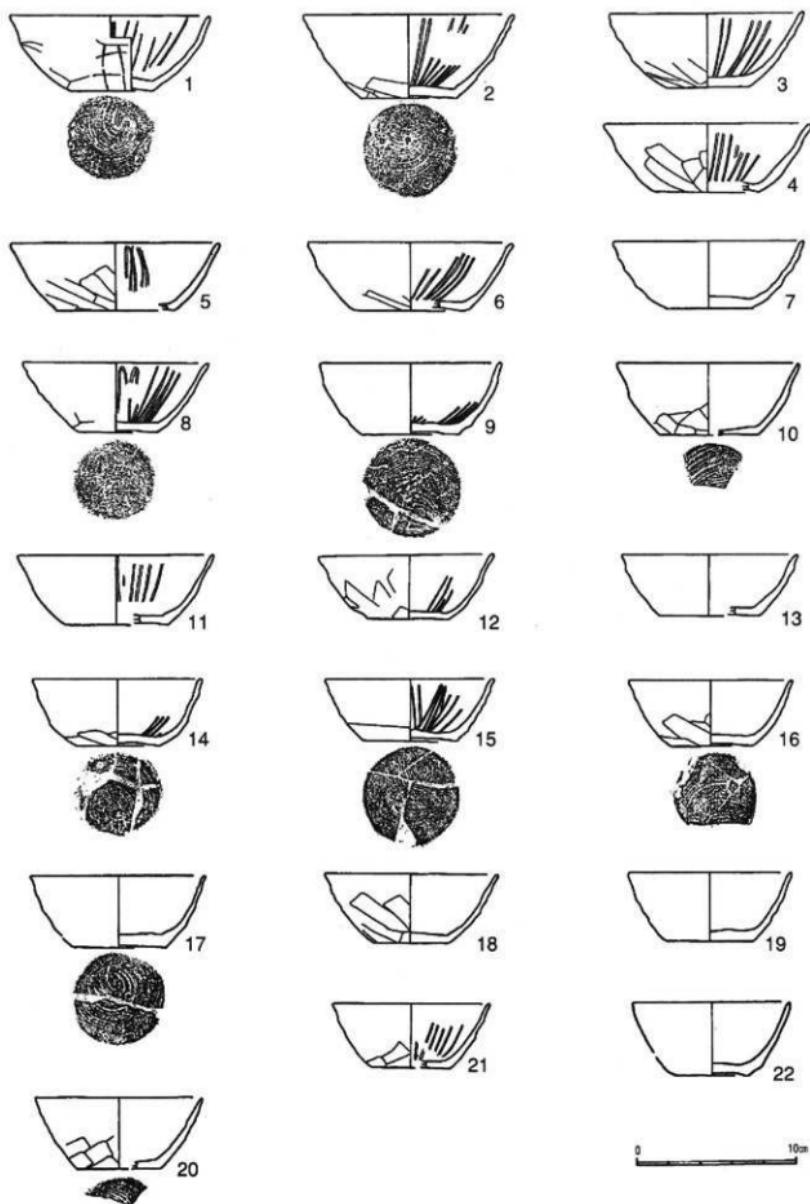
発掘区南端のI・J—4・5区に位置する。基本9層の黄褐色土(再堆積ローム)の上面に認められた。基本土層の様相から上部をかなり削平されていると考えられる。土器瀧口の範囲は、南—北11m、東—西8mで、ほぼ梢円形平面を呈している。土器を包含する層は5～10cm程である。包含層下面では、特に南半部でピット群IIが検出され、その周囲から人為的に置かれた砾や、完形品の上器(坏類)が出土している。各ピットの覆土は黄褐色土(再堆積ローム)及び小砾の混入が顕著である。また北半部は破碎された土器が散乱した状態で出土した。土器瀧口の北辺及び南西辺には幅1m程の浅い溝状の落込が認められ、両者とも自然の流路である可能性が強い。特に壺類は人為的と思われる断片化が激しく、図示したものは坏類が圧倒的である。尚、各ピットの規模一覧、出土土器の数量一覧は別表に示した通りである。

第14表 ピット群IIピット規模

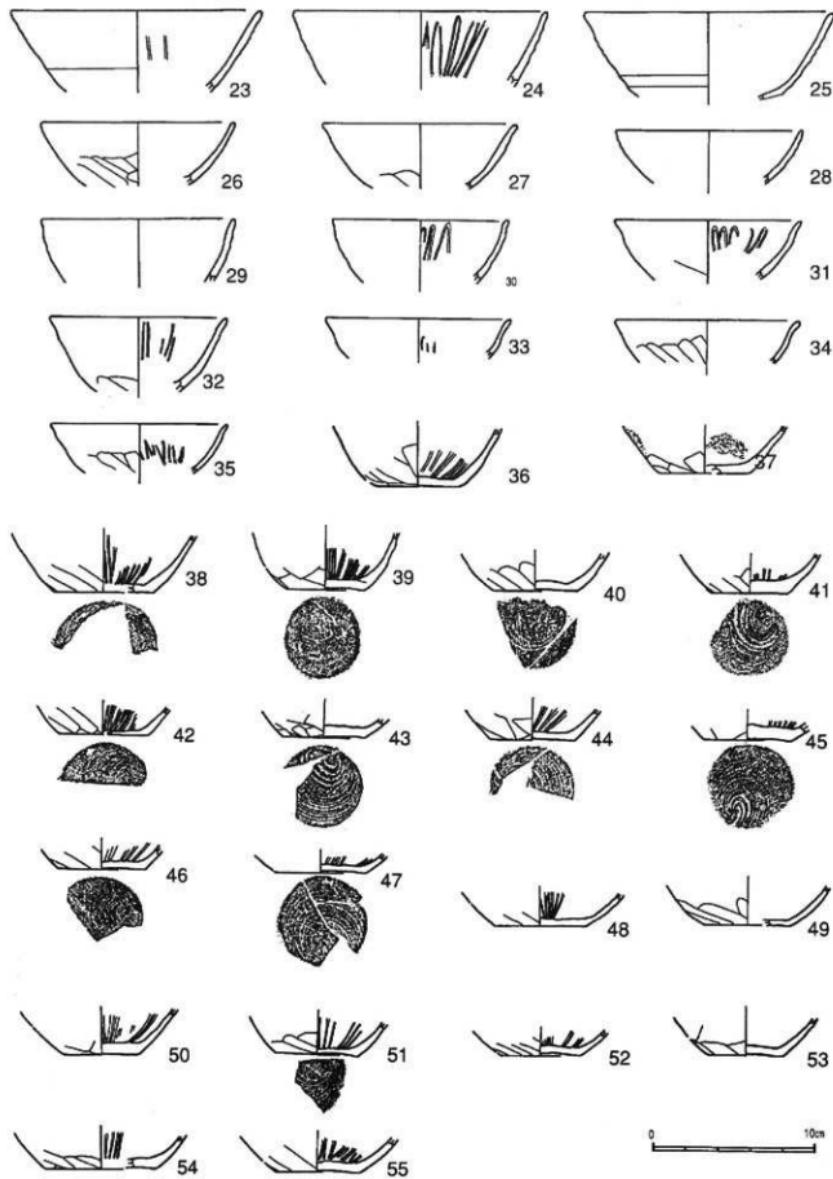
(長×短、深)	
P1—25cm×23cm、11cm	P7—35cm×30cm、24cm
P2—20cm×15cm、8cm	P8—32cm×25cm、15cm
P3—17cm×14cm、8cm	P9—32cm×20cm、12cm
P4—33cm×28cm、14cm	P10—38cm×34cm、23cm
P5—23cm×17cm、10cm	P11—33cm×26cm、13cm
P6—30cm×28cm、25cm	P12—42cm×36cm、22cm



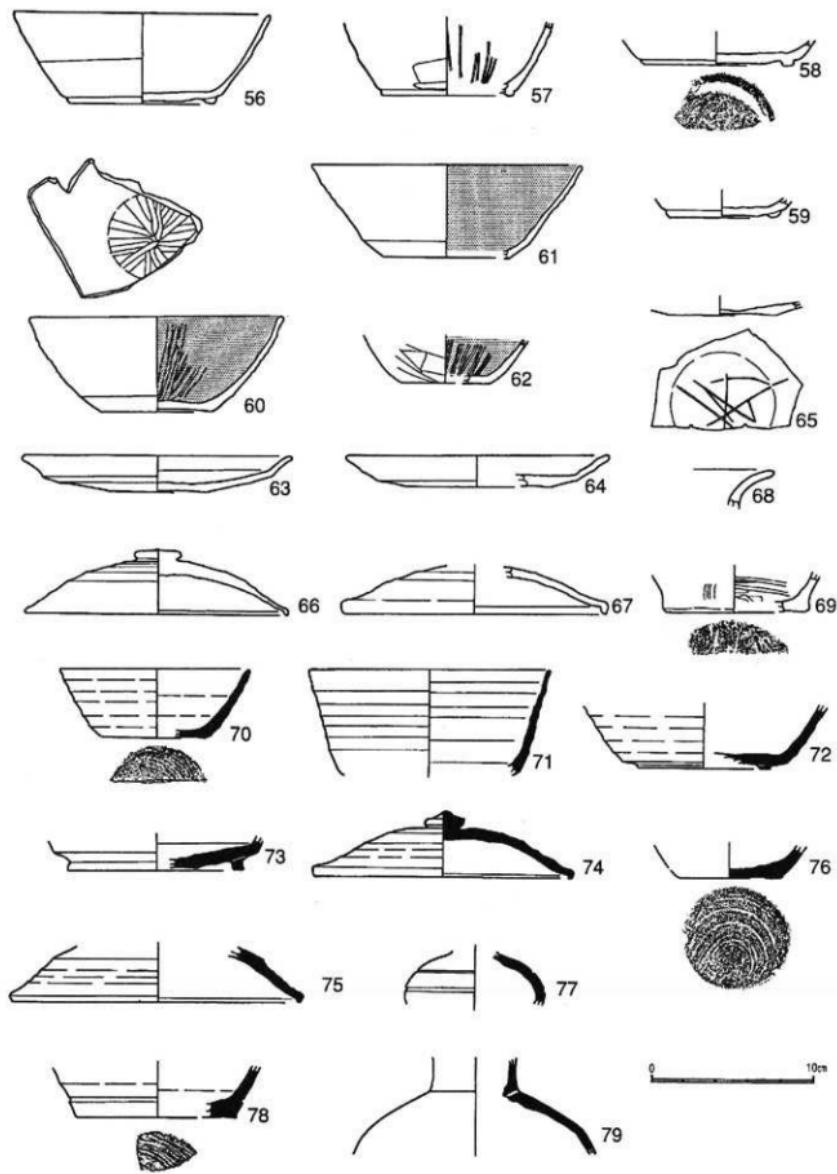
第41図 土器溝リビット群II [1/60・1/30]



第42図 土器窯2・ピット群II出土土器(1) [1/3]



第43図 土器溝り2・ピット群II出土土器(2) [1/3]



第44図 土器溝り2・ピット群II出土土器 (3) [1/3]

第15表 土器調査2・ピット群II出土土器観察表(1)

1	土師器 壊	A : ℓ (123)、b (50)、h 46. B : 1/2。C : 外面—ヨコナデ。下半部ヘラケズリ。底部右回転糸切りのち周辺ヘラケズリ。内面—ヨコナデのち暗文。D : 赤色粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。G : 底部に「#」線刻有り。
2	土師器 壊	A : ℓ (132)、b (60)、h 52。B : 1/3。C : 外面—ヨコナデ。体部下半ヘラケズリ。底部右回転糸切りのちヘラケズリ。内面—ヨコナデのち暗文。D : 黒色粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。
3	土師器 壊	A : ℓ (121)、b (50)、h 47。B : 1/2弱。C : 外面—ヨコナデ。体部下半ヘラケズリ (反時計方向)。底部糸切りのちヘラケズリ (残存が少なく、回転が不明)。内面—ヨコナデのち暗文。D : 赤色粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。
4	土師器 壊	A : ℓ (129)、b (64)、h 43。B : 1/2弱。C : 外面—ヨコナデのちヘラケズリ。底部糸切り痕有る。内面—ヨコナデのち暗文。D : 赤色粒を多量含み密。E : 良。F : くすんだ橙色 (25YR6/8)。
5	土師器 壊	A : ℓ (128)、b (73)、h 42。B : 1/3。C : 外面—ヨコナデのちヘラケズリ。内面—ヨコナデのち暗文。D : 赤色石を疎らに含む。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。
6	土師器 壊	A : ℓ (128)、b (70)、h 42。B : 1/3弱。C : 外面—LI縁部ヨコナデ。体部上半不明。体部下半ヘラケズリ痕有り。底部ヘラケズリ痕。内面—ヨコナデのち暗文。D : 赤色粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。
7	土師器 壊	A : ℓ (118)、b (53)、h 41。B : 1/4。C : 外面—ヨコナデ。底部ヘラケズリ。摩耗激しい。内面—ヨコナデ。摩耗激しい。D : 密。E : 良。F : 明るい橙色 (25YR6/8)。G : ロクロ成形。
8	土師器 壊	A : ℓ (114)、b (48)、h 43。B : 1/2強。C : 外面—ヨコナデのち底部近くにヘラケズリ。底部右回転糸切りのち周辺ヘラケズリ。内面—ヨコナデのち暗文 (不規則)。D : 赤色粒を含み密。E : やや軟質。F : 橙色 (25YR6/8)。
9	土師器 壊	A : ℓ (113)、b (60)、h 44。B : 1/3。C : 外面—ヨコナデ。摩耗激しい。底部右回転糸切り。内面—ヨコナデのち暗文。摩耗激しい。D : 赤色細粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。
10	土師器 壊	A : ℓ (113)、b (62)、h 44。B : 1/4。C : 外面—ヨコナデ。体部下半ヘラケズリ。底部糸切り。内面—摩耗激しく不明。D : 赤色粒をわずかに含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。
11	土師器 壊	A : ℓ (122)、b (64)、h 43。B : 1/3弱。C : 外面—ヨコナデ。底部回転糸切り。周辺に調整痕。内面—ヨコナデのち暗文。D : 赤色石を多量に含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。
12	土師器 壊	A : ℓ (109)、b (52)、h 40。B : 1/2。C : 外面—ヨコナデのち体部ヘラケズリ (反時計回り)。底部回転糸切りのちヘラケズリ。内面—ヨコナデ。暗文が部分的に残る。D : 赤色粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。
13	土師器 壊	A : ℓ (110)、b (62)、h 38。B : 1/4。C : 外面—摩耗激しく不明。D : 密。E : 良。F : くすんだ橙色 (25YR6/8)。
14	土師器 壊	A : ℓ (104)、b (50)、h 41。B : 1/3。C : 外面—ヨコナデ。体部下半ヘラケズリ。底部回転糸切りのち部分的にナデ。内面—ヨコナデ。部分的に暗文残る。D : 密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。
15	土師器 壊	A : ℓ (106)、b (60)、h 39。B : ほぼ完形。C : 外面—ヨコナデ。体部下半ヘラケズリ。底部右回転糸切りのちヘラケズリ。内面—ヨコナデのち暗文。D : 密。E : 良。F : くすんだ橙色 (25YR6/8)。
16	土師器 壊	A : ℓ (102)、b (52)、h 41。B : 2/3。C : 外面—ヨコナデ。体部下半ヘラケズリ。底部静止糸切りのち周辺ヘラケズリ。内面—ヨコナデ。D : 赤色粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。
16	土師器 壊	A : ℓ (104)、b (58)、h 44。B : 1/2弱。C : 外面—ヨコナデ。体部下端に部分的ヘラケズリが入る。底部右回転糸切りのちヘラケズリ。内面—ヨコナデ。D : 赤色粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。

第16表 土器溝り2・ピット群II出土土器観察表(2)

18	土師器 壺	A : ℓ (108)、b (47)、h 42。B : 1/3。C : 外面—ヨコナデ。体部ヘラケズリ。底部右回転糸切りのち調整か? 摩耗激しく不明。内面—摩耗激しく不明。D : 赤色粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。
19	土師器 壺	A : ℓ (102)、b (54)、h 42。B : 1/3。C : 外面—ヨコナデ。体部下半ヘラケズリ? 内面—摩耗激しく不明。D : 赤色粒を疎らに含み密。E : 良。F : 橙色 (7.5YR7/6)。
20	土師器 壺	A : ℓ (104)、b (52)、h 44。B : 1/4弱。C : 外面一口唇部～口縁部ヨコナデ。体部上半ヨコナデ。体部下半ナデのちヘラケズリ。底部回転糸切りのち周辺部ナデ。内面—ナデ。D : 細砂粒を含みやや密。E : 良。F : 浅い黄橙色 (10YR8/4)。
21	土師器 壺	A : ℓ (98)、b (50)、h 40。B : 1/4。C : 外面—ヨコナデのち体部下半ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内面—ヨコナデのち暗文。D : 赤色石を多量に含み密。E : 良。F : くすんだ橙色 (7.5YR7/6)。
22	土師器 壺	A : ℓ (98)、b (46)、h 23。B : 1/3。C : 外内面—摩耗激しく不明。底部右回転糸切り痕。D : 赤色粒を含み密。E : 良。F : 浅黄橙色 (10YR8/4)。
23	土師器 壺	A : ℓ (155)。B : 口縁部～体部下端1/4強。C : 外面一口唇部～体部上半ナデ。体部下半回転ヘラケズリ。内面—体部ナデのち暗文。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/6)。
24	土師器 壺	A : ℓ (158)。B : 口縁部～体部下端1/4。C : 外面一口唇部～体部上半ナデ。内面—体部ナデのち暗文。D : 砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/8)。
25	土師器 壺	A : ℓ (156)。B : 口縁部～体部下端破片。C : 外面一口唇部～体部上半ナデ。体部下半回転ヘラケズリ (反時計方向)。内面—体部ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/6)。
26	土師器 壺	A : ℓ (120)。B : 口縁部～体部下端1/8。C : 外面一口唇部～体部上半ナデ。体部下半ヘラケズリ (反時計方向)。内面—ナデ。D : 砂粒を多量に含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR1/6)。
27	土師器 壺	A : ℓ (121)。B : 口縁部～体部下端1/4。C : 外面一口唇部～体部上半ナデ。体部下半ヘラケズリ。内面—ナデ。D : 砂粒含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。
28	土師器 壺	A : ℓ (116)。B : 口縁部～体部下端1/4。C : 外面一口唇部～体部上半ナデ。体部下半ヘラケズリ。内面—ナデ。D : 密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。
29	土師器 壺	A : ℓ (119)。B : 口縁部～体部下端1/8強。C : 外面一口唇部～体部上半ナデ。体部下半ヘラケズリ?。内面—ナデ。D : 赤色砂粒を多量に含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。
30	土師器 壺	A : ℓ (109)。B : 口縁部～体部下端1/3弱。C : 外面一口唇部～体部上半ナデ。体部下半ヘラケズリ。内面—体部暗文。D : 2~3mmの砂粒、細砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。
31	土師器 壺	A : ℓ (115)。B : 口縁部～体部下端1/4弱。C : 外面一口唇部～体部上半ナデ。体部下半ヘラケズリ。内面—ナデのち暗文。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/6)。
32	土師器 壺	A : ℓ (109)。B : 口縁部～体部下端1/4。C : 外面一口唇部～体部上半ナデ。体部下半ヘラケズリ。内面—体部暗文。D : 白色細砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/8)。
33	土師器 壺	A : ℓ (114)。B : 口縁部～体部上半1/5弱。C : 外面一口唇部～体部上半ナデ。内面一口唇部～体部上半ナデ。体部暗文。D : 赤色砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/6)。
34	土師器 壺	A : ℓ (113)。B : 口縁部～体部下半1/5。C : 外面一口唇部～体部上半ナデ。体部下半ヘラケズリ (反時計方向)。内面一口唇部ナデ。体部摩耗激しく不明。D : 砂粒を少量含み密。E : 良。F : 橙色 (2.5YR7/8)。

第17表 土器窯2・ピット群II出土土器観察表(3)

35	土師器 壊	A : e (108)。B : 口縁部～体部下半1/4弱。C : 外面一口唇部～体部上半ナデ。体部下半ヘラケズリ (反時計方向)。内面一ナデのち暗文。D : 細砂粒を微量に含み密。E : 良。F : 橙色 (75YR7/6)。
36	土師器 壊	A : b (52)。B : 体部上半～底部完。C : 外面一ヨコナデのちヘラケズリ。底部部分的にヘラケズリ。内面一ヨコナデのち暗文。D : 赤色粒を含み密。E : 良。F : くすんだ橙色 (25YR6/8)。
37	土師器 壊	A : b (56)。B : 体部上半～底部1/2。C : 外面一ヨコナデ。体部下半ヘラケズリ。内面一摩耗激しく不明。D : 赤色粒を疎らに含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。G : 炭化物付着。
38	土師器 壊	A : b (62)。B : 体部上半～底部1/3弱。C : 外面一体部上半ヨコナデ。体部下半ヘラケズリ (反時計方向)。底部回転糸切り (時計方向) のち周辺部ヘラケズリ。内面一ナデのち暗文。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/6)。
39	土師器 壊	A : b (50)。B : 体部上半～底部完。C : 外面一ヨコナデのち体部下半ヘラケズリ。底部静止糸切りのちヘラケズリ。摩耗激しい。内面一ヨコナデのち暗文。D : 密。E : 良。F : くすんだ橙色 (25YR6/8)。
40	土師器 壊	A : b (53)。B : 体部下半～底部ほぼ完。C : 外面一体部下半ヘラケズリ (反時計方向)。底部回転糸切り (時計方向) のち周辺部ヘラケズリ。内面一体部暗文。底部ナデ。D : 密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/6)。
41	土師器 壊	A : b (46)。B : 体部下半～底部完。C : 外面一体部下半ヘラケズリ (反時計方向)。底部回転糸切りのち周辺部ナデ。内面一体部暗文。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 外面一浅黄橙色 (10YR8/4)。内面一橙色 (5YR6/8)。
42	土師器 壊	A : b (54)。B : 底部1/2弱。C : 外面一ヘラケズリ痕。底部右回転糸切りのち周辺部ヘラケズリ。内面一ヨコナデのち暗文。D : 赤色石を疎らに含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。
43	土師器 壊	A : b (52)。B : 体部下半～底部ほぼ完。C : 外面一体部下半ヘラケズリ (時計方向)。底部回転糸切り (時計方向)。内面一体部ナデ。D : 細砂粒を多量に含み密。E : 良。F : 外面一黒色 (2N2/0)。内面一浅黄橙色 (10YR8/4)。
44	土師器 壊	A : b (53)。B : 体部下半～底部1/3弱。C : 外面一体部下半ヘラケズリ。底部一回転糸切りのち周辺部ヘラケズリ。内面一体部暗文。D : 密。E : 良。F : 浅黄橙色 (10YR8/4)。
45	土師器 壊	A : b (52)。B : 体部下半～底部完。C : 外面一体部下半ヘラケズリ。底部回転糸切り (時計方向) のちヘラケズリ。内面一ナデ。D : 密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。
46	土師器 壊	A : b (54)。B : 体部下端～底部1/3。C : 外面一体部下半ヘラケズリ。底部 (回転) 糸切りのちヘラケズリ。内面一ナデのち暗文。D : 密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/8)。
47	土師器 壊	A : b (56)。B : 底部ほぼ完。C : 外面一底部回転糸切り (時計方向)。内面一体部暗文。底部ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 外面一黒色 (2N2/0)。内面一橙色 (5YR6/6)。
48	土師器 壊	A : b (57)。B : 体部上半～底部ほぼ完。C : 外面一体部上半ナデ。体部下半ナデのちヘラケズリ (反時計方向)。底部回転糸切りのちヘラケズリ。内面一体部暗文。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR)。
49	土師器 壊	A : b (52)。B : 体部上半～底部破片。C : 外面一体部上半ナデ。体部下半ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内面一ナデ。D : 密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/8)。
50	土師器 壊	A : b (46)。B : 体部下半～底部3/4。C : 外面一摩耗激しいが部分的にヘラケズリ残す。底部回転糸切りのち周辺ナデとヘラケズリ。内面一ヨコナデのち暗文。D : 微白石粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。
51	土師器 壊	A : b (52)。B : 体部上半～底部1/4。C : 外面一体部上半ナデ。体部下半ヘラケズリ。底部回転糸切り (時計方向) のち周辺ヘラケズリ。内面一ナデのち暗文。D : 繊密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。

第18表 土器溝り2・ピット群II出土土器観察表(4)

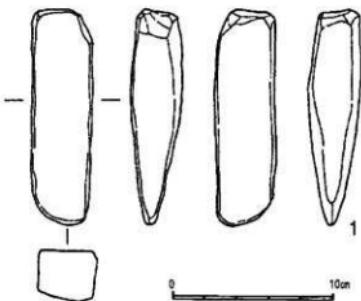
52	土師器 壺	A : b (5.0)。B : 体部下半～底部完。C : 外面～一部部下半～ラケズリ (反時計方向)。底部回転糸切り (時計方向) のち周辺部～ラケズリのちナデ。内面～一部暗文。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR7/8)。
53	土師器 壺	A : b (4.6)。B : 体部上半～底部3/4。C : 外面～ラケズリ。底部右回転糸切りのちヘラケズリ。内面～摩耗激しく不明。D : 密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。
54	土師器 壺	A : b (6.8)。B : 体部下半～底部破片。C : 外面～一部部下半～ラケズリ。底部～ラケズリ。内面～ナデのち暗文。D : 密。E : 良。F : 橙色 (75YR7/6)。
55	土師器 壺	A : b (5.2)。B : 体部下半～底部2/3。C : 外面～一部部下半～ラケズリ? (反時計方向)。底部全面ナデ。内面～一部暗文。D : 細砂粒を含みやや密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/6)。
56	土師器 壺	A : ℓ (15.6)、b (9.6)、h 5.6。B : 1/2。C : 外面～ヨコナデ。体部下半～ラケズリ。底部回転～ラケズリのち貼付高台のちナデ。内面～ヨコナデ。摩耗激しく。D : 赤色粒子を多量含み密。E : やや軟質。F : 浅黄橙色 (7.5YR8/6)。
57	土師器 壺	A : b (8.4)。B : 体部上半～底部破片。C : 外面～ナデ。体部下端一条線が巡る。内面～ナデのち暗文。D : 密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/6)。
58	土師器 壺	A : b (9.8)。B : 体部下端～底部1/2弱。C : 外面～一部部～ラケズリ。底部 (回転) 高台ケズリ出しのちナデ。内面～ナデ。D : 砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。
59	土師器 壺	A : b (7.6)。B : 底部1/2。C : 外面～底部～ラケズリ。高台ケズリ出し。内面～ナデ。D : 密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/8)。
60	土師器 壺	A : ℓ (15.8)、b (6.8)、h (5.9)。B : 口縁部～底部1/2弱。C : 外面～ヨコナデ。体部下半回転～ラケズリ。底部～ラケズリ。内面～黒色処理のち放射状の暗文。D : 赤色粒子を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/8)。G : 内黑。
61	土師器 壺	A : ℓ (16.8)、b (7.8)、h (5.8)。B : 口縁部～体部下半破片。C : 外面～ヨコナデ。体部下半回転～ラケズリ。内面～黒色処理のち暗文 (残り不良)。D : 赤色粒子を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/8)。G : 内黑。
62	土師器 壺	A : b (5.4)。B : 体部上半～底部1/4弱。C : 外面～ヘラケズリ。底部～回転糸切りのち周辺～ラケズリ。内面～ヨコナデのち細かい暗文。D : 赤色石を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR8/6)。
63	土師器 皿	A : ℓ (16.8)、b (6.0)、h (2.3)。B : ほぼ完。C : 外面～ヨコナデ。体部下半回転～ラケズリ。底部回転～ラケズリ。内面～ヨコナデ。D : 赤色粒子、細砂粒を含み密。E : 良。F : ぶい黄橙色 (10YR6/4)。
64	土師器 皿	A : ℓ (16.4)、b (8.8)、h (2.0)。B : 口縁部～底部2/3。C : 外面～上半ヨコナデ。下半回転～ラケズリ。底部回転～ラケズリ。内面～ヨコナデ。D : 赤色粒子、細砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。
65	土師器 皿	A : b (6.4)。B : 底部1/2強。C : 外面～回転～ラケズリ。底部回転～ラケズリ。内面～ヨコナデ。D : 赤色粒子を含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。G : 底部に線刻有り。
66	土師器 蓋	A : ℓ (16.3)、h (4.0)。B : 1/2強。C : 外面～上半回転～ラケズリ。下半ヨコナデ。宝珠部ヨコナデ。内面～ヨコナデ。D : 白石、赤色粒子を含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。
67	土師器 蓋	A : ℓ (16.4)。B : 1/4弱。C : 外面～上半回転～ラケズリ。下半ヨコナデ。内面～ヨコナデ。D : 白石粒、細砂粒を多量含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。
68	土師器 甕	B : 口縁部破片。C : 外面～ヨコナデ。内面～ヨコナデ。D : 砂粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/6)。

第19表 土器溜り2・ピット群II出土土器観察表(5)

69	土師器 甕	A : b (9.0)。B : 底部1/4弱。C : 外面一タテハケを残すが摩耗激しい。内面—ヨコハケのちナデ。底部にヘラケズリ。D : 砂粒、金雲母を多量含み密。E : 良。F : 外面—暗褐色 (10YR3/3)。内面—ぶい赤褐色 (5YR4/4)。
70	須恵器 坏	A : ℓ (120)、b (6.4)、h 42. B : 1/3。C : 外面一体部ナデ。底部回転糸切り (時計方向)。内面—ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 灰色 (75Y6/1)。
71	須恵器 坏	A : ℓ (5.0)。B : 口縁部一体部下半破片。C : 外面一回転ナデ。内面—ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 灰色 (75Y6/1)。
72	須恵器 坏	A : b (10.0)。B : 体部上半～底部破片。C : 外面一体部回転ナデ。底部糸切りのち周辺部ヘラケズリのち高台貼付。高台部ナデ。内面—ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 灰色 (10Y6/1)。
73	須恵器 坏	A : b (12.3)。B : 底部1/4。C : 外面一糸切りのち周辺部回転ヘラケズリのち高台貼付。高台部ナデ。内面—ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 灰白色 (75Y7/1)。
74	須恵器 蓋	A : ℓ (16.2)、h 44. B : 2/3. C : 外面一体部上半回転ヘラケズリのち宝珠部貼付。体部下半ナデ。受部ナデ。内面—ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : オリーブ灰色 (25GY6/1)。
75	須恵器 蓋	A : ℓ (18.2)。B : 体部上半～体部下半破片。C : 外面一体部上半回転ヘラケズリ。体部下半ナデ。受部ナデ。内面—ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : オリーブ灰色 (25GY6/1)。
76	須恵器 甕	A : b (6.4)。B : 洞部下半～底部完。C : 外面—洞部ナデ。底部回転糸切り (時計方向) のち周辺部ヘラケズリ。内面—ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 灰色 (75Y6/1)。
77	須恵器 蓋	B : 肩部破片。C : 外面一回転ナデ。肩部に灰色系の釉がかかる。内面一回転ナデ。D : 密。E : 良。F : 灰色 (5Y4/1)。
78	須恵器 蓋	A : b (9.8) cm. B : 底部破片。C : 外内面—ナデ。D : 細砂粒を含み密。E : 良。F : 灰白色 (75Y7/1)。
79	灰釉陶器 甕	A : 頸部径 (5.6)、肩部径 (5.2)。B : 頸部～肩部1/2弱。C : 外面一回転ナデ。肩部緑色系の釉がかかる。内面一回転ナデ。D : 細密。E : 良。F : 灰オリーブ (5Y5/3)。

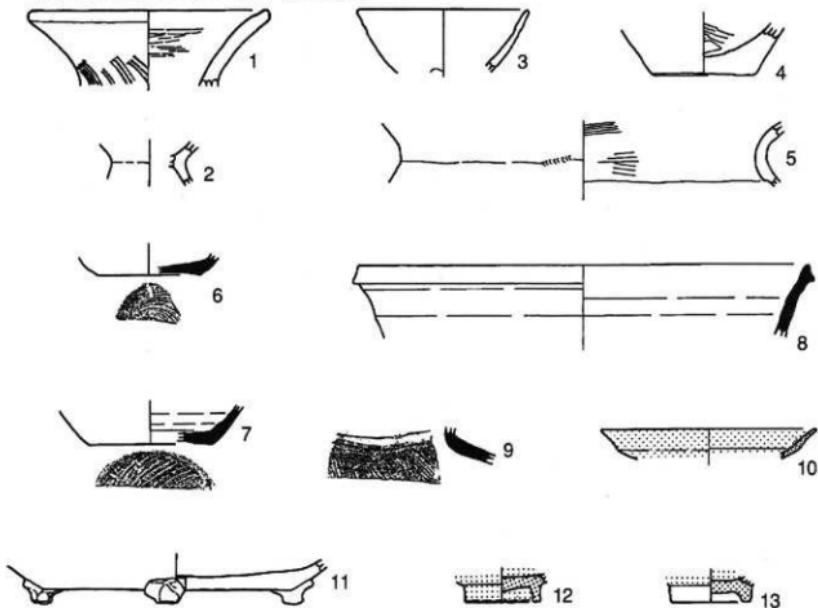
## 石器 (第45図)

短骨型の磨製石斧様石器である。全長13cm、全幅3.5cm、厚さは最大で2.5cmを測る。刃部は断面三角形状を呈し、かなり片減りしている。基部は長方形を呈する。石材は砂岩である。



第45図 土器溜り2・ピット群II出土石器 [1/3]

7) 造構外出土遺物 (第46~49図、第20~21表)



第46図 II区造構外出土土器 [1/3]

0 10cm

第20表 造構外出土土器観察表(1)

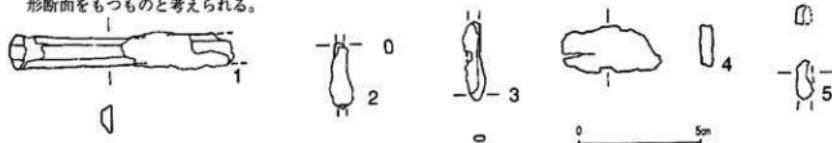
1	土師器 壺	A : $\ell$ (15.2)。B : 口縁部～頸部2/3。C : 外面一口縁部ナデ。頸部タテハケ。内面一ヨコハケのちナデ。D : 長石、細砂粒を含み密。E : 普通。F : 褐色 (75Y4/6)。
2	土師器 台付壺	B : 接合部1/4。C : 外内面一摩耗激しく不明。D : 白石粒を多量含み密。E : 良。F : 外面一にぶい橙色 (75YR6/4)。内面一橙色 (25YR6/8)。
3	土師器 壺	A : $\ell$ (10.8)。B : 口縁部～体部下部1/3。C : 外面一口唇部～体部ナデ。体部下半ヘラケズリ。内面一ナデ。D : 密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/6)。
4	土師器 壺	A : b (6.4) cm. B : 脊部下部～底部破片。C : 外面一ナデ。内面一胴部ハケ。底部ナデ。D : 雪母、細砂粒を多量含み密。E : 良。F : 外面一にぶ黄褐色 (10YR5/4)。内面一橙色 (75YR7/6)。
5	土師器 壺	B : 口縁部～胴部上半部破片。C : 外面一口縁部ナデ。頸部ハケ (部分的) のちナデ。胴部ハケ (部分的) のちナデ。内面一口縁部細かいハケ。頸部ナデ。胴部ヨコハケのちナデ。D : 細石粒、雪母を多量含み密。E : 良。F : 橙色 (75Y7/6)。
6	須恵器 壺	A : b (6.4)。B : 底部1/3。C : 外面一回転ナデ。底部回転糸切り (時計方向)。内面一回転ナデ。D : 密。E : やや軟質。F : 外面一灰白色 (75Y7/1)。内面一灰色 (75Y6/1)。
7	須恵器 壺	A : b (7.6)。B : 体部下部～底部1/2。C : 外面一回転ナデ。底部 (回転) 糸切り。内面一回転ナデ。D : 密。E : 良。F : 青灰色 (5B6/1)。

第21表 遺構外出土土器観察表(2)

8	須恵器 甕	A : ℓ (290)。B : 口縁部～頸部破片。C : 外内面一回転ナデ。口唇部ナデ。D : 密。E : 良。F : 外面一灰色 (75Y4/1)。内面一灰オリーブ色 (75Y6/2)。
9	須恵器 甕	B : 頸部～肩部破片。C : 外面一頸部回転ナデ。肩部平行叩きのちナデ (部分的)。内面一ナデ (青海波) 叩きのちナデ。D : 密。E : 良。F : 灰色 (75Y6/1)。
10	綠釉 皿	A : ℓ (134)。B : 口縁部～体部下半破片。C : 外内面一回転ナデ。D : 密。E : やや軟質。F : オリーブ黄色 (75Y6/3)。G : 外内面ともに淡黄緑色の施釉有り。釉一はげやすい (どぶづけか?)。
11	陶器 壺	A : b (170)。B : 液部下端～底部1/4。C : 外面一胴部一部施釉。回転ナデ。内面一白色系施釉。回転ナデ。D : 密。E : 良。F : 淡黄色 (25Y8/3)。
12	陶器 壺	A : b (50)。B : 底部1/2。C : 外内面一回転ナデ。底部貼付高台。施釉濃茶系。D : 密。E : 良。F : 暗褐色 (75YR3/4)。
13	陶器 壺	A : b (52)。B : 底部1/2。C : 外面一回転ナデ。底部貼付高台。内面一回転ナデ。濃い茶系の釉。D : 密。E : 良。F : 外面一灰白色 (25Y8/2)。内面一暗褐色 (75YR3/4)。

鉄製品 (第47図、図版18)

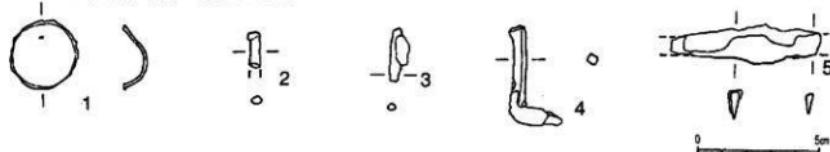
1は現長9.2cm、同幅1.2cm、厚さ0.4cmを測る。断面形は台形状を呈し、長辺側が僅かに内湾している。一端は欠損するが、他端は完結し、やや膨みをもつ。2は現長1.7cmで両端とも欠損している。断面は0.5×0.2cmの長方形を呈する。釘の一端か。3は現長3.2cmを測り、一端は欠損するが他端は完結しやや尖っている。0.1×0.5cmの偏平な断面形を示す。4は不明鉄塊。長さ4.0cmで、幅1.7cm厚さ0.6cmを測る。表面の剥離が著しく、原形も不明である。5は現長1.6cmを測る鉄細片である。遺存が両端とも欠損したまでは半截状態である。0.7cm×0.6cm程の方形断面をもつものと考えられる。



第47図 I区遺構外出土鉄製品 [1/2]

鉄製品 (第48図、図版18)

1は径25～28cmの円形を呈し、厚さ0.2～0.3mmを測る。半球状を呈し、縁部は1.0～1.5mm程折り曲げられ縁取られている。2は全長5.5cmを測る釘。断面形は方0.4cm程の方形を示す。頭部は軽く叩き出され、折頭釘の一種である。3は現長6.2cmを測る刀子片である。身部は長さ4.2cm、幅1.3～0.7cmで、横厚0.3cmを測り、茎部は長さ2.2cm、幅1.0cm、横厚0.2cmで断面は三角形を呈している。両側と考えられるが、錆による肥大化の為、明確にしえない。4は現長1.5cmを測る釘頭部である。0.3×0.4cmのやや丸味を帯びた断面形を示す。頭部は軽く叩き出されている。5は現長2.2cmを測り、0.3×0.3cmの丸味を帯びた断面形を示す。一端は完結し尖っている。4は同一箇所から出土しており、同一個体の可能性がある。



第48図 II区遺構外出土鉄製品 [1/2]

## 第2節 弥生・古墳時代の遺構と遺物

### 1) 穴住居址

#### 1号住居址

B-3、4区に位置し、南側に44m離れて2号住居址がある。当初、一軒の住居址と考えていたが、貯蔵穴及び柱穴等の覆土を再検討したところ、3軒が重複していることが確認された。

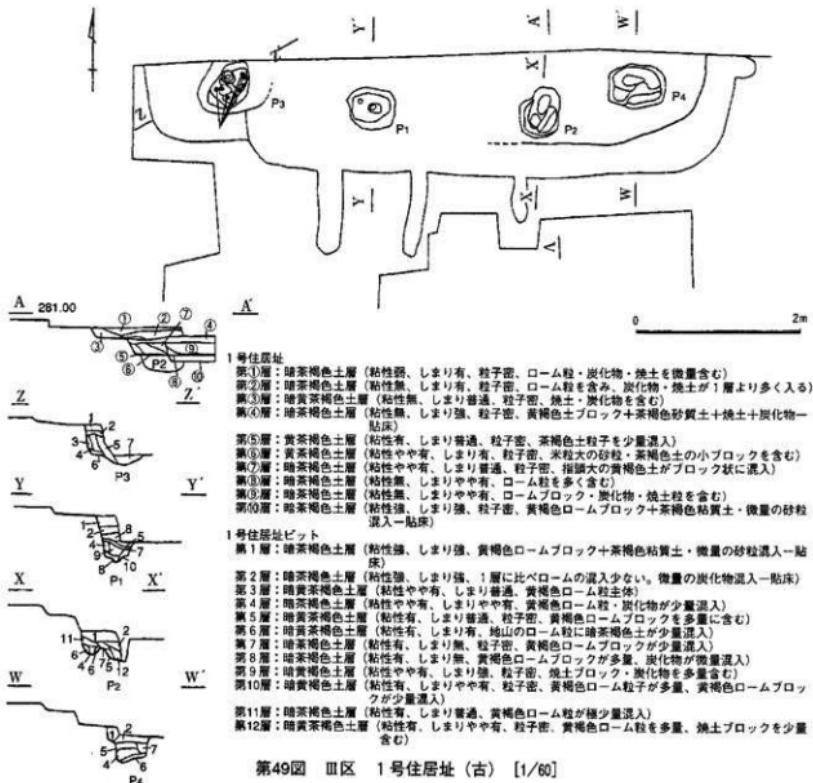
#### 1号住居址（古）（第49図、第22表 図版10、11・17）

旧によって切られていることから、住居址の南東コーナー及びピットなど一部が遺存しているのみである。平面形態は不明であるが、住居址の南側ラインが1号住居址旧及び新のものと平行していることから、同一の形態であった可能性が高い。壁高は18cmを測り、緩やかに外反して立ち上がる。覆土は3層に分けられる。

ピットは4箇所検出された。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>が柱穴で、規模はそれぞれ60cm×50cm、深さ56cm、66cm×50cm、深さ38cmを測り、底面はすべて平坦である。南側のP<sub>3</sub>及び、南東隅のP<sub>4</sub>は貯蔵穴と思われ、規模はそれぞれ80cm×80cm、深さ56cm、70cm×54cm、深さ44cmを測る。周辺施設は認められなかった。

ピットの覆土内容は共通するものが多く、旧を構築する際に人為的に埋め戻された状況を示していた。

出土遺物はきわめて少ない。床面から遺物の出土ではなく、P<sub>3</sub>から壺の胴部破片が出土したのみである。



第49図 Ⅲ区 1号住居址（古） [1/60]

1号住居址（旧）（第50～51図、第22表、図版10・11・17）

住居址の北側が調査区域外に位置することから、全体の形を把握することはできないが、隅丸方形を呈すると思われる。規模は東西で60m、壁高は23cmを測る。遺存状態は良好である。

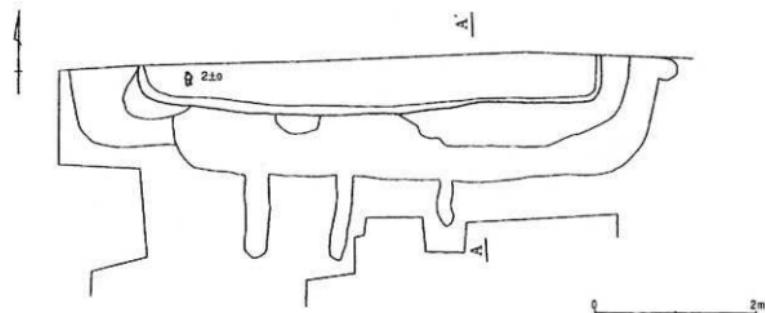
旧-2を構築するにあたり、旧-1のピットを埋め戻し、壁際に土層図49に示す第5層～第7層の土を入れて住居址の規模を40cm程北側に縮小した後に、深く掘り下げて旧-2を構築している。

床面は全面貼り床で、ほぼ平坦。全体的に堅緻であった。床面の全面には約5cm程浮いて住居址の構築材と思われる炭化材が散乱していた。

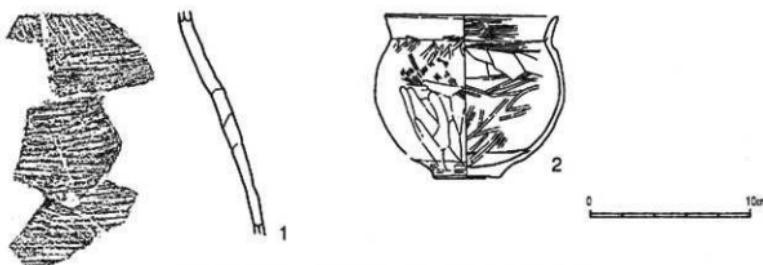
覆土の堆積は2層にわけられる。壁際に薄く自然堆積が認められ、その後炭化材・焼土を含む土によって一度に埋没している。

柱穴等の施設は確認されなかった。

出土遺物はきわめて少なく、覆土内から壺型土器の細片が3点出土している。また、床面から炭化材とともに壺が1点出土している。



第50図 III区 1号住居址（旧）・炭化材出土状況図 [1/60]



第51図 III区 1号住居址（古）（旧）出土土器 [1/3]

第22表 III区1号住居址(古)(旧)出土土器観察表

1	壺	B:肩部～胴部上半破片。C:外面一4本単位の粗いハケ。内面一棒状工具を用いたナデ。D:白石粒・雲母粒を多量含み密。E:良。F:橙色(5YR6/6)。G:貯藏穴Pa内。
2	鉢	A:ℓ(108)、b40、h100。B:口縁部～胴部破片。底部完形。C:外面一口縁部ヨコナデ。体部ハケのちヘラミガキ。底部不整方向ヘラミガキ。内面一口縁部ハケのちヘラミガキ。肩部ヘラナデ。胴部～底部にかけてヘラミガキを残す。D:白石粒を含み密。E:良。F:暗褐色(7.5YR3/3)。

## 1号住居址(新)(第52図、図版10・11)

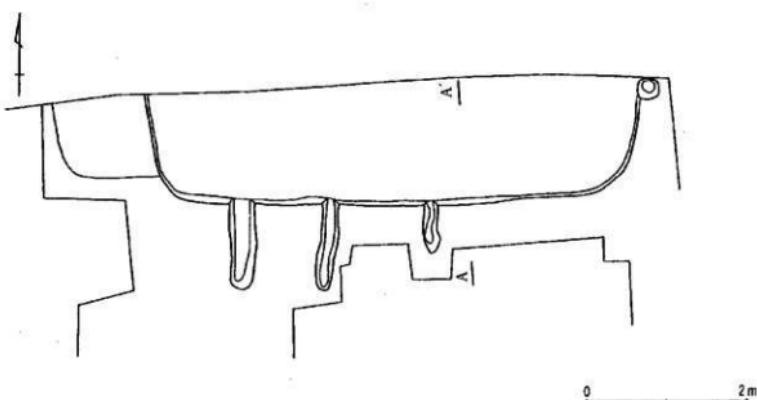
B-3、4区に位置し、1号住居址(旧)上に南側に拡張した形で構築されている。上部に削平を受け遺存状態は不良である。

住居址の北側が調査区域外に位置することから、全体の形を把握することはできないが、隅丸方形を呈すると思われる。規模は東西で62m、壁高は6cmを測る。

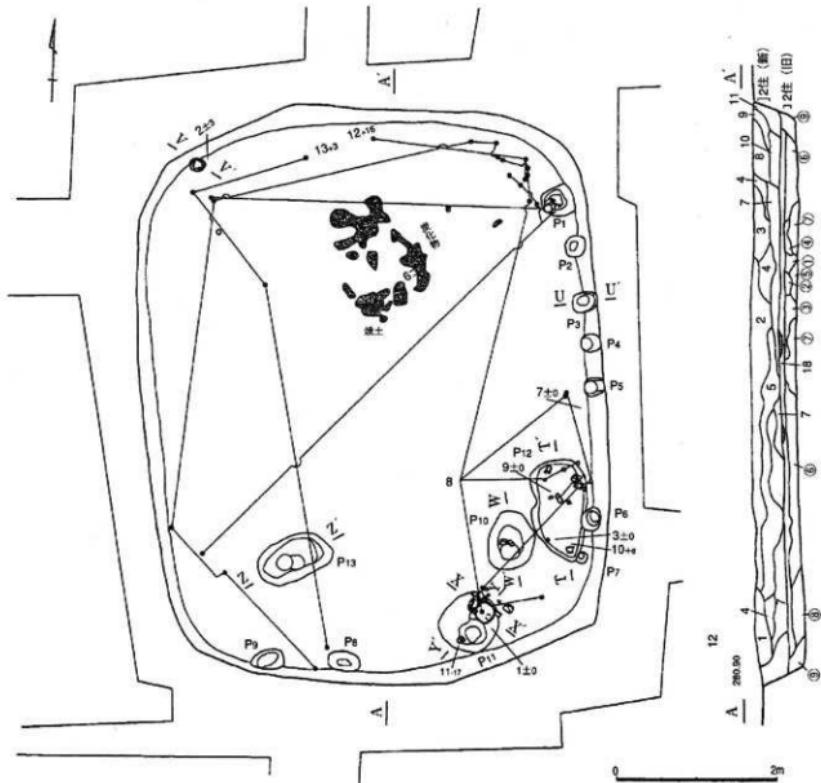
床面はほぼ平坦で、全体に貼り床が施され、堅致であった。覆土の堆積は4層に分けられる。柱穴等の施設は確認されなかった。

住居址の南壁に接して溝状の突出遺構が3本検出されているが、本住居址に付属するものかどうかは今回の調査では明らかにすることはできなかった。

出土遺物はきわめて少なく、ほとんどが細片で図示できるものはなかった。試掘の際にヨコハケを持つS字壺の肩部破片が出土している。



第52図 III区 1号住居址(新) [1/60]



2号住居址(前)

第1層：緑茶糞色土壁(耐性やや有、しまりやや有、施土有、良化物、ローム敷が多量混入)

第2層：緑茶糞色土壁(耐性やや有、しまりやや有、施土有、良化物、施土が多量混入)

第3層：緑茶糞色土壁(耐性やや有、しまりや有、ローム敷、施土が多量混入)

第4層：緑茶糞色土壁(耐性やや有、しまりや有、良化物、施土・ローム敷を含む)

第5層：緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、良色や一色、ロームブロックを多量含む)

第6層：緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、良色や一色、ロームブロックを多量含む)

第7層：緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、施上土・灰土、良色や一色、ロームブロックを多量含む)

第8層：緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、ローム敷・灰土が多量混入)

第9層：緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、良色や一色、ロームブロックを中量混入)

第10層：緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、良色や一色、ロームブロックを少量混入)

第11層：緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、ローム敷が多量混入)

第12層：緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、良色や一色が多量混入)

第13層：緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、ローム小ブロック・塔系施設ブロックの多い粘土層)

施土有、良化物が多量混入)

2号住居址(後)

第1層：緑茶糞色土壁(耐性やや有、しまりやや有、施土有、良化物を含む)

第2層：緑茶糞色土壁(耐性やや有、しまりやや有、施土有、良化物を含む)

第3層：緑茶糞色土壁(耐性やや有、しまりや有、ローム敷が多量、施土・ローム敷を多量、ロームブロックを含む)

第4層：緑茶糞色土壁(耐性やや有、しまりや有、ロームブロック小ブロック・良化物を少量含む)

施土有、良化物が少量混入)

第5層：緑茶糞色土壁(耐性やや有、しまりや有、ローム敷が少量、ロームブロックを含む)

第6層：緑茶糞色土壁(耐性やや有、しまりや有、ローム敷が少量、ロームブロック・塔系施設ブロックが混入)

施土有、良化物を含む)

第7層：塔系施設ブロック(耐性無、しまりや有、良色や一色、ロームブロックが多量混入)

P10: 壁・緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、ロームブロックを含む)

P12: 壁・緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、良色や一色、ローム敷が多量混入)

P13: 壁・緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、ローム小ブロック・塔系施設ブロックの多い粘土層)

施土有、良化物が多量混入)

V-V': 壁・緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、ロームブロックを含み、良化物・施土が多量混入)

W-W': 壁・緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、ローム敷が少量、施土・良化物が少)

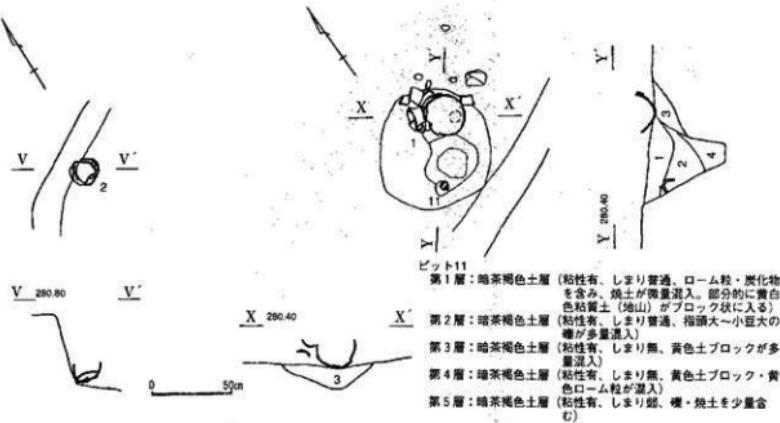
T-T': 壁・緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、ローム敷が少量、施土・良化物が少)

Z-Z': 壁・緑茶糞色土壁(耐性有、しまりや有、ローム小ブロック・塔系施設ブロックを含む)

施土有、良化物・施土が多量混入)

P13: 壁・緑茶糞色土壁(耐性無、しまりや有、ローム小ブロックを含み、良化物が少量混入)

第53図 III区 2号住居址(旧) [1/60]



第54図 III区 2号住居址(旧) 遺物出土状況図 [1/30]

#### 2号住居址(旧) (第53~56図、第23~24表、図版14、17・18)

B、C-3、4区に位置し、北側に4.4m離れて1号住居址がある。遺存状態は良好である。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸7.2m、短軸5.8m、壁高は20cmを測る。主軸方位はN-6°-Wを示す。

床面は平坦で、全体的に堅微であった。

覆土は10層に分けられ、2号住居址(新)を構築する際に人为的に埋め戻された状況を示していた。はじめに住居址の壁際沿って幅約30cmのベルト状に土を入れ、その後、内側に焼土や炭化物を含む土をブロック状に入れて平坦にし、最後に2号住居址(新)の貼り床が施されている。

ピットは壁に沿って東壁から南壁の間に13箇所検出された。P1~P9までが柱穴で、それぞれの規模は次の通りである。P1: (長軸) 40cm × (短軸) 37cm × (深さ) 14cm P2: 28cm × 25cm × 10cm P3: 32cm × 25cm × 18cm P4: 26cm × 22cm × 2cm P5: 26cm × 22cm × 2cm P6: 29cm × 24cm × 8cm P7: 14cm × 12cm × 12cm P8: 40cm × 24cm × 12cm P9: 34cm × 28cm × 20cm 底面はほぼ平坦である。

壁際に位置するP1~P3は当時の生活面から掘り込まれたと考えられ、現況では遺構検出面からの深さがP3: 54cm、P4: 45cm、P5: 43cmを測る。住居址北側及び西側を精査したが対応する柱穴は検出されなかった。

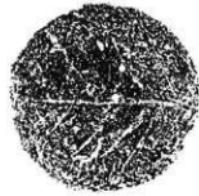
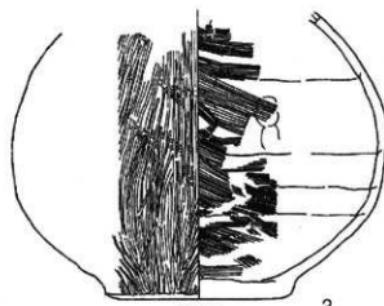
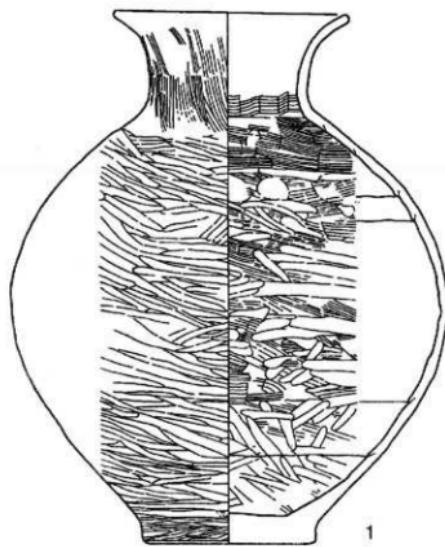
P12とP13は浅い落ち込みで、規模はそれぞれ12cm × 70cm、深さ8cm、94cm × 53cm、深さ10~18cmを測る。

南東隅に位置するP10、P11は貯蔵窓と思われ、規模はそれぞれ72cm × 57cm、深さ40cm、74cm × 68cm、深さ48cmを測る。P10の覆土中からは礫が1点、P11からは台付壺脚部が出土した。周辺施設は認められなかった。

炉は検出されなかつたが、住居址北側に12m × 1.6mの範囲に炭化物が散乱している部分が確認され、その南側に接して40cm × 40cmの範囲に堅くしまった焼土が検出されたことから、炉を破棄した痕跡と推定される。

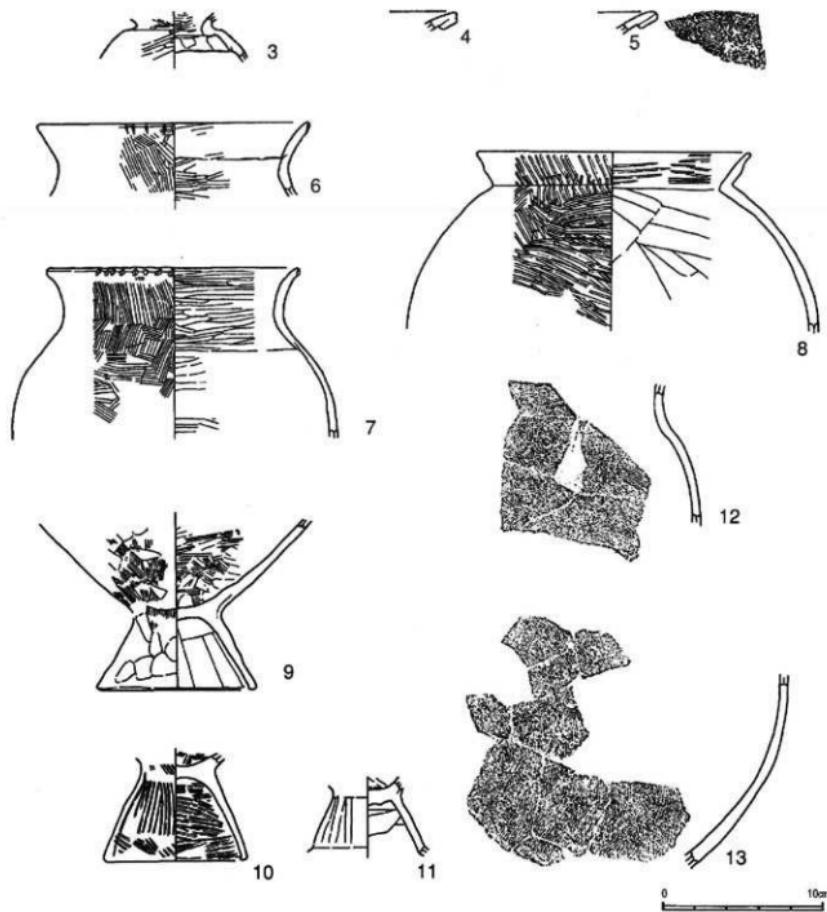
出土遺物は豊富で、床面全体及び覆土内にまんべんなく分布していた。遺物の出土状態は特徴的なものが多く、同一個体の破片が住居址内に散乱していたこと、P12内から出土した30点近くの土器片の中には意識的に破碎された状態のものが含まれていたことなどが挙げられる。

また、P12内の土器片と2号住居址(新)の貼り床内の土器片が接合することから、住居址を埋め戻す過程で土器片を混入した可能性が高い。さらに、P1では人为的に埋め戻された覆土内から出土した土器片とP12から検出された土器片が接合すること、P10も同様に人为的に埋め戻した後に壺型土器を正位に置いたような状態で検出していることなど特異な点が多い。



0 10cm

第55図 III区 2号住居址（旧）出土土器（1） [1/3]



第56図 III区 2号住居址(旧)出土土器(2) [1/3]

第23表 III区 2号住居址(旧)出土土器観察表(1)

1	壺	A : $\ell$ (14.6)、b 10.0, h33.1。B : ほぼ完形。C : 輪積み。外面 - 口縁部ヨコナデ。頸部ハケ。胸部以下ハケのちヘラミガキ。底部不整方向のヘラミガキ。内面 - 口縁部 - 頸部上半ナデ。頸部下半ハケ。胸部輪積み時の指頭痕残す。後ハケとヘラミガキを施す。D : 白石粒、雲母を多量含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR7/8)。G : 口縁部～胸部上半が貯蔵穴P <sub>11a</sub> 。
2	壺	A : b 10.0。B : 体部2/5、底部完形。C : 輪積み。外面 - 体部ハケのちヘラミガキ。内面 - 指押えのちハケ。D : 白石粒を多量含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。G : 底部木葉痕。
3	壺	B : 破片。C : 輪積み。外面 - 一細かなヘラミガキ。内面 - 頸部細かなヘラミガキ。体部は部分的にヘラナデが残る。D : 白石粒を含み密。E : 良。F : 明赤褐色 (25YR5/6)

第24表 III区 2号住居址(旧)出土土器觀察表(2)

4	壺	B: 口縁部破片。C: 外面一口唇部ヨコナデ。折り返し部ヨコハケ。口縁部右斜め下のハケ。内面一ナデ。D: 白石粒を多量含み密。E: 良。F: 橙色 (5YR6/6)。G: 貯蔵穴1。折り返し口縁。
5	壺	B: 口縁部破片。C: 外面一口唇部ヨコナデ。折り返し部はハケと思われる。口縁部右斜め下のハケ。内面-Rの縦文。D: 白石粒を多量含み含み密。E: 良。F: 明赤褐色 (25YR5/8)。G: 貯蔵穴Pn。折り返し口縁。
6	壺	A: ℓ (166)。B: 口縁部破片。C: 輪積み。外面一口唇部ヨコナデのち刻み。口縁部以下はハケ。内面一口縁部摩耗で不鮮明。ハケを残す。肩部ハケ。D: 白石を疊らに含み密。E: 良。F: 橙色 (75YR7/6)。
7	甕	A: ℓ (154)。B: 口縁部～胴部破片。C: 輪積み。外面一口唇部ヨコナデのち刻み。頸部以下はハケ。内面一口縁部～頸部ヘラミガキ。胴部もヘラミガキと思われるが、器面荒れで不鮮明。胴部中位にハケを残す。D: 白石粒、雲母を多量含み密。E: 良。F: にぶい褐色 (75YR5/4)。
8	甕	A: ℓ (168)。B: 口縁部1/4。頸部～胴部1/2。C: 外面～5～6本単位の粗いハケ。口縁部はハケ後ヨコナデを施し、さらにハケを重ねる。内面一口縁部ハケ。体部ヘラナデ。D: 白石粒・雲母を多量含み密。E: 良。F: 外面～灰褐色 (75YR4/2)。
9	台付甕	A: b (96)。B: 脚部1/4。脚部ほぼ完形。C: 輪積み。外面～胴部ハケのち部分的ナデ。脚部指押さえ、部分的にハケが入る。端部はナデ。内面～胴部ハケのち棒状工具によるミガキを部分的に施す。脚部は板状工具によるナデ。D: 白石粒を多量含み密。E: 良。F: 褐色 (75YR4/3)。
10	台付甕	A: b (86)。B: 脚部4/5。C: 外内面一ハケ。D: 白石粒等多量含み密。E: 良。F: 橙色 (5YR6/8)。
11	台付甕	B: 脚部9/10。C: 外面一ハケ後幅のある工具でナデを施しているが、摩耗著しく不鮮明。内面～胴部は棒状工具によるナデ。脚部はヘラケズリ。D: 白石粒、雲母を多量含み密。E: 良。F: 橙色 (5YR7/6)。
12	甕	B: 口縁部～胴部破片。C: 外面一右斜め下のハケ。内面一口縁部ヨコハケ。体部ヨコハケのちヨコナデ。D: 白石粒を多量含み密。E: 良。F: 外面～にぶい褐色 (75YR5/4)。内面～橙色 (75YR6/6)。
13	甕	B: 脚部破片。C: 外面一右斜め下のハケ。下半から縫合のハケが入る。内面～ヨコハケ。中位にヨコヘラナデが入る。D: 白石粒、雲母を含み密。E: 良。F: 橙色 (5YR6/6)。

## 2号住居址(新) (第57～58図、第25～26表、図版12・13)

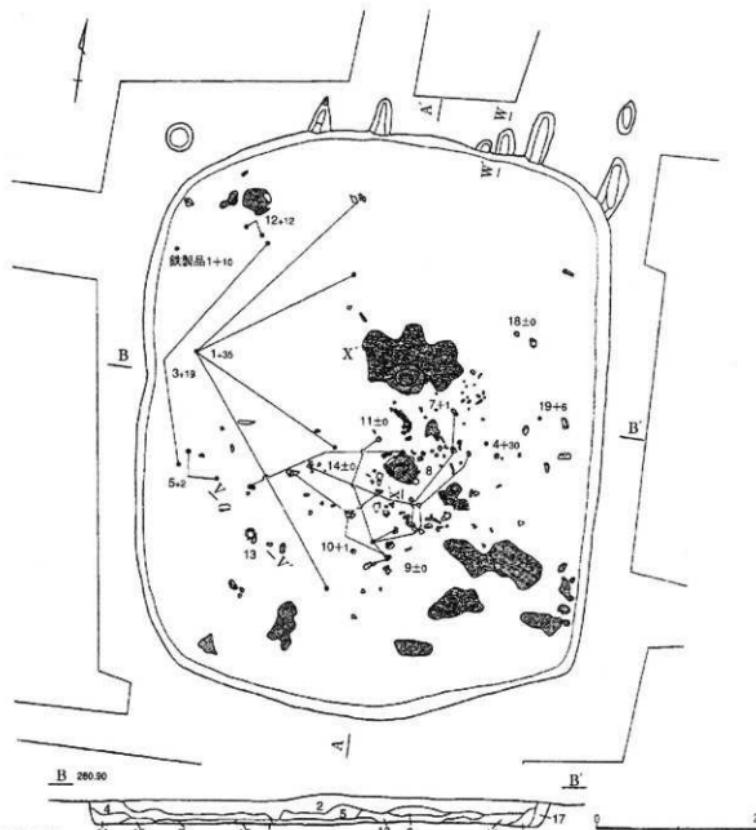
B、C-3、4区に位置し、北側に44m離れて1号住居址がある。2号住居址(旧)の真上に構築されているが、上部に削平を受け遺存状態は不良である。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸72m、短軸58m、壁高は28～36cmを測る。主軸方位はN-6°～Wを示す。床面は平坦で、全面に貼り床が施され、全体的に堅緻である。また、床面に散在する形で焼土及び炭化物を確認している。

覆土は17層に分けられ、ブロック状の堆積を示していた。壁際の土が堆積した後に焼土粒及び炭化物を多量に含む土が堆積しているが、人為的なものかどうかは不明である。

ピット及び貯蔵穴等は検出されなかった。炉は住居址の中央部に2基検出され、主軸方向はNo.1がN-82°～E、No.2はN-80°～Eを示し、住居址の方位と直交する。いずれも地床炉で、平面形は楕円形を呈する。規模は、それぞれ50cm×34cm、深さ3cm、42cm×30cm、深さ3cmを測る。貼り床を掘り込んで掘り方を造り、その後暗黄褐色土を敷いて火床としている。枕石などは確認されていない。

また、1号住居址(新)と同様に住居址の北壁に接して溝状の突出遺構があるのを確認したが、住居址に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物は豊富で、床面全体及び覆土内にまんべんなく分布していたが、特に住居址の南側部からの出土が多い傾向が見られた。また、2号住居址(旧)と同様に、同一個体の破片が住居址内に散乱していた。



2号住居址(新)

第2層：暗茶褐色土層(粘性やや有、しまりやや有、ローム粒が微量混入)

第4層：暗茶褐色土層(粘性やや有、しまり有、炭化物、焼土、ローム粒を含む)

第5層：暗茶褐色土層(粘性有、しまり有、黄色ローム粒、ローム小ブロックを多量含む)

第6層：暗黃茶褐色土層(粘性有、しまり有、黄色ローム粒、ロームブロックを多量含む)

第7層：暗黃茶褐色土層(粘性強、しまり強、焼土粒、炭化物、黄色ローム粒、ローム小ブロックを多量含む)

第11層：燒土黃褐色土層(粘性普通、しまり普通、ローム粒が多量混入)

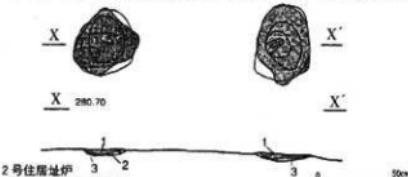
第13層：暗茶褐色土層(粘性強、しまり強、黄色粘土ブロックが多量、焼土、炭化物が微量混入)

第14層：暗茶褐色土層(粘性普通、しまり普通、ローム小ブロック、炭化物が微量混入)

第15層：暗茶褐色土層(粘性有、しまり有、炭化物、ローム小ブロックが混入)

第16層：暗茶褐色土層(粘性有、しまり普通、ローム小ブロックが混入)

第17層：暗茶褐色土層(粘性強、しまり有、ローム粒、ローム小ブロックが多量混入)



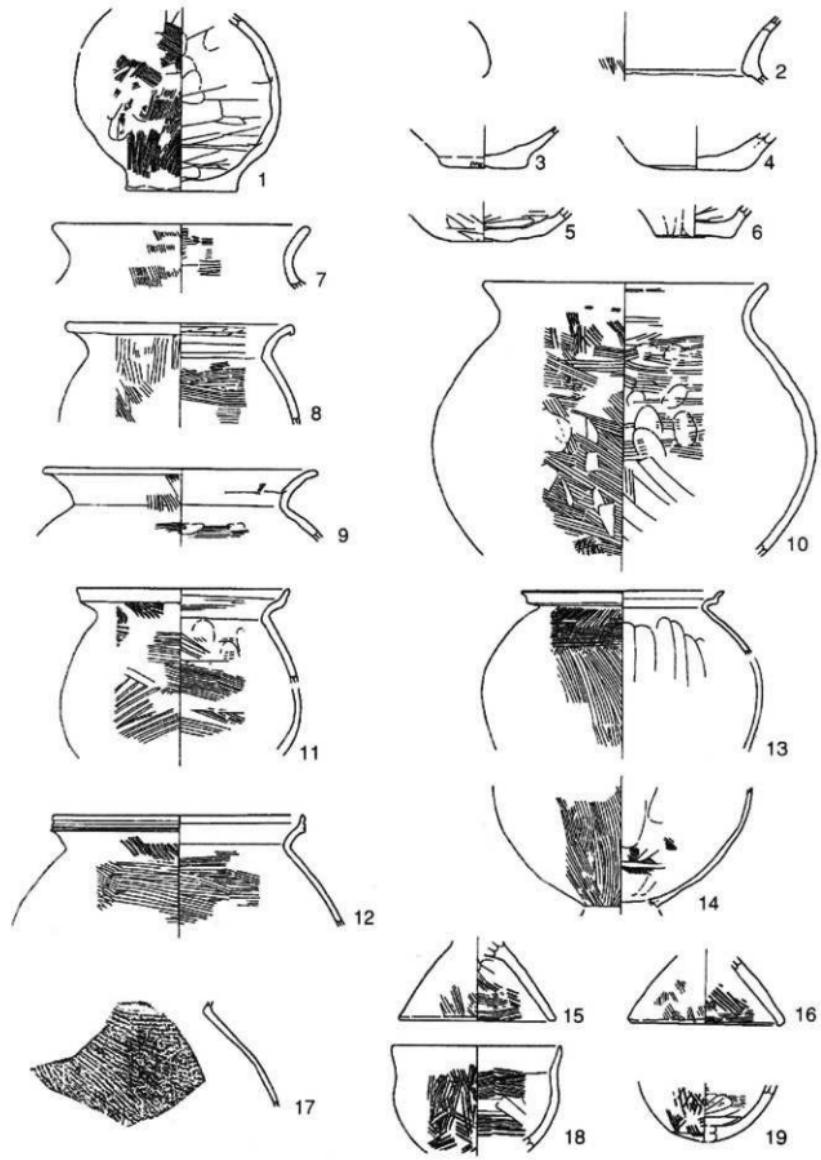
2号住居址(新)

第1層：燒土主体層

第2層：暗茶褐色土層(焼土ブロック・炭化物を含む)

第3層：暗黃褐色土層(粘性無、しまり有、焼土粒が微量混入)

第57図 III区 2号住居址(新)・炉・遺物出土状況図 [1/60・1/30]



第58図 III区 2号住居址(新)出土土器 [1/3]

第25表 III区 2号住居址(新)出土土器観察表(1)

1	壺	A : b (68)。B : 脚部1/2。底部完形。C : 輪積み。外面一肩部細かいハケ。部分的にナデが入る。底部ナデ。内面一指揮えのちナデ。D : 白石粒等を多量含み密。E : 良。F : 橙色 (7.5YR7/6)。
2	壺	B : 脚部破片。C : 輪積み。外内面一摩耗激しく調整不明。外肩肩部にハケが残る。D : 白石粒を多量含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。
3	壺	A : b (54)。B : 底部完形。C : 外内面一摩耗激しく調整不明。D : 白石粒を多量含み密。E : やや不良。F : 橙色 (5YR7/8)。
4	壺	A : b (66)。B : 底部完形。C : 輪積み。外内面一摩耗激しく調整不明。D : 白石粒を多量含み密。E : 良。F : 外面一明褐色 (5YR5/8)。内面一にぶい黄橙色 (10YR7/4)。
5	壺	A : b (72)。B : 底部1/2。C : 外内面一ナデ。D : 白石粒を含み密。E : 良。F : 明赤褐色 (5YR5/6)。
6	小型壺	A : b (46)。B : 底部完形。C : 外面一ミガキ。底部ナデ。内面一ナデ。D : 白石粒を多量含み密。E : 良。F : 外面一にぶい橙色 (7.5YR7/4)。内面一灰黄褐色 (10YR5/2)。
7	甕	A : ℥ (156)。B : 口縁部破片。C : 外面一ハケ。D : 密。E : 良。F : 外面一明赤褐色 (25YR5/6)。内面一橙色 (25YR6/8)。
8	甕	A : ℥ (140)。B : 口縁部～脚部上半破片。C : 外面一口縁部ヨコナデ。口縁部ハケのちナデ。脚部上半粗いハケ。中位はやや密なハケ。内面一口縁部ハケのちヘラナデ。脚部ハケ。D : 白石の混入少ない。赤色粒子を多量含み密。E : 良。F : 外面一明赤褐色 (5YR5/6)。内面一明赤褐色 (25YR5/8)。
9	甕	A : ℥ (170)。B : 口縁部破片。C : 外面一口縁部ヨコナデ。口縁部ハケ。肩部ハケ。部分的にナデが入る。内面一口縁部ハケのちヨコナデ。肩部指揮えのちハケ。頭部近くにナデが入る。D : 赤色粒子を多量含む。小石が混じり密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/8)。
10	甕	A : ℥ (176)。B : 口縁部～脚部1/4。C : 輪積み。外面一口縁部ヨコナデ。頭部以下はハケ。内面一口縁部ハケのちヨコナデ。頭部以下は指揮えのちハケ。D : 白石粒を疎らに含み密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/6)。
11	甕	A : ℥ (132)。B : 口縁部～脚部3/4。C : 外面一口縁部ヨコナデ。頭部以下はハケ。内面一口縁部ハケのちヨコナデ。頭部は指揮えのちハケ。後ナデ。D : 白石粒、赤色粒子を多量含み密。E : 良。F : 外面一明赤褐色 (25YR5/6)。内面一明赤褐色 (5YR5/6)。G : いびつ。火を受けた痕跡あり。
12	甕	A : ℥ (156)。B : 口縁部～脚部破片。C : 外面一口縁部擬凹線とナデによる細沈線あり。頭部以下はハケ。内面一口縁部ヨコナデ。面取り部にヨコハケの痕跡を残す。頭部以下はハケ。D : 白石粒を多量含み密。E : やや軟質。F : 橙色 (5YR7/6)。
13	台付甕	A : ℥ (126)。B : 口縁部～肩部ほぼ完形。C : 外面一口縁部ヨコナデ。肩部に凹線有り。肩部ハケ。横位のハケが入る。内面一口縁部ヨコナデ。端部は一部面取りされている。肩部以下ヘラナデ。D : 白石粒、雲母を多量含み密。E : 良。硬質。F : 橙色 (5YR7/6)。
14	台付甕	B : 脚部下半部2/3。C : 外面一ヘラケズリのちハケ。内面一ハケのちヘラナデ。D : 白石粒、雲母を多量含み密。E : 良。F : 橙色 (25YR6/6)。G : No.13と同一個体と思われる。
15	台付甕	A : b (98)。B : 脚部破片。C : 外面一ハケ。内面一上部ヘラナデ。細かいハケのち粗いハケ。D : 白石粒を多量含み密。E : 良。F : 橙色 (7.5YR6/6)。
16	台付甕	A : b (93)。B : 脚部破片。C : 外面一ハケのちナデ。内面一細かいハケのち粗いハケ。D : 赤色粒子を含み密。E : 良。F : 外面一橙色 (7.5YR7/6)。内面一にぶい赤褐色 (25YR4/4)。

第26表 III区 2号住居址(新) 出土土器観察表(2)

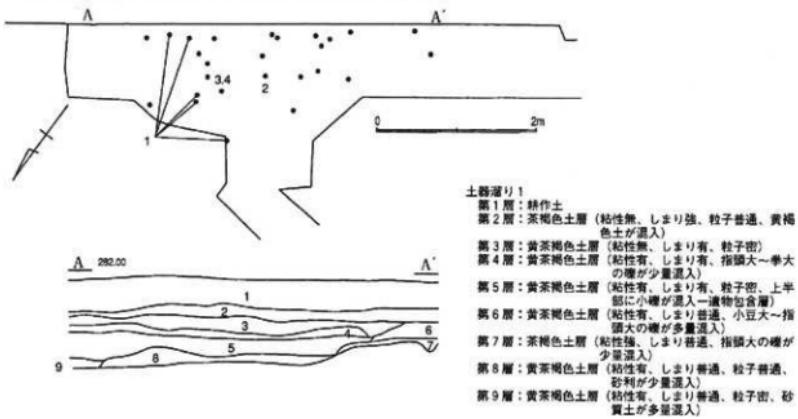
17	甕	B: 脚部破片。C: 外面一口コハケのち斜めハケ(粗)。内面-指押えのちハケと思われる。D: 白石粒を多量含み密。E: 良。F: 橙色(5YR7/8)。G: 薄手で硬質。
18	鉢	A: ℓ (10.6)。B: 口縁部-体部下半1/3。C: 外面一口縁部ヨコナデ。体部ハケ。内面-口縁部ヨコナデ。体部粗いハケ。部分的にナデが入る。D: 少量の白石粒、赤色粒子を多量含み密。E: 良。F: 橙色(5YR6/6)。
19	鉢	A: b (4.0)。B: 体部上半~底部1/4。C: 外面-ハケ。内面-体部中位はハケのちヘラナデ。下位はヘラナデ。D: 少量の白石粒、赤色粒子を多量含み密。E: 良。F: 明赤褐色(5YR5/6)。

## 土器溜り1 (第59~60図、第27表)

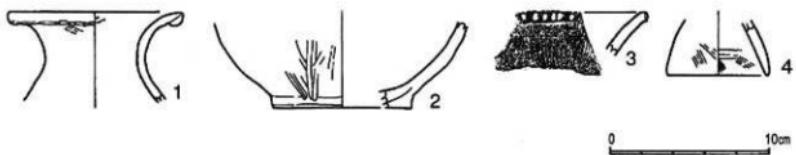
調査区の最北東部にあるB-16区に位置する。トレンチNo.20を掘り下げたところ、地表面から約80cm下から、ほぼ同一のレベルで土器が散乱している部分が検出された。当初、住居址などの遺構の存在が考えられたことから精査を行ったが、平面的に断面的にも遺構の存在を示す落ち込みがなく、土器溜りとして扱った。

土器が散乱していた範囲は3.7m×1.6mを測るが、発掘調査区域外に続いている可能性が大きい。出土土層は図-57土層図の第5層に相当し、他の地点でもこの土層から古墳時代の遺物が検出されることが多く、当時の生活面と考えられる。

出土遺物は細片が多く、図示できたのは4点のみであった。



第59図 土器溜り1 [1/60]



第60図 土器溜り1 出土土器 [1/3]

第27表 土器漏り1出土土器観察表

1	壺	B: 口縁部～頸部1/3。C: 外面一口唇部ヨコナデ。口唇部下半押え。口辺部～頸部ハケ残るが摩耗激しい。内面-不明。D: 白石粒、雲母を多量含み密。E: 良。F: 明赤褐色 (5YR5/8)。
2	壺	A: b (8.8)。B: 底部～胴部下部1/5。C: 外面一ハケのちタテヘラミガキ。底部近くはナデ。内面-不明。D: 白粒を多量含み密。E: 良。F: 外面-明赤褐色 (25YR5/8)。内面-橙色 (7.5YR6/6)。
3	甕	B: 口縁部破片。C: 外面一口唇部刻目。口縁部細かいタテハケ。内面-細かいヨコハケ。D: 密。E: 良。F: 橙色 (5YR6/6)。
4	台付甕	A: b (6.2)。B: 脚台部1/4。C: 外内面一ハケ残るが摩耗激しい。D: 白石粒を多量含み密。E: 良。F: 外面-橙色 (7.5YR7/6)。内面-橙色 (25YR6/8)。

## 2) その他の遺構

## 焼土址 (第61図)

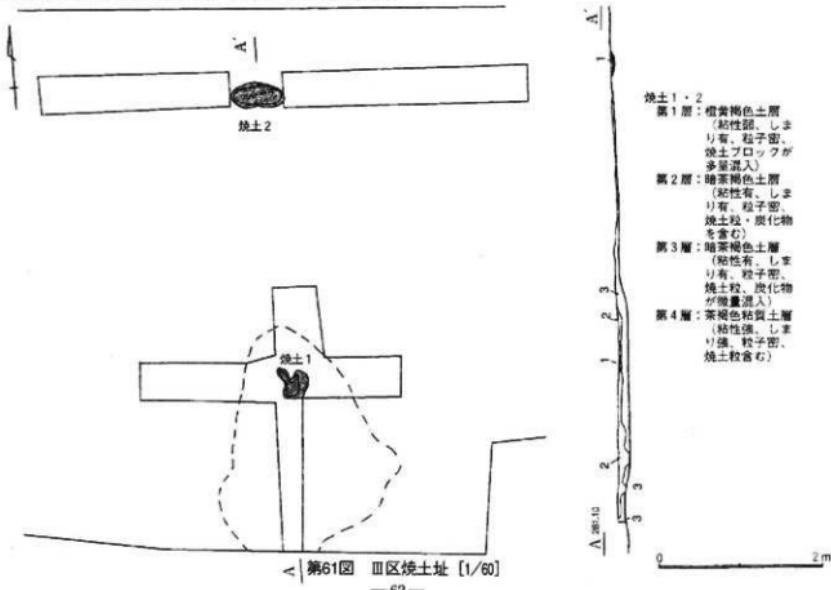
## 1号焼土址

Ⅲ区の北西部、B-3区に位置し、南東約4mには2号住居址がある。焼土の密集する部分と、焼土粒の散在する部分から成り、焼土密集部分は42cm×38cm、厚さ2cmを測る。周辺には28m×21mの範囲に炭化物及び焼土粒が薄く散在している。

壺型土器の底部、S字状口縁型土器の胴部破片等が出土しているが、細片で図示することはできなかった。

## 2号焼土址

1号焼土址の約3m北側に位置する。平面形は楕円形を呈し、66cm×30cm、深さ5cmを測る。掘り方を有し、堅くしまった焼土の下には茶褐色粘質土がある。形状及び状態から粘土を貼った地床炉と思われ、住居址などの遺構が存在した可能性が高い。遺物は出土していない。



&lt; 第61図 III区焼土址 [1/60]

3) 遺構外出土遺物 (第62図、第28表、図版18)

図62に遺構外から出土した遺物を掲載した。

第62図 III区遺構外出土土器 [1/3]

第28表 III区遺構外出土土器観察表

1	甌	A : $\ell$ (15.6)。B : 口縁部～胴部破片。C : 外面一口縁部ヨコナデ。頸部以下ハケ。内面一口縁部ハケのちヨコナデ。胴部ハケ。中位以下にヘラナデ。D : 白石粒、雲母を多量含む。E : 良。F : 橙色 (5YR6/5)。
2	甌	A : $\ell$ (12.0)。B : 口縁部～胴部1/3。C : 外面一口縁部ヨコナデ。頸部細かいハケのちナデ。胴部粗いハケ。内面一口縁部ヘラナデのちナデ。胴部指押えのち粗いハケ。D : 白石及び白石粒、赤色粒子を多量含み密。E : 良。F : 外面 - 橙色 (5YR6/6)。内面 - 黄灰色 (25YR4/1)。
3	台付甌	B : 脚接合部1/4。C : 外面 - ハケ。接合部ナデ。内面 - 体部は細かいハケのちヘラミガキ。脚部粗いハケ。D : 白石粒を含み密。E : 良。F : 橙色 (7.5YR6/6)。
4	台付甌	A : b (8.0)。B : 脚台部1/2。C : 外面 - ハケのちナデ。内面 - ハケ。D : 白石粒、赤色粒子を含む。φ6mm大のチャート石を疊らに含み密。E : 良。F : 外面 - 橙色 (7.5YR6/6)。内面 - 橙色 (5YR6/6)。
5	鉢	A : $\ell$ (10.3), b4.0, h 4.9。B : 4/5。C : 外面一口縁部ヨコナデ。体部はハケのちヘラミガキ。底部摩耗しているがナデ有り。内面一口縁部ハケ。体部以下摩耗著しいがヘラミガキの痕跡。D : 扶錐形を多量含み密。E : 良。F : 淡橙色 (7.5YR6/6)。

第63図 III区出土石器 [1/3]

- 63 -

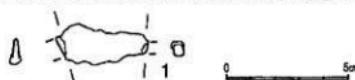
### 石器（第64図、図版18）

石器としては打製石斧1点、砾石1点、打製による剥片を持つ砾1点が出土した。

1は打製石斧で、2号住居址（新）の地床炉に接して出土した。石材は灰色粘板岩製で短楕円形を呈する。基部は破損している。2は砾石で、試掘時に1号住居址（新）から出土した。石材は凝灰岩製である。磨面は側面以外の両面に見られ、曲面を呈するが、一部欠損している。長軸方向に平行する擦痕が見られる。3は打製による剥離痕を持つ砾である。石材は粘板岩製で遺構外から出土した。

### 鉄製品（第64図、図版18）

1は2号住居址（旧）北西隅の床面より10cm程上から出土したものである。現長4.3cmの不明鉄製品。全体が錆で覆われ明確でない。一端は $1.0 \times 0.2$ cm程の偏平な断面を示し他端は0.4cm角の方形断面を有している。



第64図 III区 出土鉄製品 [1/2]

## 第V章 小 結

### 第1節 弥生～古墳時代の遺構と遺物について

#### (1) 出土土器について

今回の調査で弥生時代から古墳時代にかけての住居址を新・旧あわせて5件確認することができた。特に2号住居址からは弥生から古墳時代への移行期に当たる土器が多量に出土している。

出土した土器の大半は壺型土器と甌型土器が占めており、これに若干の鉢が伴っている。高壺や器台は全く見られず、本遺跡の特徴の一つとなっている。

2号住居址（旧）は出土した大型壺及び甌型土器の形態から六科第Ⅲ期（小林氏による山梨編年2期）に位置づけられる。ただし、外面にタキに類似したハケを有する甌型土器は、その形態及び調整方法から山梨県内での出自を追うことができず、他地域からの移入あるいは影響下で成立したものと考えられる。胴部下半を欠損するために、底部形態が不明であるが、口縁が「く」の字に屈曲し、タキに類似した板状工具による粗いハケ調整を持つ同様な甌型土器は、群馬県保渡田Ⅶ遺跡6号住と長野県西条・岩舟遺跡1号土壙から報告されており、两者とも週間Ⅱ式に該当する土器を共伴している。週間Ⅱ式は山梨編年3期にあたり、前述の土器群との間に若干の時期差が見られるが、住居廃絶に伴う何らかの行為に使用されたことを考えると、2号住居址（旧）は山梨編年3期には廃絶していたものと考えられる。

2号住居址（新）から出土したS字状口縁付壺（以下S字壺）は口縁部の屈曲が大きく、中段にはしっかりと平坦面が見られる。肩部にはヨコハケが施され、胴部の張りも強く球形を呈することから、赤塚分類C類に対比できる。しかし口縁端部に凹線を有さないことから、C類でもやや新しい段階と思われる。小林健二氏の研究を参考にすると、C類（新）は山梨編年3期から4期に該当する。ただし、S字壺は床面直上の出土ではないことから2号住居址（新）は遅くとも山梨編年4期には廃絶していたものと考えられる。この他に2号住居址（新）からは受口状口縁を持つ甌型土器が出土しているが、現在のところ県内での類例が乏しく、時期決定をおこなうことができなかった。

2号住居址の土器の出土量の多さに対して、1号住居址からはほとんど遺物が出土しておらず、時期決定には至らなかったが、1号住居址（新）からはヨコハケを持つS字壺の肩部破片が出土していることから2号住居址

(新) とはほぼ同時期と思われる。

#### (2) 焼失住居について

今回確認された1号住居址(旧-2)では住居址の構築材の一部と思われる炭化材がまとまって検出された。炭灰層は多くの床面に炭化材と焼上が確認されたこと、覆土中にも焼土と炭化物が含まれていたことから焼失住居と推定された。しかし、壁際には焼上や炭化物を含まない覆土が薄く堆積していること、構築材と思われる炭化材が床面より若干浮いた状態で検出されたことなどから、住居の廃絶と焼失の間には若干時間差があるものと推定された。遺物は殆ど出土しておらず、炭化材と同じレベルから出土した壺1点のみである。住居址全面の発掘ではないため確定はできないが、1号住居址(新)を立て替えるに当たり生活道具である土器などを運び出した後、上屋を焼却し、1号住居址(新)を建てたものと推定された。

2号住居址(新)では床面に焼土及び炭化物が散在し、覆土にも焼土粒、炭化物を含んでいた。しかし、炭化物の範囲が地床炉の周辺であること、炭化材の出土量が少ないと、焼土塊が検出されていないことから焼失住居と確定するには至らなかった。

#### (3) 住居の廃絶行為について

2号住居址(旧)からは床面全体及び覆土内より多量の土器が出土した。特に北東コーナーと南東コーナーに多くの土器片が分布していた。また、同一個体の破片が住居址内に散乱しており、図示した13個体中4個体に同様な状態が見られた。特に第56図No.8の壺型土器の破片は住居址の外周に散在し、床面上から2号住居址(新)の貼り床内までまんべんなく出土している。2号住居址(旧)は覆土の状態から、2号住居址(新)構築に際して人為的に埋め戻されたと考えられることから住居址を埋め戻す過程で土器片を混入する行為があった可能性が高い。またP12内から出土した30点近くの土器片の中には意識的に破碎された状態のものが含まれておりさらに、P11も同様に入為的に埋め戻した後に壺型土器を正位に置いていることから住居廃絶に伴うなんらかの行為があつたことが伺い知れる。

## 第2節 平安時代の遺構と遺物について

#### (1) 出土遺物について

##### a) 出土土器

批把B遺跡において検出された遺構は、そのほとんどが上部に削平、搅乱を受けたため、遺物の出土量は少量であった。先述した通り各遺構については、年代観を把握しうる程に遺物が出土したものは、2・10・11号を除く各住居址及び土器溜り2のみである。出土土器の種別構成は重量比で土師器16365g(77%)、須恵器4670g(22%)、陶器類15g(1%)である。器種は土師器では壺・高台壺・壺蓋・皿・壺・小形壺・手づくねがみられ、須恵器では壺・高台壺・壺蓋・壺・蓋で、きわめて器種構成は貧弱である。図示したもののみであるが、壺類ではほとんどが甲斐型壺の範疇に入るものである。壺類では甲斐型壺1348g(15%)、従来型壺915g(11%)、ロクロ威型壺6325g(74%)であった。

遺構の遺存状態の関係もあり、図示した土器はほとんどが床面上の出土であった。ここでは、窪周開床面から比較的の原形をとどめている壺を中心に年代観を把握したい。尚、年代観の基準は坂本・末木・堀内三氏の提示した編年に従った。

《1号住居址》図示したものは壺6点である。内訳は土師器5点、須恵器1点である。土師器壺は玉縁口縁でやや下膨れ状の器形を持つ。口径は125~148cmとやや大きくなり、D・底径比はA>2bとなる。略文はなく、外面下半は斜めヘラケズリで調整される。甲斐編年XII期にあたろう。尚、図示しないが灰釉陶器片1点が出土

している。

《3号住居址》図示したもの3点、皿・壺・蓋の三種で全て土師器である。皿は径12.6cmで丸縁口縁を有し、底部は回転糸切りである。蓋は甲斐型蓋で腹部の器厚は厚みを帯びる。甲斐編年XIII期の所産であろう。

《4号住居址》9点の土器を図示した。土師器壺・壺・須恵器壺・蓋の4種である。土師器壺は口徑14cmで体部下端から底部へラケズリで器面はていねいに調整されている。須恵器壺は口徑13.6~14cm、底径8cmで、底部は回転糸切りのちラケズリ調整を施している。甲斐編年IV期で甲斐型壺成立直前の所産であろう。

《5号住居址》10個体を図示した。土師器高台壺・壺・須恵器壺・高台壺の出土をえた。土師器高台壺は削り出し高台で、器壁は丁寧なつくりで暗文は体部のみである。須恵器壺は口徑11~12cmで、口・底径比は $\ell < 2a$ である。底部は回転糸切りのち周辺部へラケズリを施している。

《6号住居址》土師器壺・高台壺・壺・須恵器壺・蓋・壺・蓋が出土している。土師器壺類は身こみ部まで暗文が施され、底部は回転糸切りのちラケズリ調整である。須恵器壺は $\ell < 2b$ の範囲に入り、底部は回転糸切り未調整のものと周辺へラケズリのものとが混在する。土師器蓋6はロクロ成型蓋である。甲斐編年VI期としたい。

《7号住居址》須恵器壺・蓋の2点を図示した。壺はほぼ $\ell = 2b$ の範囲で、底部は回転糸切り未調整である。他に土師器壺・須恵器壺が出土している。甲斐編年IV期にあたろう。

《8号住居址》土師器壺・須恵器壺を図示した。壺は $\ell < 2b$ で、底部は回転糸切りのち周辺へラケズリである。

第29表 遺構別出土土器計測表 (I・II区)

遺構	上 師 器				須 恵 器				灰釉陶器	
	壺・皿類 (点)	皿類 (点)	壺類 (g)	蓋類 (g)	壺・蓋類 (点)	壺・蓋類 (g)	壺・蓋類 (点)	壺・蓋類 (g)	壺・皿類 (点)	壺・皿類 (g)
1号住居址	13	211	23	139	2	17			1	5
2 タ	4	8	3	32			1	5		
3 タ	2	85	1	85						
4 タ	4	92	12	382	5	424				
5 タ	2	361	51	630	9	656				
6 タ	62	595	481	2,975	56	1,175	6	130		
7 タ	10	55	11	155	2	70	2	40		
8 タ	12	50	117	1,575	2	165	1	15		
9 タ	21	130	70	1,255	5	420	1	55		
10 タ										
11 タ			1	5						
土器溜り2	886	6,040	285	1,355	32	690	5	843	2	15
ピット群I	4	150			2	55				

土師器壺2・4はロクロ成型壺である。他に土師器壺、須恵器壺が出土している。甲斐編年VI～VII期にあたる。《9号住居址》土師器壺・壺・須恵器壺・蓋を図示した。土師器壺は身こみ部まで暗分が及ぶ。 $\ell < 2b$  の範囲に入り、体部下端は斜めヘラケズリ調整である。須恵器壺は人手で底部は回転糸切りである。土師器壺2はロクロ成型壺である。他に須恵壺が出土している。甲斐編年VII期であろう。

《上器窓り2》79点の土器を図示した。土師器壺・高台壺・皿・蓋・壺・須恵器壺・高台壺・蓋・壺・蓋・灰釉陶器である。土師器壺は口径10～13cmで大多数は10.2～11.5cm、底径5～6.5cmを測るもののが、23・25、56～61は口径15～16.5cmと大型の製品である。底・口径比は $\ell \approx 2b$  の範囲に入り、口縁部は丸縁状を示す。体部下半は斜めヘラケズリで調整され、底部は回転糸切り未調整のものが主体であるが、糸切り後周辺ヘラケズリされるものがわずかに混在する。暗文は体部のみられ、観察されなかった個体についても器壁が粗れているため明確にし難いものが多い。皿は体部に段部をつくって立ち上がり、体部下半から底部は回転ヘラケズリによって調整される。須恵器壺70は底・口径比がほぼ $\ell = 2b$  で、底部は回転糸切り未調整である。灰釉陶器は壺頸部から肩部で灰オリーブ色の色調を呈する。時期的には甲斐編年期のものが主体をなし、IX・X期に降るものがある。

最後に上器の胎土分析について言及しておきたい。今回の分析については、川鉄テクノリサーチ㈱に依頼し、その結果については付章において明らかにしている。分析依頼点数はわずかであったが、興味深い結果を得ることができた。

今回、分析を依頼した資料は全て町内から出土したもので、S字状口縁壺の破片で所謂C類とされるものである。分析した資料点数は3点である。図版20①・②は批把B遺跡Ⅲ区住居址から出土したもので、①は批把B遺跡Ⅲ区2号住居址から出土したもので、②は同1号住居址の出土品である。③は上の山遺跡西端第2層からの出土品である。

上の山遺跡は、町内中央部に披がる市之瀬台地上に存在する绳文時代から中世に至る遺跡で、市之瀬川を北に臨んだ台地縁辺部に占地している。発掘調査を実施した範囲は遺跡のごく一部であるが、弥生時代末から古墳時代初頭の堅穴住居址が6軒検出されている。

分析の結果は見事に二極にわかれた。興味深いことは、胎土の推定产地が各遺跡毎にわかれただけではなく、批把B遺跡の一片と上の山遺跡の一片とか同グループ[A]にくくられ、批把B遺跡の他の一片が他のグループ[B]として分類された。これは：遺跡について、全く同時に二つ所の胎土供給地があったのか、あるいは微妙な時期差によって、胎土供給地に変化があったのか判断に苦しむところである。しかし、少なくとも町内の二遺跡が共通の胎土供給地を持ち、かつ微妙な時期差はあったにしろ一遺跡において二ヶ所の胎土供給地を確保していたことを示すものであろう。

またAグループは、名古屋市営海雲、或いは京都市石作窯の胎土と近似性を示している。このことは、胎土が同一の産地であると早急に結論を出すことは危険であろうが一つの検討課題としておきたい。いずれにしても、今後樹立の遺跡の土器の胎土分析資料をつみ重ねる事によって、土器の生産から供給にかかる問題の一侧面を明らかにしうると考えられる。

#### b) 出土鉄製品

11点の鉄製品が出土しているが、住居址に伴うものは6号住居址出土のもの1点である。Ⅲ区遺構外出土5は刀子片、同1は飾り金具の一つであろうか。他は釘類の一部である。

この調査によって得られた鉄製品は数も少なく種類も貧弱であった。町内での数列の該期集落の調査でも鉄製品の出土は数・種類ともに少なく、県内の他の調査例との検討を要するが、この地域におけるひとつの特徴として把え得る可能性もある。

#### (2) 検出遺構について

今回の調査によって検出された平安時代所産の遺構は次の通りである。堅穴住居址11軒、掘立柱建物遺構6棟、

は総延長148m、約2360m<sup>2</sup>の調査区から発見されたが、本来営なまれた集落のごく一部を調査したにすぎないものであろう。検出された遺構のうち、その年代観をあきらかにしうるものは、2・10・11号住居址を除く、8軒の竪穴住居址及び土器通り2のみであった。以下、非常に不充分な資料であるが、若干のまとめを進めたい。

a) 竪穴式住居址の規模・規格等について

本遺跡からは、11軒の竪穴式住居址が検出された。その規模は平均で314×285mと小規模な存在が多く、最大の6号住居址でも4.6×3.9mと他に比し、一回り大きい程度である。竪の構築は、ほぼ袖石を芯にして粘土を貼って構築するもので、その位置は6号住居址が北竪、3号住居址が北東隅に竪を設ける他は東竪である。但し、10号住居址は東壁に竪を確認できず、北竪である可能性が強い。いずれにしても、本遺跡の場合、基本的には東竪を構築するものであろう。従って主軸方位も東-西にとるもののが基本となるが、特にN-80°-E~N-107°-Eと、最大の振幅をみせる7号住居址でも、東に対して17°のずれしか示さない。他は5°~10°の振れをみせるのみで、その統一性は見事である。また興味深いことに、本址最大規模の6号住居址が、N-Sというほぼ直角に振れた方位を示している。住居の形状は、一方が他方に比しやや長めの隅丸長方形を呈し、縦・横比は0.88以上である。全体形状の把握しえない7号住居址が0.81を測る以外は、どれも最大規模の6号住居址が縦横比0.84とやや横長のプランを呈している。

b) 据立柱建物遺構について

今回の調査では不明定要素の多い3号据立柱建物遺構を含めて6棟の建物を検出した。6号据立柱建物遺構が1間×1間である他は2間×2間である。規模は同じく6号据立柱建物遺構が2m平方ほどである以外は、平均値で4×3m程度である。長軸方位は、これも6号据立柱建物遺構、N-19°-Wと20°程斜行する以外は、N-90°-E、N-Sと直交する2種類で統一され強い指向性を感じられる。

第30表 住居址一覧表

住居番号	位置	規模(m)・長短比	主軸方位	竪位置及積築		備考
1号住居址	C-14	3.4×3	0.88	N-95°-E	東 -	XII
2号	CD-10	(3)×2.8	0.93	- (東)	-	-
3号	C-12	-	-	-	北東隅(袖石)	XIII
4号	E-10	2.7×2.5	0.92	N-90°-E	東 袖石+粘土	IV
5号	H-6	2.9×2.6	0.96	N-90°-E	東 粘土	V~VI
6号	G-89	4.6×3.9	0.84	N-S	北 粘土	VI
7号	F-9	(3.2)×2.6	0.81	N-107°-E	東 袖石+粘土	VIII
8号	F-8	(2.8)×-	-	N-86°-E	東 粘土	VI~VII
9号	IJ-9	3.7×3.4	0.91	N-80°-E	東 粘土	VII
10号	〃	3.2×-	-	- (北)	-	→10住 ←9号
11号	F-9	-	-	N-100°-E	東 粘土	←7号

第31表 据立柱建物遺構一覧表

遺構番号	位置	規 模	長軸方位
1号据立柱建物	E-11	4.8×3.3	2間×2間
2号	EF-11	4.5×2.3	2間×1間
3号	FG-8	-	-
4号	G-9	4.3×3.5	2間×2間
5号	G-78	4.1×4	2間×2間
6号	H-78	2.2×2.1	1間×1間

#### c) その他の遺構について

発掘区中央南半部の遺構密集地から、それを囲うように横列状のピットが検出された。これはピット間の間隔や、規模等を無視して、ピット群の中から視覚的に描出したもので、確実に横列として認知しうるものは、1号横列のみである。しかし他の横列状ピットも、1号横列とほぼ同方位あるいは直交する方位（N-10°-EorN-S）にとっている。また全て遺構密集地である6号住居址や5号～6号掘立柱遺構を囲うように存在しており、注目すべき施設と考えたい。

土器滌り2は、調査区の西端にあたり、かつ微地形的観察によれば、ほぼ集落の端部にあたると考えられる。南半部では比較的の遺存のよい土器が正位、或いは逆位で、北半部では断片化したものが主体である。器種的には図示した土器のはどんとは壊類であった。本遺跡から西南1.8kmの鎧物師屋遺跡（メ木遺跡）では100軒以上を数える平安期集落の東端から一辺1～2m四方に壊類をならべた遺構が発見されている。本遺跡例ではさほどの規格性は考えられないが、集落内で、かつ住居址外で行なわれた何らかの行為の結果であり、これも注意しておきたい。

#### d) 遺構の平面的配置について

遺構は発掘区のほぼ全体にわたって存在しているが、特に中央部（E-11区～H-7区）に集中している。中でもF・G-9区～G・H-7区については特に密集している。ここでは北竪で、やや規模の大きい6号住居址を囲うように掘立柱建物遺構が建てられ、さらにそれを区画するように横列状のピット群が存在する。この集中区はさらに北、東方向へ拡がる可能性が強い。掘立柱建物遺構・横列状ピットの年代観があきらかでないのが残念であるが、区画的には本集落の中でも有意義な位置であることをうかがわせる。また中央部北寄りのE-10・11区にも直交する2棟の掘立柱建物遺構2棟を中心に遺構のまとまりが認められ、ここにも南或いは東方向へ延びる可能性が期待される。さらに発掘区南端のT-4・5区の土器滌り2も南方向の道路下へ続いており、道路を越えて南方向に遺構群が期待されよう。

#### e) 遺構の時代的変遷について

今回の調査による範囲では、本集落の成立年代は甲斐編年IV期である。以降甲斐編年XIII期まで集落は継続する。途中間IX～XI期の住居址が検出されていないが、土器滌り2においてIX、X期と思われる土器がわずかながら出土しており、今回の調査域外において集落活動が行われていた事を示すものであろう。

各住居址の時期は別表にまとめた通りであるがIV期からⅨ期の遺構が調査区中央部から南半部に認められるのに対して、XII・XIII期の2軒の住居址が北端部に散在している傾向が認められる。

各時期の絶対年代については、從来甲斐型壊出現・確立期である。甲斐編年V・VI期を8世紀末から9世紀初頭に当てる説が有力であった。しかし近年、灰釉陶器との伴用関係や周辺地域での出土状況などから、甲斐編年V期を繰り上げ、8世紀の第3四半世紀におく説が提出されている。ここでは、その論議に立ち入る余裕は無いが、本集落の成立年代については甲斐型壊成立直前期の8世紀中葉としておきたい。

### (3) まとめ

これまで述べてきたように、今回の調査ではI・II区から豎穴住居址11軒、掘立柱建物遺構6軒を中心とする平安時代の集落の一部が発見された。またIII区からは、弥生時代末から古墳時代初頭の住居址5軒等、該期の集落が発見された。これらについては前節までに詳述してきたが、ここでは最後に若干のまとめを行いつつ、今後の課題を抽出したい。

III区で確認された遺構の年代は弥生時代末から古墳時代初頭の年代を与えられた。御勅使川原状地では、近年その扇端部を中心に赤面C遺跡、十五所遺跡、村前東A遺跡等の当該期の遺跡が発見され、県内西部地域においても古墳時代への胎動の様相があきらかにされつつある。

御勅使川扇状地扇端部には、現在の櫛形町・甲西町・若草町の町境沿いに、ほぼ孤状に並ぶ湧水帯が存在している。本遺跡のすぐ西方には枇杷ヶ池と呼ばれる湧水が存在し、地下水脈は発掘区の西方約80m程を南下している。

地下水脈の通じる一帯は浅い谷状の地形を南北に刻み、谷の最奥部は枇杷ヶ池よりも更に北へ進んで、現在の熊野神社の辺りまで達している。調査を実施したⅢ区は、この谷状地から50cm程の比高差をもって続く微高地の縁にあたっている。弥生期末から古墳時代初頭の住居址は、今回の調査では地点的に発見されたのみであったが、本来はこの湧水から谷状地を臨む微高地の縁に営まれた集落の一部を示したものであろう。このような遺跡の姿は、この時期に扇端部の湧水を利用して行なわれた水田開発と、それに伴う遺跡群の展開を示したものであろう。

また、Ⅲ区2号住居址から出土した鐵入された可能性の高い壺型土器の存在は、該期における可耕地の開発に伴う社会的流動性の一端をかいまみせるものであり、新たな課題を投じたものといえよう。

I・II区からは、平安時代の集落の一部が発見された。残念ながら集落全体の規模・構成は明確にしえない。しかし、遺跡は、今回の調査区よりやや東西に広い南北に延びる微高地に占地しており、基本的には発掘区に対し南北に拡がる集落の一部であろう。また、北50m程に設定したⅢ区の調査では平安時代にかかる遺物はほとんど出土しておらず、おそらく集落の主体部は南方向へ拡がる可能性が強い。

集落が営まれた時期は、甲斐編年によるⅣ期からXIII期に及ぶものである。前節ではその間、集落が継続して営まれたものと考えた。しかし、IX～XI期の遺構は検出されておらず、土器滴り等にわずかにその時期の遺物が混在することから、該期にも集落が継続していると考えた。しかし土器滴り2の時期はⅣ期を主としたもので、板に土器滴り2の性格を何らかの屋外祭祀に伴うものと把えるならば、そのような、おそらくは集落共同での祭祀を必要とする動搖があった事を示すものと考えられる。IX～XI期の遺構が検出されなかった事は、集落全体について絶対とは言えないまでも、何らかの消長があったと考えることもできよう。

#### 引用参考文献

- 関根孝夫 「六科丘遺跡」 深谷町教育委員会他 1985  
赤塚次郎 「『S字甕』について」「矢山式土器とその前後」 東海埋蔵文化財研究会 1986  
山下孝司 「坂井南遺跡」 菲崎市教育委員会他 1988  
石野博信 「日本原始・古代住居の研究」 吉川弘文館 1990  
若狭徹 「保渡田Ⅶ遺跡」「東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器 第Ⅲ分冊関東・中央高地篇」 東海埋蔵文化財研究会 1991  
綿田弘実 「西条・岩舟遺跡群」「東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器 第Ⅲ分冊関東・中央高地篇」 東海埋蔵文化財研究会 1991  
中山誠二 「甲斐弥生土器編年の現状と課題」「研究紀要」9 山梨県考古博物館他 1993  
小林健二 「山梨県域の土器様相」「東日本における古墳出現過程の再検討」 日本考古学学会新潟大会実行委員会 1993  
小林健二 「外来系から在来系へ—甲斐のS字甕の変遷—」「研究紀要」9 山梨県考古博物館他 1993  
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第1集「久保屋敷遺跡発掘調査報告書」山梨県教育委員会 1984  
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第78集「平野遺跡発掘調査報告書」山梨県教育委員会 1983  
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第137集「大塚遺跡」山梨県教育委員会 1997  
坂本美夫・末木建・堀内真「甲斐地区」「神奈川考古」第14号「奈良・平安時代の諸問題—相模国と高辻地域の様相」神奈川考古同人甲斐 1983  
「甲斐型土器—その編年と年代—」山梨県考古学協会 1992  
坂本美夫 「甲斐地域の奈良時代土器編年」「甲斐の成立と地方的展開」角川書店 1989

## 附 章 櫛形町枇杷B遺跡出土土器胎土の分析

川崎テクノリサーチ株式会社  
分析・評価センター  
埋蔵文化財調査研究室  
岡原正明・伊藤俊治

### 1. はじめに

山梨県櫛形町教育委員会が発掘調査を実施した、櫛形町枇杷B遺跡から出土した土器片の胎土について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査の依頼があった。

調査の観点として

- ①胎土分析、②土器片の産地推定、③観察上の特記事項など、  
を中心に調査したので、その結果について報告する。

### 2. 調査項目及び試験・検査方法

#### 1) 調査項目と外観観察所見

資料NO	出土遺跡名 と地点	重量 g	外観 写真	成分 分析	外観観察の所見
1	枇杷B遺跡 Ⅲ区 2住 NO.253	4.6	○	○	長さ35~40mm、幅30mm、厚さ3mmの土器片。外面にはササラでつけた様な線状痕が見える。厚みはほぼ均一、断面は酸化し褐色であるが灰色の粘土が付着している。微細な雲母片や珪砂を含む胎土である。
2	枇杷B遺跡 Ⅲ区 1住	5.7	○	○	長さ40mm、幅25~30mm、厚さ3~4mmの土器片。枇杷B 1の資料と同様すじ状痕が外面にあり、内外面とも黒褐色である。外面のすじ状痕は一部削り落とされている様を呈す。微細な雲母片や珪砂を含む胎土である。
3	上の山遺跡 2層 (参考)	73	○	○	S字状口縁土器の口縁部破片。長さ65mm、幅20mm、厚さ5.5mmで、非常にきめ細かな土を使用している。色は鉄分が酸化されたためやや濃い肌色を呈する。口縁部は丁寧な作りで滑らかに仕上げられている。
4	標準資料 JG-la			○	工業技術院地質調査所提供標準資料 分析値が確定公認されている標準資料のデータとの比較分析を行い指標元素の存在比率を探る。指標元素: Rb, Sr, Ca, K

#### 2) 重量計測

計量は電子天秤秤を使用して行い、少数点第1位で四捨五入してある。

### 3) 外観の観察と写真撮影

上記各種試験用試料を採取する前に、試料の両面をmm単位まであるスケールで同時写し込んで撮影した。また、試料採取時の特異部分についても撮影を行った。

### 4) 蛍光X線分析法による化学成分分析

堀場製作所製蛍光X線分析装置(EMSA-500)を用いて完全非破壊分析を行った。この装置は測定室が径150mm、高さ70mm程あるため、今回の資料はそのまま測定部に設置可能であった。測定条件はそれぞれの分析結果のスペクトル図の下に記載した。

測定は指標元素(火山活動等によって生成した岩石の風化物である粘土が示す産地特定の微量元素)として、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、カルシウム(Ca)、およびカリウム(K)等に重点を絞って行った。

### 3. 調査及び考察結果

胎土の検討は標準好物資料(国土地理院地質調査所・JG-la)を基準に胎土中の微量元素すなわち、カリウム(14-K)とカルシウム(20-Ca)、ルビジウム(37-Rb)とストロンチウム(38-Sr)等の含有比を考察する三上利一の方法を応用し進めることとした。

化学成分分析結果を図65～66に示した。最上段にはスペクトルが、各元素の測定結果は最下段に記載した。まず珪素(14-Si)の強度(cps/μA)を基準としカリウム、カルシウム、鉄、ルビジウム、ストロンチウムおよびジルコニウム元素の強度比を計算で求めた。次に標準鉱物試料の強度比と比較し胎土中の元素存在比を求めた。

その結果を次表に示す。

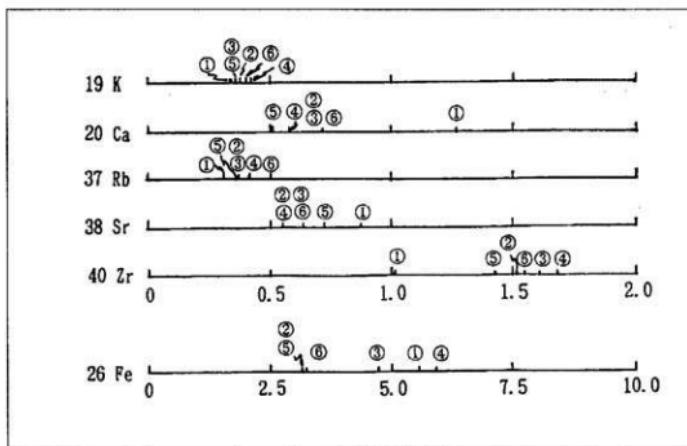
第32表 土器片胎土中に元素存在(図版20)

元素	19 K	20 Ca	26 Fe	37 Rb	38 Sr	40 Zr
出土跡	枇杷B 1 ①	1,194 /0.34	2,918 /1.27	256.0 /5.54	1,208 /0.31	4,416 /0.87
	枇杷B 2 ②	1,323 /0.38	1,669 /0.73	150.2 /3.25	1,463 /0.38	2,780 /0.55
	上の山 ③	1,255 /0.26	1,660 /0.72	220.7 /4.77	1,497 /0.38	3,187 /0.63
標準鉱物試料 JG-la	3,471	2,302	46.24	3,902	5,089	3,445

上段 相対強度/下段元素存在比

この結果を基にそれぞれの存在元素比をプロットし図65に示した。

この図を良く観察すると土器②、③は互いに比較的似た値を示している。しかし、①は前述の2者とは互いにかけ離れた数値を示している。



第65図 表32の土器片の元素存在の分布状況

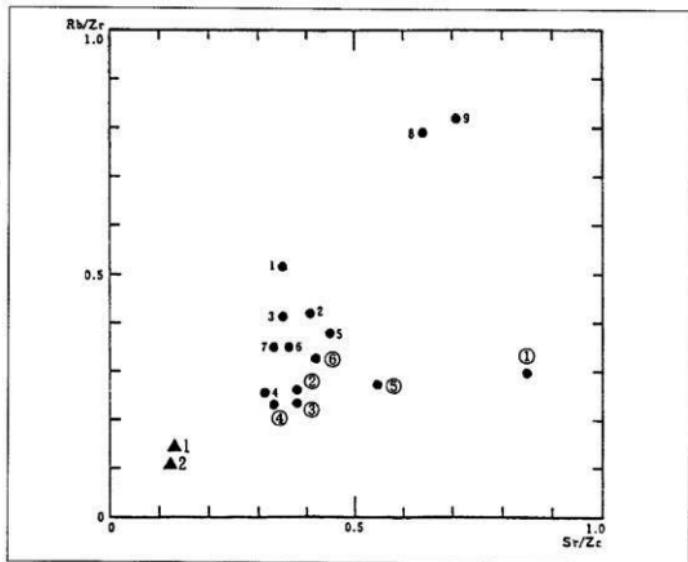
次に、表32の元素存在比の値からルビジウム／ジルコニウムおよびストロンチウム／ジルコニウムの元素比を計算で求めた。その結果を表33に示す。

同時に当埋蔵文化財調査研究室及び山崎の研究による緑釉陶器胎土のデータも併記した。

第33表 土器片胎土中の元素存在比

地 方	遺 跡 ま た は 窯 址 名	Rb/Zr	Sr/Zr
山 梨	① 楠形町枇杷B遺跡①	0.30	0.85
	② 楠形町枇杷B遺跡②	0.27	0.39
	③ 楠形町上の山遺跡	0.24	0.39
福 島	▲① 福島県塩川遺跡 文献2)	0.14	0.13
	▲② 福島県大猿塩田遺跡 文献3)	0.10	0.12
愛 知	1 小牧市篠岡 以下文献4)	0.52	0.35
	2 口進町岩崎24号窯	0.42	0.41
	3 名古屋市鳴海NN245号窯NO.1	0.41	0.35
	4 名古屋市鳴海NN245号窯NO.2	0.25	0.31
	5 名古屋市鳴海NN246号窯	0.38	0.45
京 都	6 京都市石作窯NO.1 以下文献4)	0.35	0.37
	7 京都市石作窯NO.2	0.35	0.34
	8 京都市小塩窯NO.1	0.79	0.64
	6 京都市小塩窯NO.2	0.82	0.71

さらにこれらの値を基に元素比をプロットし図66にしめした。



第66図 表33の土器片および陶土の元素比分布

図2からは次のことが考察される。

- 1) 土器②、③は比較的近似なグループに纏まって分布する。
- 2) これらは愛知県地方の陶土の成分に似ている。
- 3) 土器①は愛知県グループとは異なった分布を示す。

#### 4.まとめ

調査・考察の結果を纏めると次のように考えられる。

- 1) 土器②(枇杷B2)、③(上の山)は愛知県地方の陶土の成分に似ており、愛知県地方からの移入土器の可能性ありとの推定に一致する。
- 2) 土器①(枇杷B1)の胎土は上記のグループとは別の産地に属するものと考えられる。

#### 参考文献

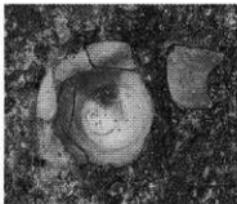
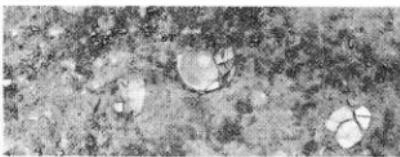
1. 三辻利一他：『須恵器のケイ光X線分析』X線分析の進歩 [10] 61~65 (1979)
2. 川鉄テクノリサーチ(株)：福島県塙川町鏡ノ町遺跡「奈良三彩様小壺片の分析調査」：分析試験結果報告書 (1996.10)
3. 川鉄テクノリサーチ(株)：福島県常磐自動車道大旗田遺跡「鐵滓・鉄器および二彩陶器」：分析試験結果報告 (1997.3)
4. 山崎一雄：『日本出土の綠釉陶の科学的研究』；古文化財科学212~228

本章は、岡原正明・伊藤俊治両氏の報告から清水が抜粋したもので、表現に若干の変更を加えたのみで他は原報告のままである。

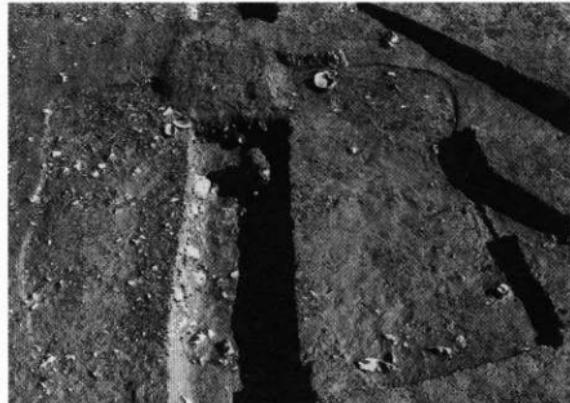
### 引 用 参 考 文 献

- 関根孝夫他 『六科丘遺跡』 楢形町教育委員会他 1985  
赤塚次郎 「「S字甕」について」「欠山式土器とその前後」 東海埋蔵文化財研究会 1986  
山下孝司 『坂井南遺跡』 並崎市教育委員会他 1988  
石野博信 『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館 1990  
若狭 徹 『保渡田Ⅳ遺跡』 「東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器 第Ⅲ分冊関東・中央高地篇」 東海埋蔵文化財研究会 1991  
細田弘実 「西条・岩舟遺跡群」「東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器 第Ⅲ分冊関東・中央高地篇」 東海埋蔵文化財研究会 1991  
中山誠二 「甲斐弥生土器編年の現状と課題」「研究紀要」9 山梨県考古博物館他 1993  
小林健二 「山梨県域の土器様相」「東日本における古墳出現過程の再検討」 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993  
小林健二 「外來系から在来系へ—甲斐のS字甕の変遷—」「研究紀要」9 山梨県考古博物館他 1993  
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第1集『久保屋敷遺跡発掘調査報告書』 山梨県教育委員会 1984  
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第78集『平野遺跡発掘調査報告書』 山梨県教育委員会 1983  
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第137集『大塚遺跡』 山梨県教育委員会 1997

図版1



図版2



4号住居址全景



4号住居址竪



4号住居址遺物出土状況（部分）



5号住居址全景



5号住居址竪

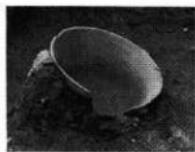
図版3



5号住居址竈周辺遺物出土状況



5号住居址竈内遺物出土状況



5号住居址遺物出土状況



5号住居址遺物出土状況（全景）

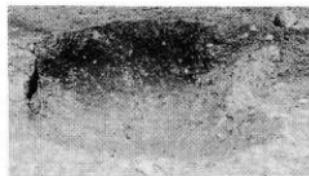


5号住居址遺物出土状況

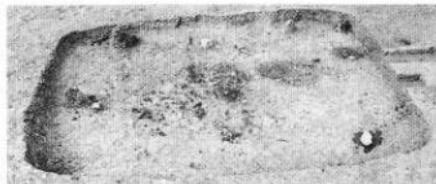
図版4



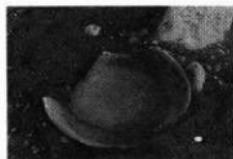
6号住居址全景



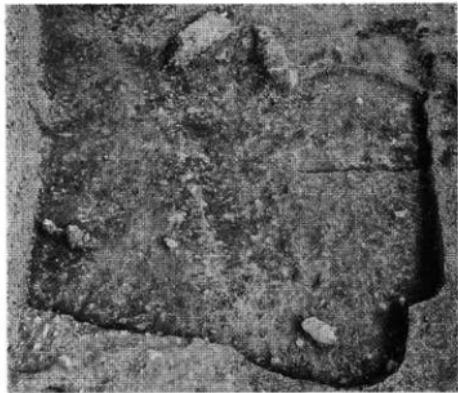
6号住居址甕



6号住居址遺物出土状況



6号住居址遺物出土状況（部分）

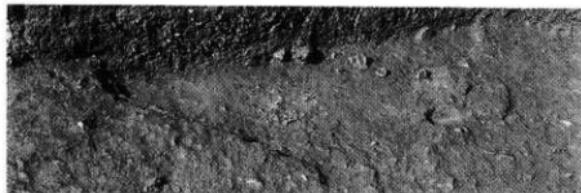


7号住居址全景



7号住居址甕

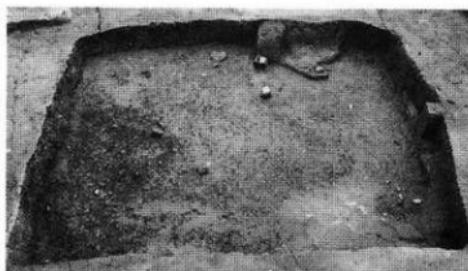
図版5



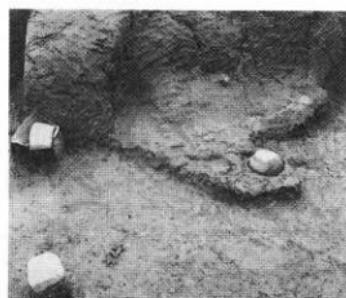
8号住居址全景



8号住居址竈



9号住居址遺物出土状況 (全景)



9号住居址竈周辺遺物出土状況

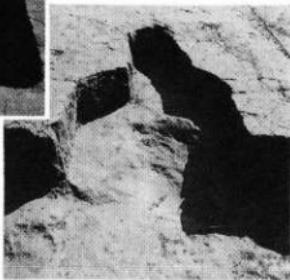


9号住居址遺物出土状況 (部分)

図版 6



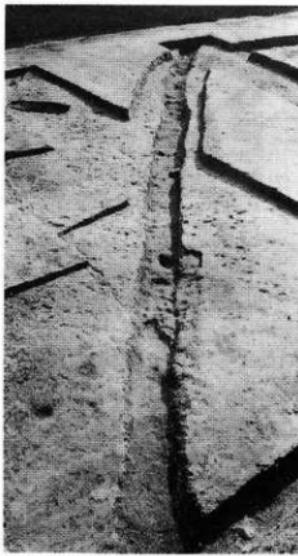
9号住居址全景



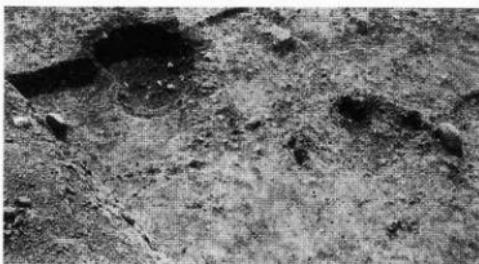
7号住居址竪



9・10号住居址全景



溝状遺構



11号住居址全景

図版7



2号据立柱建物遺構



6号据立柱建物遺構

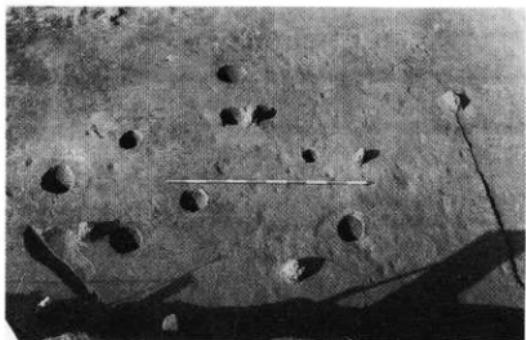


4号据立柱建物遺構

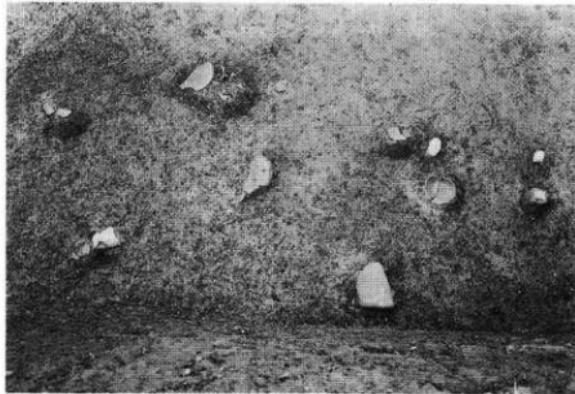


5号据立柱建物遺構

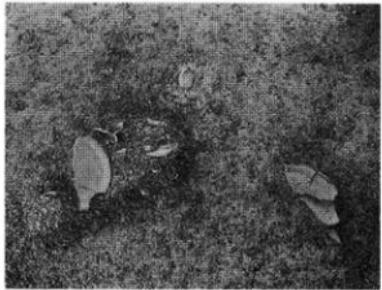
図版 8



土器溜り 2 下層ピット群



土器溜り 2 遺物出土状況



土器溜り 2 遺物出土状況（部分）



土器溜り 2 遺物出土状況（部分）

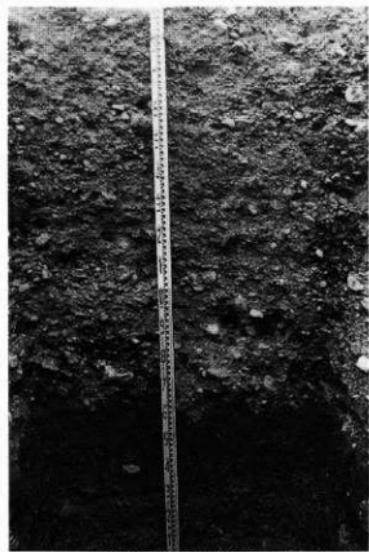
図版9



II区北より柳形山を  
望む



II区 全景(南より)



I区 深堀トレンチ 断面



I区 作業風景

図版 10



III区 1号住居址（新）全景



III区 1号住居址（古）（旧）全景



P 1



P 2



P 5



P 4

III区 1号住居址（古）（旧）内ピット

図版 11



III区 1号住居址(旧)炭化材出土状況



III区 1号住居址(旧)炭化材出土状況(西部)

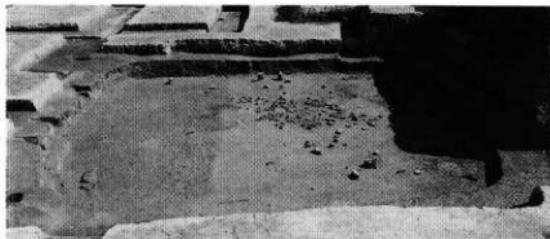


III区 1号住居址(旧)炭化材出土状況(中央部)



III区 1号住居址(旧)炭化材出土状況(東部)

図版 12



III区 2号住居址（新）遺物出土状況（西より）



III区 2号住居址（新）遺物出土状況（北より）



III区 2号住居址（新）遺物出土状況（部分）



S字状口縁甌出土状況

图版 13



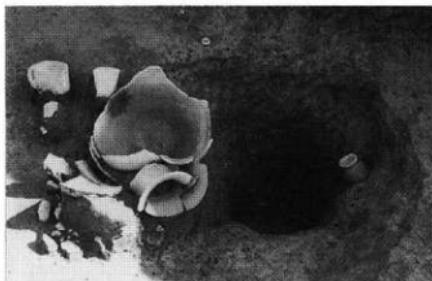
III区 2号住居址(新) 遗物出土状况



III区 2号住居址(新) P12 遗物出土状况



III区 2号住居址(新) P1 遗物出土状况

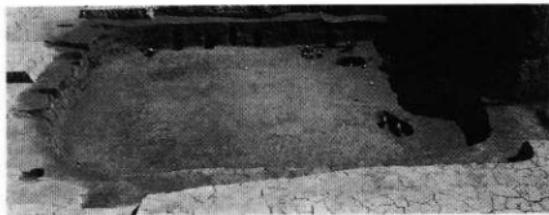


III区 2号住居址(新) P11 遗物出土状况

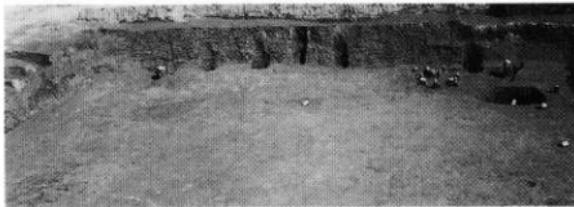


III区 2号住居址(新) 北西隅 遗物出土状况

図版 14



III区 2号住居址(旧) 遺物出土状況



III区 2号住居址(旧) 東部

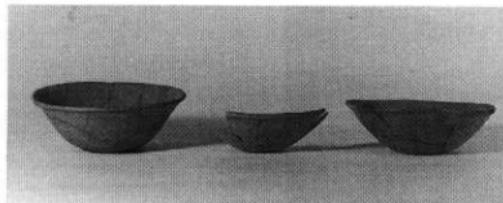


III区 2号住居址(旧) 東壁際 柱穴



III区 2号住居址(旧)  
全景

図版 15



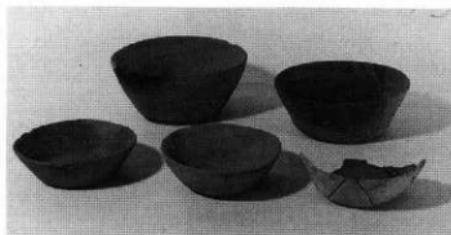
1号住居址出土土器 No.1・3・2



3号住居址出土土器 No.1



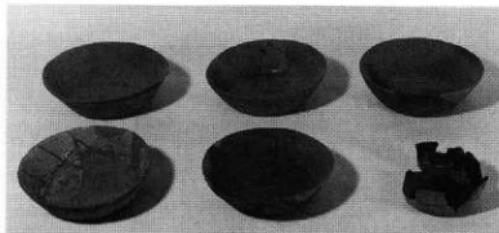
4号住居址出土土器 No.6・7・9・1



5号住居址出土土器 No.1・9・6・8・7



同 No.1



6号住居址出土土器 No.16・14・13・15・12・1

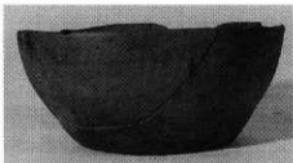


7号住居址出土土器 No.1

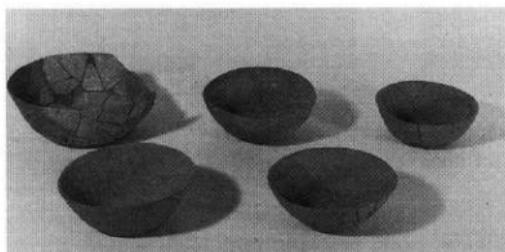


8号住居址出土土器 No.1

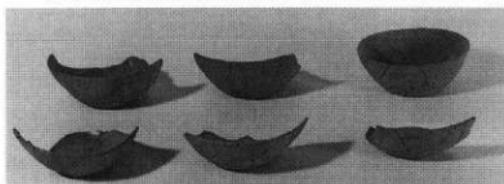
図版 16



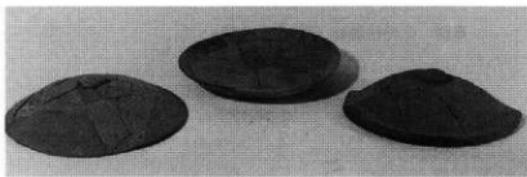
9号住居址出土土器 No.3・1



No. 56・1・15・70・8



No. 3・2・17・21・7・12



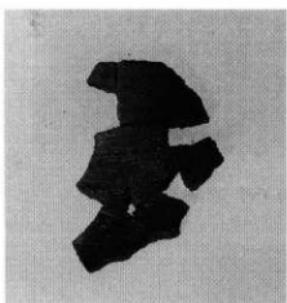
No. 66・63・74

土器溜り 2 ピット群II出土土器



ピット群I 出土土器 No. 1・4

図版 17

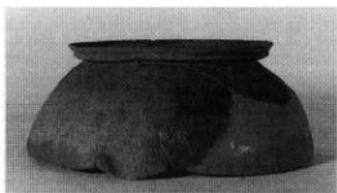


No.1



No. 2

III区 1号住居址（古）（旧）出土土器



No.13

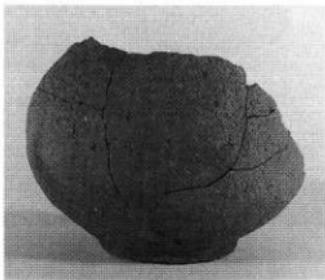


No.11

III区 2号住居址（新）出土土器



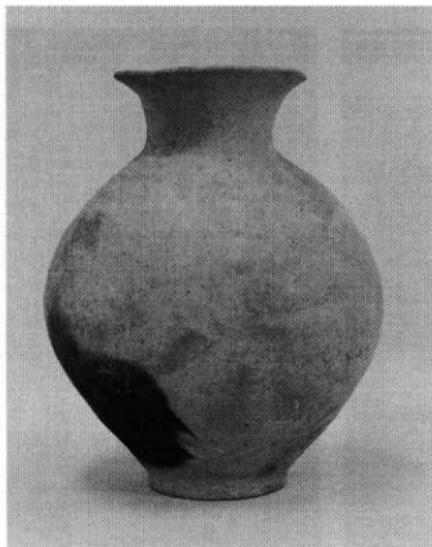
No. 8



No. 2

III区 2号住居址（旧）出土土器

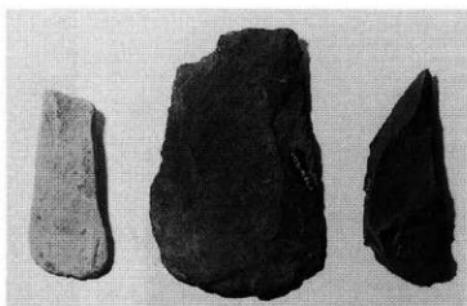
図版 18



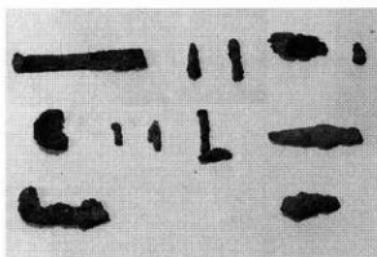
III区 2号住居址(旧)出土土器 No.1



遺構外出土土器 No.5

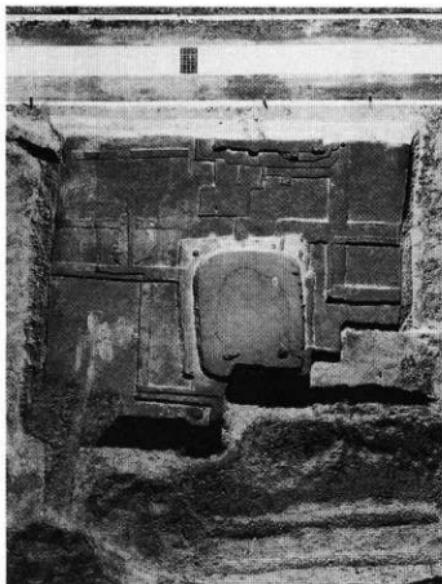


出土石器

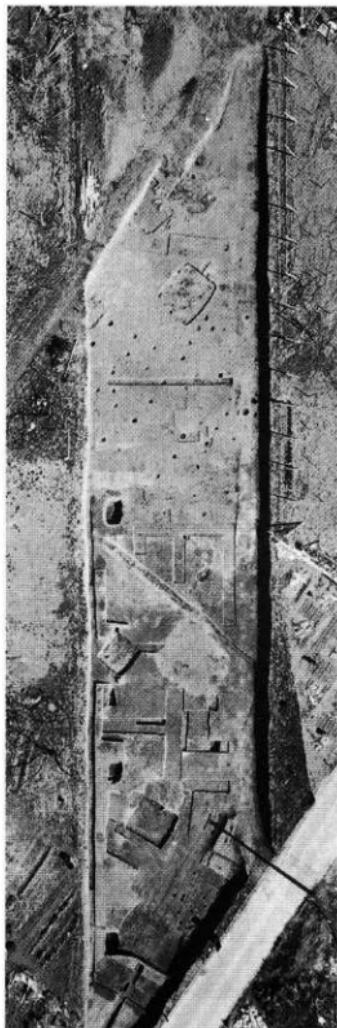


出土鉄製品

図版 19



III区 全景



II区 全景



調査区近景（南西より）

図版 20



枇杷 B 遺跡 III 区  
2 号住居址(新)出土



枇杷 B 遺跡 III 区  
1 号住居址(新)出土



上の山 遺跡出土

# 報告書抄録

ふりがな	びわ									
書名	枇杷B遺跡									
副書名	主要地方道韭崎櫛形豊富線内枇杷B遺跡発掘調査報告書									
シリーズ名	櫛形町文化財調査報告			シリーズ番号	No-17					
編著者名	清水 博									
発行者	櫛形町教育委員会									
編集機関	櫛形町教育委員会									
所在地	〒400-0306 山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原397-1 TEL 0552-82-0108									
発行年月日	平成10年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因			
びわ 枇杷B遺跡	やまなしけんなかこまぐん 山梨県中巨摩郡 （山梨縣中巨摩郡） 櫛形町小笠原字枇杷 1841他	193909	243 35度 36分 30秒	138度 28分 35秒	19961001 ～ 19970331	2200	主要地方道韭崎櫛形豊富線建設に伴う発掘調査			
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項					
びわ 枇杷B遺跡	集落	弥生～古墳 時代	竪穴住居址 焼土遺構 土器溜り	5軒 2 1	弥生～古墳時代の土器・ 石器・鉄製品					
		平安時代	竪穴住居址 掘立柱建物 柵列状遺構 土壤 ピット 溝状遺構 ピット群 土器溜り	11軒 6軒 2 4 3 1 2 1	平安時代の土器・鉄製品					

柳形町文化財調査報告 No.17

## 枇杷B遺跡

平成10年3月31日 発行

編集発行 柳形町教育委員会  
印刷 山梨県中巨摩郡柳形町小笠原  
(株)山肩印刷  
山梨県中巨摩郡柳形町小笠原

